
UNIVERSAL MANAGER

結城陸空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

UNIVERSAL MANAGER

【Nコード】

N6345A

【作者名】

結城陸空

【あらすじ】

広大な宇宙の謎を解き明かすという目標を持って主人公の拓也はあるサークルに入る。しかしそこで待っていたのは…。

〈Prologue〉 支配者（前書き）

UNIVERSAL MANAGERをご覧頂きありがとうございます。
皆様に面白いと言ってもらえるように頑張りますのでどうか
感想、評価など頂けると幸いです。応援メッセージもお願い致します。
かなりの長編になる予定ですので末永くよろしくお願いします。

Prologue 支配者

この宇宙が誕生して約130億年もの月日が流れた。地球が誕生したのは約46億年前。そして人類の誕生はわずか、400万年前。この宇宙が誕生してから莫大な時間が経っているのに、この星に住む生命は、自分達の宇宙のことをなにも知らな過ぎるのではないだろうか。この宇宙に我々地球の生物以外に生命は存在するのか、存在するならどんな生物なのだろうか。

我々はどこからやってきて、いかにして生まれ、そしてどこへいくのか。

謎も……、興味も尽きることはない。

果たしてこの広大な宇宙の支配者とは誰なのか……。宇宙の壮大な謎が解き明かされるときはくるのだろうか……。すべての謎が明かされたときその先に待つものは……。

Prologue 支配者（後書き）

作品の性質上、一部実名が出てきますが、SFファンタジーとして楽しんで頂ければ幸いです

Season 1 - 1 脅威の支配者

桃色に彩る桜の花が満開の季節、それは別れの季節でもあり、新しい出会いの季節でもある。

人は出会い、子孫を残し、繁栄してきた。生物学的には普通のこと。でも子孫を残すのはなぜだろう。この星の生命はすべて次の世代に命を繋げ、己はやがて死んでいく。記憶の連鎖とも言うべき繁栄。過去は未来へ面影を残し、未来は新しいモノを生み出していく。そうしてこの星の生命は進化という繁栄をし、生きてきた。

だが……、なんのために？

進化の先にはなにがあるのか……。

すべての生命がたどり着く先とはなんなのか。

誰もその答えを知るものはいない……。

今は……まだ。

「こんちわー!!」

元気のある声で一人の青年が挨拶をした。青年が挨拶をしているのは、とある大学のとあるサークルの部屋に向かった。そこに人は誰もいない……。青年は静かに部屋を見渡す、部屋の窓際には金

魚が一匹、水槽の中を泳いでいた。

「…………部屋間違えたかな？」

青年は部屋の入り口に貼ってある張り紙を見た。そこには『宇宙の謎研究サークル』と書かれている。

「部屋は間違ってたないな……。なんで誰もいないんだろ？　おい！　こんちわー！」

すると部屋の隅のほうで何かが落ちる鈍い音がした。

「イタタ……、もうっ！！　なんなのよ一体！！」

「ん？　誰あんた？」

床に落ちたのは、女性だった。きれいに茶髪に染まったストレートの髪にクリツとした大きな眼はいかにも今風な感じの可愛い女性だった。

「…………あ、は、はじめまして！　新井拓也といいます！　このサークルに入りたくて来たんです！」

「え？　なに？　入りたいの？　ていうかもう少し声のボリューム落としてくれない？　うっさいんだけど」

「あ、すいません」

見た目の可愛さに似合わず、口の悪い女に拓也は早くも完全にペースを巻き込まれていた。

「で？ このサークルに入りたいんだって？」

「あ、はい」

すると女性は手を差し出した。拓也は呆然と立っている。

「なにやってんのよ！ サークルの先輩が床に倒れてるんだから起こしなさいよ！！」

「あ！！ すいません！！」

拓也は、このときキツイ女の人だと本気で思っただろう。拓也の手を借りて立ち上がった女の人は拓也のほうを見て言った。

「ようこそ、我が『宇宙の謎研究サークル』へ！！ 私は、斉藤美奈。よろしくね」

女性の先ほどまでの態度とは違い、きちんとした挨拶に拓也は少しホッとした。

「たつくん……腹減った」

「え？」

突然の言葉の驚き拓也は聞き逃してしまった。

「腹減ったってんだよ！！ なんか買ってきて来い！！」

「すみません！！」

この瞬間ホツとしたのは気のせいだということに拓也は気がついた。拓也は急いでなにかを買いに部屋を出ようとした。

「待て！」

美奈の声が、部屋に響く。拓也は恐る恐る美奈の方を見た。

「私は、チャーハンね。ちゃんと温めて来いよ。それと飲み物はスポーツ飲料にしるよ。わかった？」

拓也は少しビビリながら素直に返事をした。この時点で完全に立場が上と下に分かれていた。

「あ、それと……、走れよ？」

「え……？」

「私待たされるのが嫌いなんだよ。だから走って買ってこい！」

もはや完全にビビッている拓也には入ってきた時の元気のよさはなかった。素直に返事をし、拓也は走って食べ物を買に行った。そしてコンビニで品物を選びながら拓也は思った。あのサークルの支配者は絶対にあの人だと。

Season 1 - 2 目的

コンビニから帰った拓也は美奈に食べ物を渡す。すると美奈の口から拓也の予想していた言葉が返ってきた。

「ありがとう、おごってくれて」

美奈は満面の笑みで拓也に言った。ほんとに恐ろしい女だと拓也は思った。美奈は部屋に置いてある机の上に腰掛けて話した。

「しかし、アンタも珍しい子ね。このサークルに入りたいなんて、部屋間違ってるんじゃないの？」

「いえ、この『宇宙の謎研究サークル』に入りたかったんです。そのためにこの大学を受けたようなものですから」

拓也はすかさず答える。

「このサークルに入るために？ …… たつくんって馬鹿？」

「確かにそう思われても仕方ないです。でも僕にはどうしてもこういう活動してるところが必要なんです」

「なに？ わけあり？」

美奈は興味がありそうな顔付きで言った。

「ええ、でも今は話したくは……」

「ハッ？」

美奈のハッという顔に拓也はすかさず、

「じゃなくて、どうしても聞いてほしいんです」

「いいわよ、話しなさい」

「その前に聞いてもいいですか？」

「あん？ なによ？」

美奈は不機嫌そうな顔になった。

「さっき何してたんですか？」

「あー、えっとね、寝てたのよ」

「え……、寝てた？ なんですか？」

「なんでって、別にすることもないし、眠たかったし」

拓也は啞然としていた……がすぐに切り返し

「どうして！ 宇宙の謎を探らなきゃ！！」

「うっさい！！ 声大きい！！」

美奈の突っ込みが驚異的な速さで入った。

「仕方ないでしょう。謎を探ろうとしても人手不足だし、なんの情報もないし、探りようがないのよ……それに」

拓也が冷静な顔付きで聞いた。

「美奈さん、このサークルの目的は何なんですか？」

「え？ だから宇宙の謎を研究するのよ。宇宙の誕生とか、宇宙人はいるのかとか」

「……美奈さんは宇宙人の存在は信じるんですか？」

「そりゃあまあ、信じてるわよ」

拓也の真剣な顔つきに美奈は少し勢いを奪われていた。

「だったら、この話を聞けばやる気が出るはずですよ」

「だから、なんなのよ。早く話さない」

拓也は後ろにあった椅子に座り、話を始めた。

「あれは今から三年前……僕が十五歳の時の話です。当時僕は、バスケット部に入っていてあの出来事は夏の強化合宿中に起こったんです」

「僕はあの時まで、そんなことに少しも興味がなかった。でもあの出来事は僕のすべてを変えた。そう、彼らが……」

そついい終わると拓也は美奈のほうを見た。

Season 1 - 3 遭遇

三年前

「あー！ 疲れた！」

拓也の声が響き渡る。

「まだ一日目なのにもうバテバテだよ。まだ六日もあるなんて信じられないよなー」

部活仲間が言った。バスケット部の強化合宿のため、拓也達バスケット部はある山に来ていた。ここは星がきれいである有名な場所で、バスケット部達は毎年部活が終わり夜になると、星をみんなで見に行くことになっていた。先輩達はすぐはりきっている。もうバテバテで早く寝たい拓也にとって、嫌で仕方がない行事だった。

「さあて着いたぞ！」

先輩の大きな声が響き渡る。そこは広い草原で、見渡しのきく星空満天の綺麗で空気の澄んだ場所だった。時折吹く静かで涼しい風が疲れを癒してくれるようだった。先輩達は天体望遠鏡の準備をしている。拓也はそれを手伝いに行った。しばらくして、望遠鏡の準備が整い、天体観測が始まった。

そこから見える星空は、都会とは比べ物にならないほどの数の星が輝き、星を見ていると吸い込まれそうになるくらい綺麗だった。拓也も疲れてはいるものの、星は昔から好きだったので、積極的に天体観測に参加していた。

突然先輩の一人が大きな声でお決まりとも言える一言を放った。

「UFOだ!!」

一瞬場の空気がドヨツとしたが、ある種お決まりのような言葉とその場の空気により、だれもそれを信じなかった。だが先輩は続ける。

「ホラ、見ろよ！ あそこだ！」

先輩の指さすほうにみんなの視線がいく。その瞬間、その場にとすべての人間が息をのむことになる。

そこには、星空全体を覆い隠すほどの巨大さをした物体が空中に浮き静止していた。物体は物音一つ立てずに空中で完全に静止している。しかし、それはテレビで見るように光を放ってはいなかった。物体の表面は薄黒くところどころ電球がついたように光り、六つほど窓のようなものが並んでいた。形は葉巻型とでも言うべきか。

それは紛れもなくその場にいた全員が目撃したUFOだった。しかし、それだけでは終わらなかった。真ん中あたりの窓のようなところに、人間のような影がたくさん並んでいた。すると望遠鏡で見ていた一人の先輩が突然叫んだ。

「宇宙人だ！ グレイだよ！」

全員がその先輩を見た。

「テレビとかでやってるような奴らだ！ 灰色の肌に大きな頭、黒

い大きな目、小さい口！ まさにグレイだよ！」

その先輩の顔は恐怖と興奮で訳が分からなくなっていた。

突然、さっきまで光りを放ってなかった物体が金属同士を擦るような金属音と共に光りを放ち始めた。それは七色に光り、その場にいた全員を飲み込むようだった。拓也は、その光りに目を開けておられず目を自らの手で覆い隠す。やがて金属音は鳴り止み、光りが薄れていき拓也は覆い隠していた手を下に下ろした。そして、拓也の目は驚くべきものを見ることになる。拓也の前には、灰色の肌に大きな黒い目をした生き物が立っていた。

season 1 - 4 選ばれし者

拓也はゆっくりと周りを見渡す。そこは何もない真っ白な空間が広がっていた。灰色の生き物が何体かいる。そのうちの一体がゆっくり拓也のほうに近づいてきた。しかし、歩いている様子はなくまるで空中に浮いているようだった。灰色の生き物は拓也のすぐ目の前までやってきた。

すると突然拓也の頭に激痛が走った。拓也はあまりの激痛に頭を抑え、うずくまる。と、すぐに頭痛はなくなった。拓也は再び灰色の生き物のほうを見る。灰色の生き物はうずくまったままの拓也のほうを黒い大きな目でじっと見ている。

後ろのほうから、もう一体同じ灰色の生き物が出てきた。双子のようにそっくりだった。その灰色の生き物の小さな口がゆっくりうごく。

「すまなかった。我々はおまえに危害を加えるつもりはない」

綺麗な日本語で灰色の生き物は話かけてきた。

「どうやらおまえはまだ覚醒していないようだ。だからテレパシーができなかったんだ。激痛はそのせいだろう」

いままで話さなかった拓也の口がようやく動いた。

「あんた達は一体？ 宇宙人なのか？」

「……いまはまだその答えを知るときではない、だが、いずれその

答えを知る時が来るだろう」

無表情の顔で灰色の生き物は答えた。

「あんた達はなにしに来たんだ？ 俺をどうするつもりだ？」

拓也は恐怖を抑えながら賢明に聞いた。

「……怖がらなくていい。我々はお前の敵ではない。我々はお前に会いにきたのだ」

「俺に？」

「お前は、我々が捜し求めてきた『アダム』なのだ。いまは覚醒していないから自覚がないだろうが、いずれ分かれるときが来る」

「アダム？」

「もう、戻るがいい。選ばれし者『アダム』よ。またいずれ会うときがあるだろう。そのときおまえはすべてを知っているはずだ」

灰色の生物がそれを言い終えた瞬間、辺りが再び七色の光りに包まれ灰色の生き物は光りのなかに消えていった。

光りが再び消えると拓也は草原の真ん中に立っていた。空を見上げるとそこには七色に輝く物体が、金属音と共にゆっくり上昇していた。それは、まるでこの世に存在しえないほどの圧倒的な存在感を示していた。物体はしばらく上昇すると、今度はとんでもないスピードで空の彼方へと消えていった。

拓也は物体が消えたのを確認すると辺りを見渡した。そこには、ほかの部員達が全員倒れていた。拓也は慌てて近く先輩の所に駆け寄った。どうやら、眠っているだけのようだ。しかし、それに安心した瞬間拓也はもう一つとんでもないものを発見する。そこには、草原の草が広範囲にわたって中心のほうになぎ倒され、サークルを形成していたのだ。

Season 1 - 5 始まり

「とまあそんなことがあったんです。だから僕はなんとしても答えを知りたいんです」

長話を終えた拓也は、一息ついて手に持っていたペットボトルのお茶を飲んだ。それを見ていた美奈が突然拓也の頭を叩く。その衝撃で拓也は口に含んだお茶をこぼしてしまった。

「たつくんすごいじゃない！ それよ！私が求めていたものは！この宇宙の謎研究サークルはね！あなたのような人を探していたのよ！」

先ほどまでとは違い目を輝かせながら話す美奈を見ていて拓也は

「はあ……」

というしかなかった。

「アダムかー！ いいじゃない！ そういう発想は大事よ！」

「え？」

「作り話にしちゃあ上出来よ！ あなたぐらいの想像力があれば宇宙の謎も解きやすくなるかもね」

「え……、いや、作り話じゃ……」

「いいこと！ 宇宙の謎を探るのには常識に捕らえられてちゃだめ

よ。宇宙にはまだまだ私達の知らない謎がたくさんある。天文学者じゃない私達アマチュアは常識に捕らわれない自由な発想で謎を追求していくのよ。そしたら、絶対に真実に近づくことができるわ！
ありがとね。たっくんの話のおかげでやる気が出てきたわ！」

人の話を聞かない美奈に拓也は呆然とし、また

「はあ……」

というしかなかった。

「それじゃあ、よろしくね！ たっくん！ これから一緒に宇宙の謎を解き明かしていきましょう」

「あ、はい、そうですね」

そう拓也が答えた瞬間、美奈の顔が不機嫌になった。

「『あ、はい、そうですね』ー？」

「おまえ、それでも男か！ 男ならいくわよって言ったら『おー！』くらいいいなさいよ！ 肝っ玉小さいの？」

この時、拓也は口が悪い上に下品な女だと、本気で思っただろう。

「よし！ それじゃあ宇宙の謎を解き明かすぞー！！」

「お、おー！！」

「……あ、盛り上がってるとこ悪いんだけど、実はこのサークル人

数不足で閉鎖されるかもしれないんだよね」

「えっ!?!」

あまりの驚きに拓也は美奈のほうを見た。美奈は片手を頭の後ろに当て「えへへ」と笑っている。それをみた拓也は寒気がした。そして

「たっくん……」

美奈は可愛い笑顔とやさしい声で呼ぶ。

「部員集めて来い」

美奈の表情と声が悪魔に変わった。拓也はこのとき本気で思っただろう。この口が悪くて、下品な女は、きっと二重人格なんだろうと……。

Season 2 - 1 謎のDVD

『宇宙の謎研究サークル』というなんとも奇妙なサークルに入った拓也。そこは美奈という支配者が統治するサークルだった。

まだ桃色の桜が満開の頃、拓也はまだ覚えたての大学への道を歩いていた。そして、昨日自分が犯したあやまちを悔いていた。あのサークルに入ったことを……。

「それにしても後一人か……。美奈さんの話によると、大学にサークルとして認めてもらうためには最低でもメンバーが三人必要らしいから後一人見つけなきゃな」

つい一人事で嘆いてしまうくらい、拓也は落ち込んでいた。

「それにしても、おかしいと思ったんだよ。ほかのサークルはちゃんとプレートだったのにあそこだけ張り紙だったもんな」

「もしかしてあの部屋も奪ったのかも……」

そう思うと拓也は寒気がした。

大学に着いた拓也は教室には向かわず、すぐにサークルの部屋に向かう。美奈より後に部屋にいったら何を言われるかわからないからだ。拓也はそれほど、女性が苦手なわけではない。むしろ女性を引っ張ることに長けてるくらいだ。過去に彼女もいたことがあるし、男友達も女友達も多い。大学に入ってからすぐに友達も出来たし、明るい性格も幸いして、世渡り上手となっていた。

そんな拓也も美奈だけは苦手だった。

美奈は拓也より一つ上の十九歳。女性としてみれば、誰でも見とれてしまうような可愛さを持っている。きれいに茶髪に染まったセミロングのストレートの髪にクリツとした大きな眼。スタイルも悪くないし、体育会系の健康的な身体をしている。

しかしそれは見た目の問題で、中身はボーイッシュを超えた男そのもの。気に入らないことはしない。自分の興味のあることにしか動かない。人を簡単に利用する。人の話聞かない。その上人を召し使いかなにかと勘違いしているとしたか思えないような言動と行動。会ってまだ一日なのに拓也はまるで美奈のすべてを見たかのように美奈に対して嫌悪感を抱いていた。恐らくそれに勝る理由がなければ、拓也は一日であのサークルをやめていただろう。

「おはようございまーす!!」

肩に力の入った拓也の元気な声が部屋に響きわたる。

「美奈さん、……来てないのかな?」

拓也は力の入っていた肩の力を抜きその場で部屋を見渡した。相変わらず金魚が一匹窓際の水槽に入って泳いでいる。この金魚に名前前は付いているのかと疑問に思いつながら部屋に置いてある机の上に一枚のDVDがおいてあるのを発見した。拓也は机に近づき、そのDVDを手取る。

「……まさか、美奈さんからの指令が入ってるんじゃないだろうな、もしそうなら見たくないな」

そんな不安を口に出して、言っていると美奈が意外と静かに部屋に入ってきた。

「あ、おはようたっくん。早いね」

「おはようございます。美奈さん」

美奈は拓也が手に持っているDVDを発見すると、

「それどうしたの？」

と聞いた。すかさず拓也が聞き返す。

「これ、美奈さんのですか？」

「知らないから聞いてるんでしょ？ たっくんってやっぱり馬鹿ね」

拓也は『馬鹿とはなんだ！』と言いたかっただろうが、美奈に逆らっても無駄なことは昨日で分かったので何も言わずに会話を続けた。

「部屋に着たらすでに机の上に置いてあったんです」

「ふーん……、もしかして」

「え？」

「謎の情報提供者からのディスクだったりして」

「謎の情報提供者？ だれですかそれ？」

「知らないわよ、謎だっって言ってるでしょ。馬鹿。よくドラマとかだとあるじゃない。調査に行き詰った時に現れる情報提供者が、きつとそれよ」

拓也はドラマの見すぎではないかと思ったが、そんなことを口に出すこともできない。美奈は拓也の隙を突いてDVDを奪い取った。貸してと言えば済むことだが美奈は奪い取った。

「あ、なにするんですか!？」

「なにつてDVDの中身を見るに決まってるでしょ!」

拓也は目の前で起こった理不尽な略奪に不満を感じ思わず口に出してしまった。美奈は拓也の言葉を軽く流し、部屋のパソコンにDVDを挿入し、再生した。

映像には三人の宇宙服のようなものを着た男が立っていた。なにやら話をしているようだが、英語で話していて、拓也は理解できなかった。

「英語だとなにを言ってるか分からないですね」

「え？ あんた馬鹿？」

相変わらず美奈のけなしがすごい速さで入る。

「英語もわかんないの？」

「え？ 美奈さんは分かるんですか？」

「当たり前じゃない！ 英語どころか、イギリス語、フランス語、中国語にギリシャ語に至るまで、全部で二十五ヶ国の言葉を話せるわよ」

「ええっ！ 美奈さんって天才……！？」

「当たり前でしょ。あんたとは頭のできが違うのよ」

美奈は胸の前で腕を組み、勝ち誇ったように鼻高々だ。

「仕方ないわね。わたしが同時翻訳してやるわ」

そういうと、美奈はもう一度DVDの最初から再生を始めた。

Season 2 - 2 月

再生したDVDには宇宙服のようなものを着た三人の男性が写っていた。全員ヘルメットはかぶっていない。なにやら三人が輪になって立ち話をしている。三人のうち一人は手に何かを持っていた。

映像が始まると同時に美奈の翻訳が始まった。映像は多少乱れていてそれほど綺麗ではないものの、映っているものはつきり見える。美奈は同時翻訳しようとしたが思わず口をつむぐ。映像に映っている三人の男性のうち一人の顔に見覚えがあったからだ。美奈にはそれが誰であるかがわかっていた。

そこに映っていたのはアメリカのアポロ計画のアポロ11号に搭乗し人類で始めて月に降り立ったニール・アームストロング船長の姿だったのだ。

拓也は映像を見ながら美奈が翻訳を始めないことに疑問を持っていたが、英語が分かるなどという負け惜しみの嘘をついたため引き下がる事が出来ず、どう謝ればいいのか考えているのだと思い、気にするなと言おうと喉まで声がでかけたときに美奈の翻訳が始まった。

「ニール船長、準備が整いました」

三人の中で一番身長の高い男が言った。

「それではいくか」

先ほど手に何か持っていたのはアームストロング船長だった。三

人はヘルメットをかぶらずにドアの前に立ちドアの右側にあるボタンを押した。ドアが静かにあまり音も立てずに開く。ドアの開いた先は真つ暗闇が広がっていた。微かに見える地面は砂で敷き詰められたようになっており、所々、でこぼこしている。まるで岩の砂漠に立っているみたいだった。先頭に立つアームストロング船長が一步外へ足を踏み出し言う。

「これが本当の人類にとっての始めての月への一步だな」

「そうですね、スタジオのセットなどではない本当の一步ですね。さあ彼らが待っています。いきましよう」

美奈はこの翻訳を終えたとき、DVDの再生を一時停止し、驚きの表情で言った。

「たつくん……、聞いたよね？」

「はい、聞きました」

拓也も今度は勘違いではなくほんとに気が付いたようだ。美奈がいつもの顔とは比べ物にならないほどの真剣な顔付きで言う。

「本当の人類にとっての一步ってどういうことかしら？ いま映っているこの場所は月ってこと？ 私がテレビで見た映像とは全然違うわ。スタジオのセットってどういうこと？」

美奈は率直に思った疑問を淡々と並べた。拓也も疑問の顔を浮かべている。

「前にテレビで見たことがあるわ。月面着陸は嘘だったとかいう…

…」

「スタジオで撮られた映像だとか、大気のない月面で旗が揺れていたりとかそういうことを言ってた。いま私達が見ている映像が本物だとしたら、本当にいままで私達が信じてた月面着陸への映像がすべて偽者ということに……」

「どっちが本当なんでしょうか？」

拓也が疑問をぶつける。

「……アポロは月へ行った……、でも映像は偽者だったのかも知れないわ。スタジオで撮影された偽者……」

「え？　なんでそんなことを？」

拓也はまた疑問をぶつけた。

「私を知るわけないでしょ。馬鹿。すこしは自分でも考えなさいよ」

そついうと美奈は再びDVDを再生した。

Season 2 - 3 月面にて

映像の再生と共に、美奈の翻訳が始まった。

「二ト船長、彼らがいます」

「うむ……」

映像には暗い空が映っている。星などまったく見えない暗い空。そんな先になにやら光る物体が地面に着陸している。それは軽い光りを発し、三人の男性の足元を照らしているようだった。

光る物体の前には三人の人間の姿をした生物が立っていた。拓也と美奈は映像を見て一瞬宇宙人かと思ったがその顔は地球人そっくりだった。

「例のものを持ってきた」

アームストロング船長が言いながら、なにかを持っている手を差し出した。光る物体の前に立っている三人は無言でそのなにかを受け取った。ものすごいスローペースで動く手。手の数は六本。六本？美奈はそれに気が付いた瞬間映像を止めた。

「ちよつとなにこれ!？」

美奈の歓喜にもた声が部屋に響く。映像をよく見ると、顔こそ地球の人間そっくりだが、頭に毛はなく、指はみんな六本ある上に、三人とも締め付けられそうなくらいピッチリとした服を着ている。再び映像が再生された。

無言のその男達はなにかを受け取った後、光りに包まれ消えていった。その直後、光る物体はゆっくり地面の中へと消えていった。

「任務完了だ。地球に帰還だ。オルドリン」

「はい」

そこで映像は切れた。

拓也も美奈も声が出ず静寂に包まれる。今の謎の映像にどうコメントしてよいのか言葉が見つからなかったのだろう。しかしその静寂は美奈が破った。

「本物よ……。間違いないわ」

「え？」

「これが本物の月面着陸映像なのよ！ 私達が見ていたのは全部スタジオで撮影された偽者だったのよ。それで合点がいくわ」

美奈はとても興奮している。それを拓也は驚きの表情で見ている。

「よく聞きなさい。アポロ計画のアポロ11号で紛れもなく人類は月に行ってるのよ。でも月の映像は公開するわけにはいかなかった。とは言っても当時アメリカはソ連と宇宙開発競争の真っ只中。そんなときに月への有人飛行を成功させたのに映像がなければなんにも証拠が残らない。だから精密なスタジオのセットで映像を撮影したのよ。一般公開用にね」

「月には彼らがいるのよ！ そう異星人が、だから映像は公開でき

ない。きっといまの六本指の生物がそうなのよ」

なるほどと言わんばかりに拓也は うなづく。

「となると、アメリカが隠した映像の中に隠されているヒント。それが月の謎を解く鍵になるわ。まず、アームストロング船長がもっていて、彼らに渡したなにか。そして、六本指の彼らと光る物体、一番の疑問は全員がヘルメットをしていなかったこと。まるで月に空気があるかのようにだった」

これは徹底的に調べる価値があると判断したのか美奈の目は感動で満ちている。拓也はそんな美奈を見て、自分が探している答えに繋がるのではないかと期待を高めていた。

「あ、美奈さん」

美奈の顔が不機嫌に戻った。どうやら拓也に呼ばれるのが好きじゃないらしい。

「なに？」

素っ気無い冷たい態度で返事をする。

「もしかしてこのDVDの持ち主じゃないですか？」

そういいながら拓也は人差し指をある方向へと向けた。

そこにはサングラスをかけた茶髪と金髪が入り混じったような髪をした顔立ちの整った男がタバコを吸いながら立っていた。

Season 2 - 4 ハッカー

その部屋には沈黙が走っていた。突然現れた謎の男。彼の雰囲気は空気を張り詰めるのに一役買っていたのだ。妙な威圧感、言葉では言い表せないほどのプレッシャー。拓也はこの男を只者ではないと感じとっていた。

しかし、沈黙は急いで走りきらなければいけない理由があったのか、すぐにいなくなってしまった。そう沈黙はこの声で消されてしまった。

「禁煙」

ただ一言。しかしそれは泣く子も黙る女の発言だった。無視することは許されない。無視することは死を意識させるから。この女に逆らうことは自然の法則に逆らうことになる。しかし、男は自然の法則を無視し、部屋の中へと歩みを進める。無言のまま。

男は拓也の前を通り、美奈の前をも通過した。そして、部屋のパソコンの前までやってくると、拓也と美奈のほうに向きなおし、ついにその口を開いた。

「は
」

彼の声はたった一文字で止められてしまった。パソコンの前にいたはずの男はパソコンの横に山積みになっている本の山に体を沈めていた。そしてパソコンの前には、握り拳を作り、鋭い目で男を睨んでいる女が立っていた。そう、彼の声は美奈の容赦なくそれでいてまったく遠慮のない鋭いパンチによって止められ、同時に彼の体

をも吹き飛ばしていた。そして美奈は言った。

「禁煙だっていつてんでしょ！」

それを聞いた男は不敵な笑みを浮かべ、着ていた上着ポケットからおもむろになにかを取り出した。それは携帯灰皿だった。男は静かに携帯灰皿にタバコを押し込むとそのままの体制で美奈に言った。

「予想以上にクレイジーな女だな」

それを言い終わると男は美奈の顔を見ながら立ち上がった。そして立ち上がり終わると拓也のほうを見て言った。

「はじめまして、アダム」

その言葉に、拓也の目は丸く大きく見開いた。

アダム。

その言葉を知っているものの存在に拓也はまるで金縛りにでもあったかのように動けないでいた。辺りに張り詰めた空気が漂う、緊張と束縛が空気を重くしていた。はずだったが、

「なに者アンタ？」

素っ気ないほどの声で聞く美奈。この女には緊張というものが無いのか。空気を読む力がないのか。とにかく場の雰囲気壊す力を持っていた。男は美奈のほうを見て、

「あんたが美奈だろ？クレイジー女」

男は口の端を吊り上げて言う。

「なんであたし達のことを？」

「全部知ってるぜ。あんた達の情報をハッキングしたからな」

その言葉に美奈は少し驚いている。

「おれはハッカーなのさ」

男の口から出た言葉は再び辺りの空気を張り詰めた。

s e a s o n 2 - 4 ハツカー（後書き）

かなり間隔が開いてしまいました。申し訳ありませんでした。また開くことがあると思いますががんばりますので感想、評価頂けると幸いです

Season 2 - 5 軍事基地

部屋にはまだ朝の光りが差し込み、窓辺の金魚はいつもと同じように水槽の中を泳いでいた。水槽の外で行われているやり取りなど知らずに。

「ハッカー？」

拓也が口を開いた。

「そうだ、インターネットを経由してほかのパソコンにアクセスする。つまりハッキングするのさ」

サングラスをかけた茶髪と金髪が入り混じったような髪をした顔立ちの整った男は拓也の問いに答える。続いて美奈が問いかける。

「つまり他の人のパソコンから私達のことを調べ上げたの？」

「ああ、そうだ」

男は笑みを浮かべ答える。

「俺がアダムってことも？」

拓也は真剣な顔付きで聞いた。

「そうだ。あんた達のこと、アンタがアダムだということも全部俺がハッキングしたパソコンから出てきた情報だ」

「一体どこにアクセスしてそんな情報が？」

美奈はいつになく真剣な顔で聞いた。いまは男以外に笑みを浮かべているものはいない。拓也も美奈も真剣な顔付きだ。

「ちょっと待つて。アダムのことを他の人間がしってるはずがない。俺が話したのは美奈さんだけだし」

拓也はいつもより大きな声で聞く。

「UFOだろ？」

その言葉に拓也の顔は驚きの表情で満たされた。

「だが……それは違うぜ。あんたが見たあれはUFOなんかじゃない」

「俺がアクセスしたのはUSAのある軍事施設だ」

「軍事施設？」

「そう、USAのある場所の地下にある極秘の軍事基地さ。そこでアンタ達の情報とさっきアンタ達も見た映像を見つけたんだ」

「アメリカの軍の基地から発信された情報をハッキングしたの？」

美奈が聞いた。

「そうだ……。いいかよく聞け。おまえ達の情報もこの月の映像も、軍のパソコンから出てきた。俺にかかれはハッキングは簡単だった

が……」

美奈と拓也は疑問符を浮かべる。

「この情報のセキュリティはトリプルAだった。つまり最重要機密。いわゆるトップシークレットだつてことだ。大国アメリカが前達のことを国のトップシークレットに指定しているんだ。これがどういうことか分かるか？ お前達が出会ったのは昨日、しかし今日の朝には軍のパソコンには美奈のこと載っていた。経歴まですべて調べ上げられてだ。アンタ達は監視されているんだよ。いや正確に言えばアダム……アンタが監視されているんだ。アンタが生まれる前からな」

拓也は目を大きく見開いて驚きの表情を浮かべている。

「ちょっと待つて。さっきアンタある場所の地下の軍事基地つて言つたわね？ ある場所つてどこ？」

男は美奈の目を見つめ言う。

「いいところに気が付いたな。クレイジー女」

「俺がアクセスした場所それは、アメリカの首都ワシントンにある……」

拓也と美奈が息を呑む。

「大統領邸ことホワイトハウスの地下に存在する極秘の軍事基地さ」

season 2 - 6 進むしかない

アメリカの大統領邸…… ホワイトハウス。その地下にあるという極秘の軍事基地。その事実を知る謎のハッカー。様々な謎が飛び交うこの空間には三人の人間が立っていた。

「ホワイトハウス？ そんなところに軍事基地が？」

口を開いたのは美奈だった。

「知らなくて当然さ、俺も知ったのは偶然だったからな」

ハッカーの男が言う。

「偶然？」

拓也の口も動く。ハッカーの男は頭にあの日のことを思い出しながら話しはじめた。

「そうだ……、あの日俺はいつものように、企業のデータをハッキングしていたんだ。だが俺の目的は企業のデータを盗むことじゃない。いかに正確にそして早くプロテクトされたデータを盗み出せるか。それが俺の楽しみ方だった」

拓也も美奈も黙ってハッカーの言葉に耳を傾けている。

「ハッキングするってのは意外と簡単でな。馬鹿なやつらは複雑なプログラムにすればするほど進入が難しくなると考えているようだが、複雑にすればするほどプログラムにスキができるものなんだ。」

俺はそこをつく。あとは逆探知が出来ないくらい簡単で小さなすぐ消去できて証拠も残らないPerlスクリプトを組んで進入するだけ。俺が偶然見つけたそれも簡単に進入できた。だけど問題はデーターの中身だった。そいつはいままで見たどんなデーターよりもデジャラスなレポートだった」

「でも、なんであのことが軍のデーターに？」

拓也が男の話の間に割って入った。

「俺も知らないさ。ただ俺が分かるのは命が危険にさらされるほどのとんでもないレポートをつかんでしまったってこと。そしてこのレポートはあんたらに繋がりがあるってことだけさ」

「命の危険？」

美奈が聞いた。

「クレイジー女にしては、めずらしい質問だな。気が付いてなかったのかい？俺達はずっと監視されているんだ。もちろんいまこうしてここにいることも、もしかしたらこの会話も全部聞かれてるかもしれない」

その言葉に反応して美奈も拓也も周りを見る。

「探したって無駄さ。あるとしたら盗聴器や小型カメラ。もしくは何百メートルも先からライフルのスコープで監視しているかだ。一素人じゃとても見つけれない」

「……どうすればいい？」

拓也の声には緊張が走っている。

「答えは簡単……、突き進むしかない。もう後戻りは出来ない。ア
ンタが生まれた瞬間からもう前に進むしかなくなってるんだ。出来
ることは覚悟を決めることだけ。あんた達が追っているのはもう…
…神の領域だ。だから、俺もこのサークルに入れてもらうぜ。だが
俺の目的はさつきも言ったように中身じゃなくいかに強靱なセキユ
リティーを破れるかだ。それを忘れないようにな」

それを聞いていた美奈が不敵に笑う。

「ふふん、面白いじゃない。アメリカでもなんでも来いつてのよ！
私が相手になってやるわ」

「うん、やるしかない。真実を見つけるんだ」

拓也も負けずと気合を入れる。

「そうでなくっちゃな。おっと、自己紹介がまだだったな。俺の名
前はホープ・レクシン」田中だ。レンと呼んでくれ」

レンは笑顔で言った。

「わかったわ、田中君」

「え……いやだからレンで」

「だから分かったってば、田中君」

「……さすがクレイジー女だぜ」

こうして、このサークルに仲間がまた一人加わった。だが、拓也も含めこの三人がこれから大きな陰謀に巻き込まれていくことをまだ誰も知らなかった。

s e a s o n 2 - 6 進むしかない（後書き）

s e a s o n 2はこれにて終了です。いよいよs e a s o n 3からは急展開です。

感想、評価など頂けると幸いです

Season 3 - 1 誘拐

朝日が差し込む空間、そこには朝の静けさが漂っていた。そこには金魚が水槽の中を泳いでいた。

静けさの中、単発的な音が部屋に響いていた。

そこには、パソコンの画面に視線を集中するレンの姿があった。

彼は静かにパソコンのキーボードに触れている。

指はまるでピアノの伴奏でもしているかのように軽やかにリズムよく動いていた。

「おはよう」

突然部屋に声が響き渡った。それは拓也だった。

「ああ、おはよう」

「はいね、レン」

「ああ、まあな・・・。ここなら静かに集中できるからな」

レンがサークルに入って早二ヶ月が過ぎようとしていた。

彼らは、無事サークル消滅の危機から抜けだし、宇宙の謎について調べていた。

「なにを調べてたの？」

「アメリカの情報さ、ここ二ヶ月新たな情報がないからな、久しぶりにここDODに入り込んだ」

「DOD？」

「アメリカの国防総省さ、ここからは国の安全に関する機密文章がたまに出てくる」

「偽の機密文章だけだな」

「え？偽？」

拓也は首をかしげる

「ハッカー対策の偽情報さ。ハッカーがハッキングしたときに本物だと思わせるために偽のトップシークレットを作っついていやがるんだ。本物は外部から干渉されないパソコンにデータが暗号化されて保

存されている。普通の方法じゃインターネットを使つてのハッキングはできない」

「普通の方法じゃ無理ってことはできる方法もあるんだね？」

「ああ、あるさ。外部から干渉されないにしても今の世の中電波が飛び回ってるからな。たとえば携帯電話の電波。その電波にデータをくっ付けてハッキングする方法がある。結構複雑な作業だが、割と面白いぞ。うまくやれば他人のメールや電話も傍受できる。教えてやるうか？」

拓也はその言葉に一瞬迷つたが首を横に振って断つた。

「まあ、いいさ。気が向いたらいつでも教えてやるから言つていいよ。それよりあのクレイジー女はどうした？」

「ああ、美奈さんなら今朝携帯に今日は休むって留守電が入ってた」
「休み？珍しいな・・・」

レンはサングラス越しに真剣な顔つきを見せた。

「以前話したと思うが、俺達はいま命を狙われてもおかしくない状況だ。現にお前達にはじめて接触した次の日には、俺の情報までもが例の軍のデータベースに載っていた。この中で一番狙われやすいのは女であり、このサークルのリーダーでもあるクレイジー女だ」
「まさか美奈さんに限って・・・」

拓也の顔も真剣になった。

「アダム、一応クレイジー女の携帯にかけてみる」
「うん、分かった」

拓也は美奈の携帯に電話をかけた。

しばらくすると電話に誰かが出た。それに反応し拓也はとっさに美奈の名前を呼んだ

「美奈さん!？」

『・・・・・・、斉藤美奈は誘拐した。返してほしくばこちらの指示に従ってもらおう』

その言葉に拓也は愕然とした。半分冗談のような空気が漂いながらも妙な現実味が拓也を支配した。

目の前で起きた突然の出来事。美奈の誘拐。拓也は言葉を失った。
電話の内容を知らないレンが拓也の表情を見て、ただ事ではないと
察して聞いた

「どうした？」

その言葉に拓也はレンのほうを見てうなずく

「まさか…ほんとに誘拐か？」

レンが言った。

『そこにハッカーがいるな？そいつに代われ』

拓也は携帯を耳から離し、レンを見て言った。

「レンに変わって。美奈を返してほしかったら指示にしたがえ
て」

それを聞いたレンは静かに拓也から携帯を受け取った。

s e a s o n 3 - 1 誘拐（後書き）

いよいよseason3です。本格始動開始です

Season 3 - 2 要求

レンの手の中に納まっている携帯電話はレンの耳元にあった。

『お前がハッカーか・・・はじめまして』

携帯の奥から聞こえてくるその声はまるで機械を通した声のように雑音が混じっている。

「クレイジー女は・・・美奈は無事か？一体なにが目的だ？」

『安心しろ、女は無事だ。いまはまだな』

「声を聞かせてくれ」

『いまはまだ駄目だ、これから言うことをお前が聞けば考えてやる』

「・・・分かった、なんだ？」

『まずは、パソコンと携帯電話を二つ新たに用意しろ、その携帯電話話には盗聴器が仕掛けられている。それは壊せ。新しくそろえた携帯電話からこの電話にかける。』

「・・・わかった、だがそれなら少し時間がかかるぞ？」

『分かっているさ、それからそちらも分かっていると思うが、警察に知らせればどうなるか分かっているな？それに逆探知もできないようにしてある。お前達とはかく俺達の言うとおりにしていればいい。それで女もお前達も助かる』

それを言い終わると電話は切れた。

「レン、なんて？」

拓也が心配そうに聞く。

「携帯とパソコンを新たに2つ用意しろだと、話はそれからさうだ。とにかく美奈を取り戻すためには今は言うとおりにするしかない」

レンの額には汗がにじんでいる。いつも冷静なレンもいまの緊迫した状況に少し圧されているようだった。

「警察は・・・」

「駄目だ！！美奈が殺される！！」

「だよね・・・」

拓也がいいかけた事をレンが先読みして止める。

レンが汗を手で拭い拓也に言う

「アダムお前は携帯を2つ用意してくれ、おれはパソコンを2つ買ってくる」

「わかった」

それを聞いた拓也はすぐに携帯を買いに出ようとした

「あ、ちよつとまで、携帯は海外でも使えるのにしろよ」

レンが言う。

「・・・分かった」

自分より冷静に対処しているレンを尊敬するかのように拓也はレンの言うことを素直に聞いていた。

それを聞き終わると拓也は急いで部屋を出て行った。

後を追うようにレンも部屋を出る。

部屋には窓際で泳ぐ金魚だけが残された。

Season 3 - 3 指令

拓也が部屋に戻ると、すでにパソコンを2つ買い終えたレンが部屋に置いてある椅子の上に座って待っていた。レンは部屋に入ってきた拓也のほうを見ると言った。

「買ってきたか？」

「うん・・・、でもレンなにしてるの？」

レンは最初からおいてあったパソコンを解体してなにかを作っているようだった。拓也はその光景を驚きの表情で見っていた。

「コレか？コレは、逆探知機だよ。しかも録音機能付き」

レンはほとんど作り終えたその機械を拓也のにみせ言った。

「でも逆探知できないって・・・」

拓也は不思議そうにレンに聞く。

「無理かもしれないが、やって見る価値はあるだろ？」

拓也はレンのその言葉に納得して、なにも言わずにレンが機械を作り終わるのをみていた。

「よし、完成」

そういったレンは拓也の買ってきた携帯電話の一つを手に取り、携帯の後ろカバーを開けて配線をいじってパソコンと繋げ始めた。レンは作業が終わると口を開いた。

「よし、アダムおまえが美奈の携帯にかける」

「え？俺が？」

拓也は不思議そうに聞く

「俺はやらなきゃいけないことがあるんだ。おまえがかけてくれ」
レンのその言葉を聞いた拓也はうなずき美奈の携帯に電話をかけ始めた。

『買ってきたか？』

今度はすぐに繋がった。まるで携帯がなるまで待機していたかのような早さだ。

「ああ、買ってきたよ」

拓也が答える。

『ハッカーを出せ』

「いや、レンは出せない。このまま俺が聞く。俺がレンに伝えれば済むことだろ？」

『……、まあいいだろう』

拓也の声はともしつかりしていた。それは冷静に対処しているレンを見習ってのことだろう

『やることはそのハッカーにとっては朝飯前のはずだ。ある施設にあるICBMの発射コードを盗み出せ』

「ICBM？発射コード？」

拓也は自分の知らない単語に戸惑っていた

『分からなければハッカーに聞け。ある施設とはDODだ』

「DOD……国防総省だね」

拓也はすこし自慢気味に言った

『さすがにDODは知っているか……。コードリストはnw0082だ。手に入れたらまたこの電話に連絡しろ。今度は、持って来る場所を指定する』

それを言い終わると電話は切れた。

season 3 - 4 核

拓也は耳に当てていた携帯電話を胸の位置まで下ろすとレンに向かって今の電話の内容を言い始めた。

「レン、国防総省のパソコンに進入して、ICBMの発射コードを手に入れるだつてさ。コードリストはnw00・・・74?」

「nw0082だ」

拓也の間違いを即座にレンは訂正した。

「え?聞いてたの?」

「いや、録音機能付きの逆探知機が役にたった。やつらの言ったとおり逆探知は出来なかったが・・・」

レンは少し悔しそうな顔を見せた。

「そんなことより問題はやつらの言ってた指令・・・こいつは厄介だぞ」

「え?」

拓也はレンのいつもの冷静な顔ではない真剣で引き締まった表情とその言葉を聞いて疑問符を浮かべた。

「いいかよく聞け、やつらの言っていたICBMとはInter Continental Ballistic Missileつまり大陸間弾道ミサイルのことだ。そしてDODにあるコードリストnwはnuclear warheadつまり核弾頭のこと・・・」

「えっ!」

それを聞いた拓也は驚きの表情を浮かべた

「その発射コードを俺に盗めと言ってきたつてことはだ。つまりやつらは俺に核ミサイルを盗めといっているんだ」

「・・・な、それ・・・まじ?」

拓也は驚きのあまり声にならないでいた。額には汗がにじんでいる。

「こんな状況で嘘なんか言えるわけないだろ？」

レンも拓也も額からは汗がにじみ顔が強張っていた。そして2人の間にしばらく緊張と沈黙が続いた。

しばらくするとその沈黙を破るようにレンが切り出した

「さて・・・どうする？」

「え？」

その言葉に拓也もすぐに反応する。

「この情報をDODから盗み、万が一バレたら、俺達は間違いなくテロリスト扱いで死刑は免れない。やつらにしちゃ俺達が成功すれば核が手に入り、失敗すれば俺達に責任を擦り付けることが出来る。いい手だ、考えてやがる。だがやらなければ美奈が死ぬ。だからといって奴らに核が渡れば世界は終わるだろう」

「・・・そんな答えは決まってるよ」

拓也は即答し、続けた

「美奈さんを助け出そう」

「・・・ククッッ!!」

レンは突然なんの前触れもなく笑いだした。それをみた拓也は

「な、なにがおかしいんだよレン！」

「いや・・・悪い。アダムお前はすごいやつだよ。核が悪人の手に渡るかもしれない、自分の命が危険にさらされるかもしれない状況下ですぐに判断が出来る」

それを聞いた拓也は、すこし照れくさそうにしている

「アダムお前の言うとおりだ。俺達も美奈も世界も助かる道は、やつらの指令を絶対に失敗しないようにして成功させることだけだ」

「でも俺は、やつらに核が渡った後のことなんか考えてなかった」

拓也は少し悔しそうにしている

「大丈夫だ、俺にまかせな。やつらに核は渡さない。とにかく今は美奈を助けることだけを考えるんだ」

「レン・・・うん、やろう！美奈さんを助けるんだ！」

拓也の意気込みにレンは静かに笑顔でうなづいた。
部屋では金魚が一匹水槽の中を元気よく泳いでいた。

「さて、それじゃあさっそくDODのパソコンに忍び込むぞ」

レンの声が部屋に響いた。

「でもセキュリティーとかあるんじゃないの？大丈夫？」

拓也の声も部屋に響いた。

「俺を誰だと思ってるんだ？天才ハッカーだぞ」

レンは自身ありげに言った。レンはいつも自身ありげだ。

だが自身があるなりの実力はある。拓也はこの数ヶ月でそれを知っていた。知識もあり、経験もある。

味方としてとても心強いと拓也は思っていた。

「だが、これから俺達が忍び込むのは、外部から接続できるパソコンじゃなく、外部からはまったく干渉されないパソコンへの進入だ。容易じゃない。おまえの協力も必要だ」

レンは拓也のほうを見て言った。

「でも外部から干渉されないパソコンってことは通信機器がまったく繋がれてないってことでしょ？そんなパソコンに進入なんて出来るの？」

拓也が心配そうな顔で聞いた。それを見たレンは少し、口の端を吊り上げ言った。

「幸い今の世の中はどこも便利になってる。そこらじゅうに電波が飛び交いあらゆる情報がひしめく社会になっている。・・・携帯もその電波を飛ばしている。つまり、携帯電話を使うんだよ」

「携帯・・・」

拓也は疑問符を浮かべている。

「そこで、お前の協力が必要だ。俺は侵入に必要なプログラムを組む。進入する際にこっちで操作するタイミングで完璧にDODのある番号に携帯からかけてほしい。タイミングがずれれば情報を手に入れることができないどころか、逆探知されテロリストとして捕ま

る恐れもある。おまえが鍵だ……。やれるな？」

「やれるな？じゃなくて『やれ』でいいよ。成功しなきゃ美奈さんを取り戻せないだろ？」

拓也は真剣な顔に笑みをこぼして言った。

「いい返事だ。そうこう言ってるうちにプログラムも出来た。いいか、これからこのパソコンから繋いだ携帯でDODのこの番号にかける。ただし3コール以内に切れ。それ以上は逆探知される」

そういうとレンは番号の書いた紙を拓也に渡して続けた。

「かけるタイミングは俺の合図でだ。お前が通話ボタンを押すタイミングと俺がパソコンのEnterキーを押すタイミングが合わなければ成功しない。チャンスは一度切りだ……。準備はいいか？」
拓也は携帯を見つめながら、小さくうなずいた。

「……じゃあいくぞ。3……。2……。1!!」

レンの掛け声と共に拓也の指は通話ボタンを、レンの指はEnterキーを同時に捕らえた。

その刹那、パソコンから機械音が発せられ、画面にリストのようなものが出てきた。その音を確認した拓也は電話を切った。

「やった。成功だ」

レンは画面を見ながら喜んでいる。拓也も画面を見るためにパソコンの前に移動した。

「これが、ICBMの発射コードリスト？」

拓也は疑問符を浮かべながら聞いた。

「ああ、USAが所持する全ICBMの発射コードだ。このなかから必要な分だけ取り出せばいい」

「でもいったいどうやって？」

リスト手に入れたことに成功した拓也もなぜ出来たのかわかっていなかった。

「簡単さ。パソコンから出ている電磁波を電波に変換して、携帯を媒体としてこのパソコンに送ったんだ。アダムがさっき電話かけたことによってその携帯から発せられた電波がDOD内にはいったんだ。つまり電波がデーターを盗んできたってことだ」

拓也は疑問符を浮かべたままだった。

「まあ分かなければそれでもいいさ。必要なデーターは手に入った。拓也やつらに連絡するから携帯かしてくれ」

その言葉を聴いた拓也は静かにレンに携帯を渡した。レンは、携帯を受け取ると、犯人に電話をかけ始めた。

『・・・はやかったな』

また待機していたかのようにすぐに犯人は電話にでた。

「おれを誰だと思ってるんだ？それで受け渡し場所は？」

『・・・いいだろう。受け渡し場所は、・・・だ。制限時間は明日の夜九時までだ。時間内にこなければ女は殺す』
そういうと電話は切れた。

「レン、どこに来て？」

拓也はレンに間髪いれずに聞いた。

その拓也の問いにレンは少し間をおいて答えた。

「場所は・・・アメリカ、ロサンゼルス郊外の倉庫だ」

Season 3 - 5 DOD (後書き)

かなり感覚が開いてしまい申し訳ありません。また開きますが、
がんばりますのでよろしくお願いします。

Season 4 - 1 離陸

「え」と、E-4は・・・とっ」

拓也とレンはその日のうちにロサンゼルス行きの飛行機の搭乗手続きを済ませて、ロサンゼルスに向かうとしていた。

ロサンゼルス行きの飛行機はどれも満員で席が空いていなかったのだが、レンは航空会社のパソコンをハッキングしてデーターの書き換えをして、席を予約し、飛行機に乗った。

レンはその作業を約30分ほどでやってのけた。

拓也はレンの実力に驚かされるばかりだった。レンの普段から見せる冷静さ、そして自信は拓也のととても安心できるものだった。もしレンがいなければ、美奈を助けることもできないかも知れないと少し悔しさがでるほどレンはすごい力を持っていると拓也は確信していた。

そして拓也は、それが自身のがんばる力にもなっていることに気が付いていた。

「あ、あつたよレン」

席を見つけたのは拓也だった。2人は隣通しで席に座った。離陸まで少し時間があつたため、レンと拓也は話を始めた。

「なあ、レン・・・美奈さん無事だと思う？」

レンは拓也の声に反応したが顔は前を向いたまま答えた。

「いまはまだ大丈夫だと思うぜ。それに万が一殺されていたら取引はできないからな」

「それもそうだけど」

拓也は心配そうな顔で言う。それを見たレンは拓也に言う。

「心配なのは分かるけど、ここで心配しても仕方ないだろ？いまはゆっくりしていざというときちゃんと動けるようにしとかなないと駄目だぜ？」

その言葉を聴いて拓也はうなづく。

拓也とレンが会話しているうちに飛行機は、いつのまにか離陸体制に入っていた。ベルト着用サインと共に、飛行機が滑走路を速さを増して加速していく。

そして、飛行機は地面から離れ空へとあがって行く。

拓也とレンに軽い重力付加がかかる。

しばらくして飛行機は高度3万フィート付近で安定水域に入った。

機内は多少ざわめきがあるものの、静かなものだ。拓也は周りを見渡すと、トイレに行くために席を立った。

トイレにいくと使用中だった。

しばらく待っているとお柄の男がトイレから出てきた。それを確認すると拓也はすぐにトイレに入り、用を足した。

トイレが終わり席に戻ろうとしたとき、拓也は1人の女性とすれ違った。若い感じの金髪女性だった。

拓也は一瞬目を奪われたが、そのまま席についた。

その瞬間トイレのほうの客席がざわめいた。

「全員動くな!!」

その声に反応して、拓也とレン、他の乗客も一斉に声のほうに耳を傾けた。

そこには銃を持った先ほどの大柄の男がさきほどの若い金髪女性を人質に取り立っていた。

周りを見渡すと、ほかにも大柄の男が3人それぞれが銃を持って立っていた。全部で4人の大柄の男が均等に別れて、機内の状況を支配していた。

拓也とレンの乗る飛行機はハイジャックされたのだ。

s e a s o n 4 - 1 離陸（後書き）

いよいよseason4です。感想など頂けると幸いです。

Season 4 - 2 ハイジャック

機内はハイジャックした男四人によって完全に空気が支配されていた。

さきほどまでのざわめきもなく静かなものだった。

機体の前にいる大柄の男が近くのキャビンアテンダントになにやら言っている。どうやら機長を呼べと言っているようだ。

キャビンアテンダントは言われるがまま、機内電話を使い機長を呼び出した。

するとすぐにコックピットのドアが開き機長が出てきた。

それを見た男は、機長の頭に銃を突きつけ言った。

「機長、乗客を殺されなくなったら、管制塔に連絡して、警察を呼べ」

「警察？要求はなんだ？」

銃を突きつけながらも機長は冷静に聞いた。しかしその額には汗がにじみ出ていた。

「我々の目的は、ロサンゼルス収容所に入れられている我々のボス、オール・ハミルトンの釈放だ。要求を飲まなければ乗客を1人ずつ殺すと伝える」

それを聞いた機長は一度機内を見渡し銃を突きつけられながら、コックピットへと戻り、通信機器で管制塔へ繋いだ。横では副機長が席についている。

「こちらHP1608便、機長モック・ジェリドリー。ロサンゼルス国際空港管制官に告ぐ。当機は四人組の男によりジャックされた。犯人の要求は警察を呼び、ロサンゼルス収容所に収容されてい

るアール・ハミルトンの釈放。要求に従わなければ乗客を1人ずつ殺すと言っている。現在乗客の若い金髪女性が人質となり頭に銃を突きつけられている。すぐに返答求む」

その後すぐにコックピットに機械音が流れた。

『こちらロサンゼルス国際空港管制塔。すぐ警察に連絡した。ロサンゼルス市警、航空警備隊、FBIがこちらに向かっている。到着し次第連絡する』

「さあ、これで満足か？」

無線が切れてすぐ機長は犯人の男の顔を見ながら言った。

「ああ、いいだろう。それでは席に着け。ボスが釈放されるまでロサンゼルス国際空港の上空を旋回し続ける」

犯人は機長を席に座らせながら言った。

「レン・・・、これってハイジャックってやつじゃない？」

拓也はすぐ横に座るレン以外には聞こえないように聞き取れるか否かというほどの小声で言った。レンは黙って前を向き座っている。

するとレンはポケットに入れていた手をポケットから出した。手には携帯電話が握られていた。それを拓也にそっと見せる。

携帯の画面には文字が打たれていた。

＜出来る限り話かけるな。話かけるときは、前を向いたままこのように携帯に打ち込め。それとしばらくは話かけるな。今、頭で考えこの状況の糸口を探している＞

レンはこんな状況でも冷静だった。

season 4 - 2 ハイジャック（後書き）

読んで頂きありがとうございます。一言でも感想や応援メッセージを頂けると幸いです。小説家になろう プラスアルファというサイトもやっているのですちらもよろしく願いします。

Season 4 - 3 HP - 608 便

機内は静まり返っていた。犯人達にも現在は動きはない。人質の女性はいまも頭に拳銃を突きつけられトイレの近くで立っている。

コックピットで行われているやりとりを知らずに、レンは頭の中でいまの状況を整理し、糸口を掴もうと考えていた。

このHP - 608 便の機内は、横に2つずつ席が並び、間に通路を挟んで計6つの席が並んでいる。縦にはAとZと残り少しが全部で25列並んでいて、乗客は全部で150名乗ることができる。レンはハッキングした時に、この便は満席だということを知っていた。さらに4名のキャビンアテンダントに機長と副機長・・・計156名がこの飛行機に乗っている。

座席Lの後ろの中央にトイレがあり座席L - 2の横に人質と犯人が立っている。

犯人達は全部で4人。1人はコックピットに、1人は人質をとりトイレの前に、1人はトイレより後ろ側に、1人は機内を行ったり来たりしている。

犯人達の動きから、これが計画的に進められていることだと、レンは気が付いていた。

そして、この状況を整理し隙を伺っていた。

犯人のうち3人はフルオートの銃を、人質をとっている男は拳銃を持っていた。拳銃の種類はガバメント、38口径の銃だ。装填数は9発。

レンは自分の可能な限りの知識を引き出していた。

「もういい加減にしてくれ!!」

いきなりなんの前触れもなく、乗客の1人が大声を張り上げながら立ち上がった。

犯人達もほかの乗客もすべての視線がそっちに行く。

その人は男性で、茶髪のアメリカ人の中年男性だ。グレーのスーツを着ている。

「わたしは、ロサンゼルスで大事な会議があるんだ!」

男は大声で女性の頭に拳銃を突きつけている犯人に向かって言った。
「お前達の悪ふざけに付き合ってる暇はない!! 機長出て来い!!」
すぐに空港に着陸してくれ!!」

男は大声で叫びながら、席を離れコックピットに向かおうとした。

その時、前と後ろを行き来していた犯人の1人のフルオート銃が激しい銃声と共に火を噴いた。

席を立っていた中年の男は、背中に多数の銃弾を浴び、背中から大量の血を出しながらそのまま床に倒れ動かなくなった。
床は男の血を吸い、赤く染まっていった。

それとほぼ時を同じくして、他の乗客たちの叫び声が機内中に響いた。

それを聞いた犯人の1人が叫びながら言う。

「静かにしやがれ!! ブチ殺されたいか!!」

その声をきっかけに叫んでいた他の乗客達は静かになり再び機内に静寂が戻った。

s e a s o n 4 - 3 H P - 6 0 8 便 (後書き)

HPは実際に存在する航空会社です。実際に昔HP-606便が事故に遭っているのですがこの話で登場するHP-608便も恐らく存在していると思いますがこの話と航空会社とはなんの関係もありません。

感想、評価など頂けたら幸いです。

Season 4 - 4 FBI捜査官

機内は騒動が終わり、再び静寂を取り戻したかのように見えたが、乗客の中には、祈っているもの、泣き崩れているもの、怯えて震えているもの、ただ前を見て座っているもの、少し前の状況とは多少変化が出てきた。

すべて、先ほど撃たれた男が原因だろう。撃たれた男は先ほどまで痙攣を起こしていたが、床に倒れたまま動かなくなっていた。床は男の血で赤く染まったままだ。

そのころコックピットでは、進展が起きていた。

「おい！今の銃声はなんだ？」

機長が閉じられているドアのほうを向いていった。

「さあな、誰かが殺されたんじゃないか？」

犯人は冷静に答えた。

「なんだと！そんな・・・」

機長は悔しそうに歯を食いしばる。

その時、コックピットに機械音が流れた。

『こちらロサンゼルス国際空港。FBIが到着した。犯人と直接話したいそうだが、可能か？』

それを聞いた。機長は犯人の顔を見る。それを見た犯人はうなずいた。

「こちら機長だ。犯人の1人が話をすると言っている。話してくれ」

『こんにちわ、こちらFBI捜査官タルワ・サートンというものだ。君達の目的はアール・ハミルトンの釈放だね？』

それを聞いた犯人は答える。

「そうだ。開放場所は、ロサンゼルスの中だ。タクシーに乗せろ。

後はボスが自分で向かう。当然追跡は許されない。ボスの安全が確保できるまでこの飛行機には飛び続けてもらう」『だが、釈放には様々な手続きを行わなければならない。それまでに、その飛行機の燃料は尽きてしまうぞ?』

「なら、尽きる前に釈放しろ!」

犯人はマイクに向かって大声で言った。

『分かった。出来る限り早く釈放できるよう努力しよう。ほかにいるものはあるか?』

FBI捜査官は、犯人を出来るだけ刺激しないように話を進める。

「いるものはない。だが今から一時間以内にボスの釈放がなければ、副機長は殺す」

『待て!すぐに開放するから、殺すんじゃないぞ』

FBI捜査官は犯人の突然の申し出に少し焦りながら言った。

機内では、犯人の1人がトイレで用を足していた。先ほど男を撃った後ろと前を行き来している男だ。

犯人の男はトイレから出てくると、女性を人質にとっている男と何かを話したした。

それを見て1人の男が両手を挙げた。

犯人達はそれに気が付き、その男に視線が行く。

その男の名前はホープ・レクシン・田中。

通称レンと呼ばれる男だった。

Season 4 - 5 行動

乗客達もそれに気が付き少しざわめきはじめた。

レンは両手を挙げながら立ち上がり、犯人達のほうに向いた。それを見た犯人の1人が言った。

「なんだ？立つな、席に着け」

レンの表情は真剣そのものだった。今はサングラスをかけていないので、その引き締まった顔がよく分かる。

そして、レンの口がゆっくり開く。

「・・・オレも、トイレに行きたいんだ。行かせてくれ」

レンは両手を挙げながら真剣に頼んだ。

それを聞いた犯人2人は一度顔を合わせ、再びレンのほうを向いた。「いいだろう。こっちに来い」

レンの要求を受け入れた犯人はレンを呼ぶ。

レンは静かに、歩き始め犯人達に、トイレに近づいていく。

拓也はそのレンの動きを凝視に近い形で真剣に見ていた。

レンは、トイレまで近づくと犯人の1人に背中に銃を突きつけられたため、そこで停止した。

「なんだい？なんも持っていないぜ」

レンは真剣に近い顔で言う。

それを聞いた犯人はレンに言う。

「トイレには行かせてやる。ただし俺も一緒に入る。トイレでなにをするかわからんからな。銃は突きつけたままにしておく」

それを聞いたレンは少し口の端を吊り上げながら言った。

「どうぞ・・・ご自由に」

その言葉を言い終わるとレンは静かにトイレのドアに手をかけトイ

レのドアを開けた。

そして犯人の１人と共に中に入っていく。そして、扉を閉める。

その時、席についていた拓也が、ポケットに忍ばせていたものを手から落とした。拓也はそれを取ろうとしたが、女性に拳銃を突きつけ、トイレの前に立っていた大柄の男がそれに気が付き拓也に言った。

「おい！動くな！なんだそれは！？」

男は、女性と共にトイレから離れ、拓也に近づいて行く。そして、

犯人は拓也の落としたものを拾った。

「なんだ・・・、飴か・・・」

犯人は拓也の落としたものを確認すると、拓也に言った。

「妙な動きをしたら殺すからな」

拓也はそれを聞くと、静かに席に着いた。

その時トイレから激しい銃声が聞こえた。

拓也のそばまで来ていた犯人はその音に反応して、女性と共にトイレのほうへ急いで行く。

と突然扉が開いて、中から硝煙と共に人が出てきた。

それは、足を撃たれ血を流している犯人の１人だった。

それを見た人質を取っていた犯人は人質をその場で離し、仲間の元へと駆け寄ってきた。

「どうした！？やつは？」

犯人の１人が言う。足を撃たれた犯人は、トイレのほうを見ながら言った。

「・・・やつに・・・やられた」

さっきまで人質を取っていた男はその言葉に反応してトイレを見る。だがそこに人影はなかった。

「野郎！！どこに行きやがった！！」

その大きな声が機内に響き渡ると共に、声が聞こえた。

「上だよ！」

犯人はその声に反応して上を見た。

犯人が上を見ると、そこにはレンがフルオートの銃を構えていた。犯人は、自身が持っていた銃をレンのほうに向けようとするが一瞬早くレンの持つ銃が銃声と共に火を拭いた。

犯人は銃弾を足に多数浴び、手に持っていた銃を落としその場に倒れこんだ。

それを確認したレンはそのまま、床へと降りてきた。

だが次の瞬間、飛行機の後方にいた犯人がレンに銃を向ける。レンはそれを見て、とっさに後ろに倒れこみながら犯人に向け銃を撃つ。激しい銃声と硝煙が辺りを包み、薬莢が床に落ちていく。

銃弾の一発が犯人の遥か後ろの飛行機の壁に当たった。そして、犯人も腕と足を撃たれ倒れていった。

レンはそれを見て、ゆっくりと立ち上がった。

「ふう、危なかった」

レンは無傷だが額には汗をかき、賭けにも近い緊迫した状況だったのが見てとれる。

「レン、うまくいったね」

拓也が自分の席で立ち上がりレンに向かっていう。

「ああ、作戦通りだ」

レンは倒れた犯人たちをロープで縛りながら言い始めた。

「まず俺がトイレに行くといって立ち上がる。その前に拓也に飴を渡しておいた。機内サービスでもらったやつだ。そして俺は犯人と共にトイレに入る。」

ここで俺は銃を犯人から奪おうとしていたがトイレの近くに犯人が

もう1人いたんじゃない。だから拓也に飴を落してもらい、犯人の注意をそっちに向けた。そして犯人は作戦通り拓也のほうへ行った。

その瞬間、俺は犯人から銃を奪い、足を撃ちトイレから上へと上がった。仲間に駆け寄ってきた犯人を上から狙うためだ。見事にうまくいったな。

この作戦が成功した理由の1つはコックピットにいる犯人が出てくることがないと言うこと。それはさっきおっさんが撃たれたときに出てこなかったことから予想できた。もう1つは犯人が人質の女性を運よく離してくれたことだ。おかげで俺は犯人だけを狙うことが出来た」

レンは作戦の内容を機内の全員に分かるように説明した。

「そう・・・、よかったわね。作戦が成功して」

レンの説明が終わると同時にその言葉がレンの後方より発せられて、レンの後頭部に銃が突きつけられる。

銃を突きつけたのは、人質になっていた女性だった。

「あんた・・・」

レンが言葉を言いながら立ち上がろうとしたとき

「動かないで！！そのままジッとしてなさい」

女性がレンの動きを封じ言った。

「・・・まさかとは思ったけど、ほんとにそうだったなんて・・・」

レンが前を向いたまま言った。

その瞬間、女性の頭に銃が押し付けられた。

「銃を離して」

その言葉を言ったのは拓也だった。

「・・・なぜ？」

女性が銃を突きつけていたレンの頭から銃を離しながら言った。

「レンが最初、作戦を実行する前に言ったんだ。万が一、人質の人
も犯人の1人だった場合のことを・・・、俺達は最初からそういう
ことも想定して動いていた」

それを聞いた女性は悔しそうな表情を浮かべた。

レンと拓也は犯人達を全員縛ったあと、犯人達の銃をもちコックピットへ向かった。

乗客の多くはまだ震えている。キャビンアテンダントは震えた乗客に声をかけて回っている。

レンと拓也は、コックピットの扉を開けた。

そこには、犯人が機長の頭に銃を突きつけて立っていた。

横では副機長が頭を撃たれ、血を流し動かなくなっていた。機長も怪我を負っている。

「もうやめろ！ほかのやつは捕まった！後はお前だけだ、大人しく銃を降ろして捕まれ！」

レンは犯人に向かっていった。犯人は無表情で機長に向けた銃の引き金に手をかけていた。

「残念だが、もう終わりだ。管制塔との通信も切れた。ボスが開放されたんだ。もう俺達の役割は終わりだ・・・」

「ど、どうということだ？」

レンは驚いた表情で聞いた。

「ほかのみんなは知らなかったから責めないでやってくれな。最初からこの飛行機は墜落する予定だったんだ。ボスを刑務所に送った警察への復讐ってわけだ。だからわざわざ、警察を空港に集めたんだ。機長を殺して、俺達も死ぬ」

それを言い終わった瞬間、犯人は機長に突きつけられていた銃の引き金を引いた。銃声と共に、機長の頭から血が噴出し、機長はその場に倒れた。機長の血を吸って床が赤く染まる。

次に犯人は、自分の頭に銃を向けて、引き金を引こうとした。

「やめろ!!」

レンと拓也の声がコックピットに響く。だが犯人は、それを聞かずに引き金を引き、自らの命を絶った。犯人も床に倒れ、血が床全体を侵食していく。

「くそ!!」

拓也がそのあまりの光景に目を逸らした。

レンは銃を降ろし、頭を撃った犯人に近づく。

「くそっ」

それはものすごく小さい声でいった。レンの悔しさだった。

レンはほかの犯人の足は撃ったが誰も殺してはいない。犯人の犠牲者はこの男だけだった。だがレンはすぐに冷静さを取り戻した。

このままでは、全員の命が危ないのだ。

このHP - 608便は今、機長と副機長を失い、さらに通信機器は壊された状態で高度3万フィートの上空を飛んでいたのだ。

レンは亡くなった機長と犯人をコックピットの端に寄せ、機械を見ている。

「レン、分かる？」

拓也はレンに聞く。

「いや・・・、飛行機のこととはまったく分からない」

さすがのレンも飛行機のこととはまったく分からないようだ。さらに通信機器は壊されていて、管制官とも通信が出来ない。

その時コックピットに計器の音が響いた。その音に反応して拓也が言う。

「なに？この音！？」

「まさか・・・」

レンが計器を見ながら言う。

その音は燃料が切れかけていることを意味する信号音だった。レンはそれに気が付いた。

「燃料が・・・もう・・・ない・・・」

「え！？」

レンのその言葉に、拓也は驚きの表情を浮かべる。

その時、飛行機の後方で爆発音が聞こえた。飛行機全体が激しく揺れる。

コックピットの画面には、主翼の後ろが赤く点滅表示されている。

「これは、まさか、エンジンが・・・？」

レンが言う。先ほど犯人を撃った時にレンの撃った弾の一発が飛行機の後方に当たった。その弾は主翼の後ろのメインエンジンを破壊していたのだ。

その瞬間、飛行機が降下し始めた。

浮力を失った機体は重力に逆らうことができず、重力のなすがまま地面へと降下を始める。機内は激しく揺れ、その降下スピードはどんどん増している。

機内では非常マスクが天井から落ちてきていた。だがその降下スピードに耐え切れずマスクを取ることは誰も出来なかった。

飛行機はどんどん加速して地面に墜落しようとしている。

拓也とレンはその加速と重力の力に立っていられなくなった。

飛行機は雲の中に入り、機械音を上げて、地面に吸い寄せられるように降下していく。それはほぼ直角にきりもみ状の落下状態だった。

飛行機は雲を突き抜け、コックピットからも地面が見えた。飛行機は空気を切り裂き唸るように音を出し、降下していく。

もう地面までほとんど、距離がない・・・下にはロサンゼルス街並みが広がっていた。

このままでは飛行機の乗客だけでなく、ロサンゼルスに住む人達にも被害が及び大多数の死者を出すことになる。

だがレンと拓也もその落下スピードと重力に押され、動くことができない。

次の瞬間、飛行機の周りに2機の発光物体が機械音と共に現れた。

発光物体は飛行機の周りを取り囲むように、縦横無尽に回っている。と、その瞬間、飛行機全体が金属音と共に激しい光に包まれた。

機内にいた拓也とレンもその謎の光を目撃していた。

光が2人の視界を奪い目の前が真っ白になった。

Season 4 - 9 解決

「う・・・」

意識が戻り、起き上がったのは拓也だった。

拓也は起き上がった瞬間コックピットの窓から周りを見た。

そこは空港だった。

拓也が気絶している間に飛行機は無事に空港に着陸していたのだ・・・。

拓也は横で気を失っているレンを起こした。

「レン、起きて！！飛行機が！！」

レンは拓也に起こされて、気が付き身体を起こす。

レンは周りの光景を見て驚きの表情を浮かべている。

「これは・・・？助かったのか・・・？」

レンは疑問符を浮かべながら立ち上がった。

コックピットの窓から周りを見ると、警察や緊急医療班などの車両がこっちに向かってきていた。

そして、拓也達は無事に救出された。

「拓也、お前も見えたか？」

拓也達飛行機に乗っていた者のほとんどが医療室へと来ていた。そ

こでレンは拓也に話かけた。

「え？」

拓也はなんのことかわからずレンに疑問符を浮かべた。

「光る物体だよ」

その言葉を聴いて拓也は思い出したかのような表情を浮かべ答える。
「見たよ、光る発光物体が2機、飛行機の周りを飛んでた。それに
気が付いた瞬間、飛行機全体が光りに包まれた。なんかものすごく
あたたかい光りだった」

拓也は軽く笑顔で言った。

「拓也・・・いや、アダムお前は守られているのかも・・・」
「え？」

「お前にアダムだといったやつらにだよ。お前に死なれちゃ困る理
由があると思えない。今回、あの光る物体がもし現れなければ
俺達は全員死んでいた」

レンは拓也に向かって言う。

「そう・・・かもね。でも・・・俺はレンがすごいと思ったよ」
「ん？」

「あの状況で作戦を立てて、銃を持っている犯人にかかって行って、
見事に捕まえたし」

拓也はレンを見ていった。

「なにいつてんだよ？お前の協力があったからできたことだよ」
レンは少し照れくさそうに言う。

「いや、俺はレンの作戦通りに動いただけだよ。これからも・・・
頼りにしてるよ！」

拓也は笑顔でレンに言った。

「な・・・なにいつてんだよ。まだ終わってないんだぞ。美奈を助
けなきゃならない」

レンはもう拓也の顔を見れていない。

「うん、分かってる。助けよう美奈さんを！！」

その大声に医療室にいた全員が拓也を見た。

season 4 - 9 解決（後書き）

読んで頂きありがとうございます。season 4 長くなりましたがこれにて終了です。次回からはseason 5です。

よろしくお願いします。

s e a s o n 0 - 1 番外編 〽ロズウェル事件〽 (前書き)

この話は実際に起きたUFO事件で。 U N I V E R S A L M A N
A G E Rの番外編です。

season 0 - 1 番外編「ロズウェル事件」

1947年7月2日。その日、空は大粒の雨を降らしていた。黒い雲には、蛇か龍のように空を這う光のスジが激しく唸り、風は怒りをぶつけるかのように激しく吹き荒れていた。

「今日の嵐は酷いな・・・、牛達は平気だろうか？」

彼は、ブレイゼルという牧場主だ。アメリカのニューメキシコ州ロズウェル市の北西約120キロほどの所に家と原野を所有していた。

原野では牛を放牧しており、家畜の生産で生計を立てていた。

その日、彼は嵐の吹き荒れる中、原野で飼っている牛達が大丈夫かと心配していた。見に行こうにも、この嵐の中では危険だと判断し家の中で心配していたのだ。空は激しい光りと轟音が唸りを上げていた。

ブレイゼルは明日、朝一で牛を見に行くことを決め床につこうとした。

その時、激しい音と共に、地面を揺らす衝撃が走った。

その衝撃に近くで本を読んでいた息子は驚いていた。

ブレイゼルは稲妻でも落ちたのではないかと牛達のことを余計に心配になっていた。そして早く嵐が止むことを願うその日は早めに眠りに付いた。

翌朝、昨日の嵐が嘘のように空は晴れ上がっていた。ブレイゼルは息子を連れて、原野へ牛達の様子を見に朝早く牧場を訪れていた。

牧場についたブレイゼルたちは驚きの表情を浮かべた。

牛が何体か血を流して倒れていたのだ。

そして地面には大小のおびただしい数の金属の破片と見られる物体が辺り一面に散らばっていた。

ブレイゼルはその破片を手にとった。それは薄い紙のような物体だった。それはとても冷たく、表面には傷1つ付いておらず、銀色の破片は不気味な光りを放っていた。

牛の何体かはその破片が刺さって血を流して絶命しているものがあるようだ。

息子もその破片を手にとり、不思議そうに眺めている。

ブレイゼルはこの物体と周囲に広がる異様な光景に不安になり、すぐに郡保安官に連絡した。

数時間後、郡保安官がやってきて、ブレイゼル達と同じように破片を手に取り、いろいろ見ていた。

「これは、きっと飛行機かなにかの破片かもしれないな」

保安官はそういうとすぐに軍へと連絡した。

保安官が軍に連絡してから一時間と経たないうちに数百人の軍人がトラックに乗り、やってきて、その辺りを立ち入り禁止にして、手早く破片を回収してその場を去っていった。

その時ブレイゼルは陸軍航空司令部に連行されてしまった。ブレイゼルは訳がわからなかったが逆らうこともできず大人しく連行されていた。

次にブレイゼルが帰ってきたのは四日後だった。かえってきたブレイゼルに息子がすぐに駆け寄ってきて、あの日、

墜落した物体のことについて聞いた。だが、ブレイゼルは息子にこう言ったのだ。

「あれは、軍が秘密裏に開発した、実験用の気球だった」

金属の破片が多数発見された場所から数キロ離れたマグデレナという場所には1人の女性が立っていた。彼女は豪雨の雨の日に激しい音を聞いたために、それがなんなのか気になり、この場所まで来ていたのだ。

彼女の名前はルーズ・ベネットと言う。中年の女性だ。

彼女の前には、直径7メートルほどの円盤型の金属の破片と、その片隅には焼け焦げた人間のような遺体が4体転がっていた。その遺体は、人間より小さく、目尻がつりあがり皮膚はオレンジ色をしていた。

ルーズ・ベネットはそれに恐怖を感じて、すぐに軍へと連絡した。

するとそこにも軍はすぐにやってきて、立ち入り禁止にして、その円盤型の金属の破片と遺体4体を素早く持ち去っていったのだ。

一説には、軍はこの遺体をライトパーソン基地へと運び込んだとされるが真相は分らない。またこの件に関して軍は、最新の材料を使った無人の気象観測気球が墜落したと発表し、それ以上のことは一切公表していない。

これが有名な世界初のUFO墜落事件・・・ロズウェル事件である。

ブレイゼルの息子はブレイゼルが連行されていた四日間の中に死んだ牛の処分をしていた。ブレイゼルの息子は牛を一体、一体隅まで引きずっていき、牛肉用にナタで分断していた。

その時牛の体内から、金属の破片を見つけた。そうそれは、あの日原野に散らばっていた銀色の破片の一部だった。牛の身体の深くまでめり込んでいたため軍に見つからずに済んだのだろう。

ブレイゼルの息子は、その破片を静かにポケットにしまうとブレイゼルにも誰にもそのことは話さず隠し持つことにした。

そして、60年もの月日が流れたのである。

season0-1 番外編〜ロズウェル事件〜（後書き）

ロズウェル事件はUFO事件のなかでも特別有名ではないでしょうか？

今回は番外編でしたが、少しUNIVERSAL MANAGER
のストーリーと絡ませてあります。

season5-1 倉庫（前書き）

いつも読んで頂きありがとうございます。今回よりseason5です。また後書きにてあるコーナーを始めました。そちらもよろしくお願いします。

拓也とレンはタクシーに乗りながらタクシーから流れるラジオを聞いていた。

「昨日、ハイジャック事件がありました。ハイジャックに遭ったのはHP-608便で、乗客、乗員、計156名が搭乗していました。この飛行機はロサンゼルス国際空港に向かう途中で事件に遭遇。犯人はロサンゼルス収容所に収容されているアール・ハミルトンの釈放を要求しました。」

警察はこれを容認し、アール・ハミルトンを釈放しました。・・・がその直後飛行機の主翼付近のメインエンジンが爆発し、浮力を失った機体はきりもみ状に直角に降下しはじめ誰もが絶望を予測したのです。

その直後、謎の発光物体2機が突如出現し、飛行機全体を光りで包み込み、次の瞬間にはロサンゼルス国際空港に着陸しているという奇怪な事件がありました。この発光物体は多数の人が目撃しており科学的捜査が重点となるようです。

この事件の犠牲者は機長のモック・ジェリドリー、副機長のバルメトル・アーサー、乗客のビット・N・メルタルの3名で、犯人の1人も死亡した模様です。また釈放されたアール・ハミルトンも飛行機着陸後30分ほどで再度捕まりました。

なおこの事件の解決に協力した少年2人が昨夜突如姿を消し、警察は全力でこの2人の捜索を進めており・・・」

「不思議なこともあるもんだね」

タクシーの運転手が独り事のように言った。

「レン・・・やっぱりあの発光物体は幻覚じゃなかったんだね」

拓也がレンに言う。

レンはその問いに静かにうなずいた。

レンと拓也は夜の闇を利用して、医療施設から抜け出していた。まだ美奈を助けるという目的が残っているからだ。そして、今もタクシーで犯人が示した場所に向かっていた。

タクシーはロサンゼルス郊外のある場所で停止した。

拓也とレンはお金を払いタクシーを降りた。

そこは、複数の貸し倉庫がある場所だった。

特に寂れているわけではなく、割と綺麗な倉庫が多数並んでいた。

それらの倉庫の1つに犯人が示した倉庫があるのだ。

拓也とレンは目的の倉庫を探した・・・すると案外それは簡単に見つかった。

なぜならその倉庫の前には黒人のサングラスをかけたスーツの男が立っていたからだ。

「拓也とレンだな？」

黒人の男は言う。それを聞き拓也とレンはうなずく。

「例のものは持ってきたか？」

それを言われるとレンはうなずきディスクを服から取り出して黒人の男に見せた。

それを確認した黒人の男は倉庫のドアを開け2人を倉庫の中へと誘導した。

season 5 - 1 倉庫（後書き）

拓也「さあて始めましたよ。ユニマネ談話室！」

レン「なんだこれは？」

拓也「あ、レン聞いてないの？これはユニマネ談話室って言って、このUNIVERSAL MANAGERを読んで頂いている人達に送る疑問や質問に答えるコーナーだよ」

レン「聞いてないぞ」

美奈「よし、2人共揃ってるわね」

レン「げっ！？クレイジー女！」

美奈「なに？田中君？」

レン「田中って呼ぶな！レンって呼べ！」

美奈「ちなみにこれも禁煙よ。田中君」

レン「・・・くそ。クレイジー女め」

拓也「まあまあ美奈さん。せっかくの談話室なんだし、明るく行くよー！」

美奈「たつくん、うつさい！」

拓也「・・・ごめんなさい」

美奈「まあいいわ、それじゃあさっそく聞かれてもいないけど、質問に答えるわよ」

レン「聞かれてないなら答えるなよ・・・。自己満足か？」

美奈のパンチによりレンは談話室の外に吹き飛んだ。

美奈「それでは、質問読みます。えーと、みなさんの年齢教えてください。よし、たつくん答えて」

拓也「はい、えっとまず俺の年齢は18歳です。美奈さんの年齢は1つ上の19歳でレンの年齢は21歳です」

美奈「へえ田中君って一番年上だったんだ。なんか意外...」

拓也「とまあこんな感じで質問を受け付けているのでぜひメッセージ送ってくださいね。ありがとうございます」

Season 5 - 2 ディスク

倉庫に入ると白人のスーツを着た長髪の男が倉庫の中央付近で立っていた。

倉庫の中身は、ドラム缶がいくつか置いてあるだけでそれ以外なにもなかった。

拓也とレンは辺りを見回しながら倉庫の中央へと移動した。すると白人の男が言う。

「ようこそ、待っていたよ拓也にレン・・・」

「例のものは持ってきたようだ」

次に黒人の男が言う。

「ほう、なら・・・渡せ」

白人の男がレンに睨みつけて言う。

拓也はこの状況の緊迫した張り詰めた空気を感じ緊張して、額には汗がにじんでいた。

レンは白人の男を睨み返し言う。

「だめだ、美奈と交換だ・・・」

「馬鹿いうな。ディスクの中身が本物が確かめなきゃならないんだ。さっさと渡せ。本物だと確認できたら女には会わせてやる」

白人の男はさらにレンに睨みを利かせて言った。

レンはそれに押されたのかディスクを放りなげた。

白人の男は見事それを片手で掴み、黒人の男に渡した。

黒人の男は、用意していたノートパソコンでディスクの中身のファイルを開き見た。

しばらく眺めた後

「本物のようだ・・・」

黒人の男はファイルを閉じ、笑顔で白人の男に言う。

レンはその様子を目を離すことなく見ていた。

黒人の言葉を聞いた白人の男は、レンと拓也のほうを見て言った。

「よくやった……。これでお前達は用済みだ」

それを言い終わった瞬間、白人の男はポケットから拳銃を出し拓也とレンに向けた。

それを見た拓也は驚きの表情を浮かべながら言った。

「ちよつとどういうこと！？美奈さんは！？」

「クク……。あの女ならとづくに死んださ。だからちゃんとお前達もあの世に送って女に会わせてやるって言ってるんだよ」

「そ、そんな……。美奈さんが……」

拓也の表情は崩れ落ちた。辺りに静寂の時が流れる。

「なら……。取引は不成立だな……」

静寂を破り、それを言ったのはレンだった。

「不成立？ディスクはこつちにある。中身も本物だと確認した。後はお前達が死ねば、取引は成立だよ」

白人の男が不敵な笑みで笑いながら言う。

「そう思うならもう一度確認してみろよ」

レンは自信ありげに白人の男に言った。

それを聞いていた黒人の男はファイルを見ようとした。

その瞬間エラーの時に出る音がパソコンから流れた。

黒人の男はパソコンの画面を見ながら驚いている。

パソコンのディスプレイには、パスワードの入力画面が表示されていた。

season 5 - 2 ディスク（後書き）

読んで頂きありがとうございます。今回は談話室はお休みです。質問などはどんどん受け付けておりますのでよろしくお願い致します。

Season 5 - 3 美奈

「馬鹿な！さつきは・・・」

黒人の男はディスプレイに表示されていることに驚きを感じながら言った。

「驚くのも無理はないさ。簡単なプログラムをそのディスクに仕込んでおいたのさ。一度目は普通に開けるが、二度目以降はパスワードを入れないと見れないようにな。パスワードを入れないとディスクの中身は見れないぜ。だが美奈がもう殺された後なら教える気はないけどな」

それを聞いた黒人と白人の2人の男は悔しそうな表情をしている。

すると白人の男は2人に向けていた拳銃を降ろした。

そして次の瞬間、黒人の男が声を張り上げて大笑いした。

拓也とレンはその行動の意味が分からず疑問符を浮かべただ眺めるしかなかった。

「こいつは驚いた！完全に俺達の負けだよ！」

黒人の男が愉快そうに言う。

「ね？だから私の言った通りでしょ？」

その時どこかで聞いたような女の子の声が倉庫に響いた。
ドラム缶の後ろからその声の主が出てきた。

それは・・・斉藤美奈だった。

それを見た拓也は驚きのあまり大声で言った。

「美奈さん!!?」

その声に反応して、美奈は拓也のほうを見る。

「やつほお! たつくん・・・元気だった?」

「え? どういうこと? 美奈さんは殺されたって・・・?」

拓也は訳がわからずただ戸惑っていた。

レンはその様子をしばらく見ていたが、ポケットからあるものを取り出し美奈に向けた。

それは、ハイジャック犯が持っていた拳銃だった。

「あら? 田中君・・・物騒なもの持ってるのね?」

美奈は笑みを浮かべながらレンに言った。

「ちよつとレン!？」

拓也は意味が分からず混乱している。

「おまえ・・・何者だ?」

レンは拳銃を美奈に向けたまま美奈に聞く。

「教えてあげるからそんな物騒なものしまってくださいかしら?」

だがレンは表情1つ変えずに美奈に拳銃を向けたままだった。

美奈はため息をつく、ズボンのポケットに手を入れた。

それを見たレンは銃を力強く構え美奈に言った。

「動くな!!」

「大丈夫よ・・・ただ手帳を出すだけだから・・・知りたいんですよ? 私の正体が・・・」

美奈は不敵に笑いながらポケットから手帳を取り出した。

s e a s o n 5 - 3 美奈（後書き）

読んで頂きありがとうございます。すいません。今回も談話室はお休みです。引き続き質問は受け付けております。

Season 5 - 4 NSA

美奈はポケットから手帳を取り出すとレンに向かって放り投げた。レンは銃を片手で持ち、もう片方の手でそれを見事にキャッチする。そしてレンは手帳を開いた。その瞬間レンの表情は驚きに満ちた。

「NSA・・・国家安全保障局か・・・」

「そうよ、私はNSAの人間なの」

その手帳には美奈の顔写真と、NSAの文字があった。

「さ、銃を降ろしてくれる？ 田中君」

それを聞いたレンは銃を降ろした。

拓也は相変わらず訳が分からないようで、目を見開いて周囲の状況を把握しようとしている。そしてレンに聞いた。

「レンどういう・・・こと？」

「・・・つまり、美奈は国家安全保障局のエージェントだってことだ。恐らく誘拐事件は・・・」

「ああ、誘拐事件は彼が考えたのよ」

美奈は黒人の男を指差しながら言う。もうなんでもバラしていく。バラされたことを知った黒人は笑顔を見せながら言う。

「ハハハ・・・なかなかユーモアがあっただろ？」

その瞬間黒人の顔のすぐ横をレンの持っていた拳銃の弾がかすっていった。

レンは銃を下に降ろし、怒っているような表情で横を見ながら言う。
「おかしいと思ったんだ。俺達が盗み出したICBMの発射コードを一目見て本物だって言った時にな。DODに在ったファイルだ。普通の人間が一目見ただけで本物かどうか分かるわけがない。美奈はNSA・・・じゃあその2人もか？」

「残念だけど違うわ。紹介するわね。」

この黒人の人はブラッド・クルー、FBI捜査官よ。かつては元海軍のパイロットだった男よ。そして白人の男はデイビット・デイトCIAよ」

美奈は2人の男の説明をした。

「NSAにFBI、CIA・・・これだけ面子が揃って誘拐事件の演技をしましたじゃないだろ？なにかの事件か？」

レンは真剣な表情で言う。

「さすがは田中君ね、その通りよ。あなた達はアブダクションって知っているかしら？」

美奈は拓也とレンに聞いた。

やっとすこし状況を飲み込めてきのにまた知らない言葉が出てきて拓也は戸惑っていた。

「アブダクション・・・異性人による誘拐事件だろ？」

戸惑っている拓也を横目にレンが、答えを示した。

その言葉を聴いて美奈は笑みを浮かべた。

Season 5 - 5 アブダクション

倉庫には五人の人間がいた。拓也にレン、それに美奈にFBIにCIA。

美奈は『アブダクション』という言葉を出し二人に質問していた。レンはそれに答えた。

「そうよ。正確に言えば、不可解な誘拐事件の総称なんだけど、今では異星人による誘拐事件の意味が多いわね。私達3人はアブダクション事件を追っているの。」

はじめ、アブダクションのことを知ったのは偶然だった。ある誘拐事件をそのデイビットが担当していたんだけど、その誘拐された人間が三日後に突然戻ってきたの。そしてその人の口から『異星人に誘拐された』と・・・。

その後デイビットは、過去のUFOによる誘拐事件を調べてたの。それを私が偶然知って興味を持ったのよ。それで私がFBIに言うてブラッドにも捜査に加わってもらったの」

「ってことはもしかして大学生っていうのも・・・」
レンが真剣な表情で言う。

「正式に大学生であることには変わりはないわ。ただそれは新井拓也・・・たっくん・・・いえ、アダムに近づくためだったんだけどね。」

アブダクションについて調べているとある一人の女性に突き当たったの。彼女は15歳の時から現在の45歳までの30年に渡って数十回も異星人に誘拐されているのよ。

そして私達は、彼女に会った。そこではじめてアダムという人物が日本にいたのを知ったの。それから意外と早く調べることが出

来たわ。アダムと呼ばれる人間が新井拓也ということ、ある大学に入ろうとしていること。そして過去にアブダクションに遭っていること。ねえ？ たつくん・・・」

美奈のその言葉に拓也は目を見開いた。そう拓也は高校生の時に UFO による誘拐事件に遭遇しているのだ。拓也は、その時のことを思い出していた。

「その後私はその大学に入り、『宇宙の謎研究サークル』という変なサークルを作ったのよ。たつくんに接触するためにね。まんまとたつくんは罠に引っかったわ」

拓也はその言葉になぜか馬鹿にしたような言葉があるような気がしたが、あまり気にせず流した。

「じゃあ、美奈さんは俺が誘拐されていたことも知っていたの？」
拓也が聞く。

「ええ、知っていたわ。そして、あなた達をロサンゼルスに連れくる予定だったのよ。ちょうどその話をしているときにたつくんから電話がかかってきて。そしたらブラッドが誘拐事件を・・・」

美奈はまた誘拐事件のことを盛り返した。

盛り返されたブラッドは焦りながら言う。

「まあいいじゃんか！ おかげでレンの実力も見れたわけだし！ 彼はすごいよ！」

ブラッドは必死だったが、それは納得いく理由だった。

season 5 - 6 金魚

「それで、俺達をロスに連れてきてなにがしたかったんだ？」
レンが言う。

「あなた達にはこれからある人物にあってもらうわ」

美奈の言葉に拓也が言う。

「ある人物？」

「私達が最初に接触したアブダクションを数多く経験している女性、
レイラ・バードニツクに」

美奈の言葉に拓也とレンは静止した。

「レイラはここロサンゼルスに住んでいるの。彼女に会っている話を聞いてもらいたい。それがこのアブダクション事件の解決の糸口になるかもしれないからね」

拓也とレンは美奈のその言葉に少し間をおいてからうなずいた。

そしてようやく拓也とレンは肩の力が抜けたように、その場に座り込んだ。

やはりよほど緊迫していたのだろう。レンは大きなため息をつき気が抜けたようにその場に倒れこんだ。

それを見て、拓也もその場に倒れこもうとしたがそれは美奈によって止められた。

「あ！ たつくん！」

拓也はその声に反応して身体を硬直させて、美奈を見た。

「シュワルツブライアンはどうしたの？」

拓也はその聞き覚えのない名詞に疑問符を浮かべた。

「・・・シュワ・・・？」

「シュワルツブライアンよ！部室にいた金魚！」

拓也はその言葉を聞いた途端顔が青ざめた。そう金魚は部室に置いてけぼりにしてきていたのだ。

拓也はそれを思い出し手振りを踏まえて美奈に説明しようとしていた。

「あ・・・あれは・・・その」

美奈はそれを言いかけた拓也を見て、とても素晴らしい笑顔を見た。

だが拓也はその笑顔に騙されずに目が笑っていないことに気が付いた。

「たつくん・・・帰った時シュワルツブライアンが死んでたら・・・分かってるわよね？」

美奈は笑顔でとてもやさしい声で言っているが、目は鬼のような目をしていた。

それに寒気を感じたレンも起き上がり、美奈を見た。

そこには鬼が立っていた。

拓也達が部室に戻る日、その日が拓也とレンの命日に決定した。

season5・6 金魚（後書き）

読んで頂きありがとうございます。season5はこれにて終了です。

season6からもどうぞよろしくお願いします。

season 6 - 1 盗聴器（前書き）

かなりの期間が開いてしまい、読んでくださっている方には大変ご迷惑をおかけしました。これから頑張って執筆してまいりますのでどうか応援よろしくお願いします。

またこの話から一話の文章量が多少多くなります。

無事に美奈と再会した拓也は、アブダクションという『異性人による誘拐事件』のことを知った。そして拓也達五人はそのアブダクション事件の経験者でもあるレイラ＝バードニックという女性に会うために車でロサンゼルス郊外のある場所へと来ていた。

「さ！ 着いたわよ。ここがレイラの家よ」

美奈の声で拓也とレンが車の窓の外にあるある家を見た、そこはアパートだった。どうやらレイラはアパートの一室に住んでいるようだ。拓也達は車から降り、先を歩く美奈の後についていく。

金属音が鳴り響く階段を登り、着いたのはアパートの三階の角部屋だった。美奈はドアの前、その後ろに拓也とレンがさらに後ろには、ブラッドとデイビットがいる。

美奈はインターホンを鳴らし、レイラを呼ぶ。……しかし、なんの反応もない。

不思議に思った美奈は、ドアノブへと手をかけた。鍵は、開いていた。

美奈はブラッドとデイビットのほうを向き、アイコンタクトを送る。アイコンタクトを送られたブラッドとデイビットは懐から銃を出し構える。そして、デイビットは後ろへの警戒を始めた。ブラッドは前へとやってきて、ドアの前で銃を構える。

そして、ゆっくりドアを開けるとブラッドは腕を前に出し、いつでも撃てる状態に構えた。そこにはなにもなく物静かだった。拓也が覗き込もうとすると、突然顔を押さえつけられた。美奈によって

「あんた達、素人はそこで大人しくしてなさい。中を見てくるから」
そついい残して、美奈はブラッドと共に中へと入っていく。

部屋の奥へと進むと、机が置いてあった。綺麗に片付けられていて、パツと見、誰かに荒らされた形跡はない。レイラの部屋はともすつきりしていた。生活に必要なもの以外は置いてないといった感じで、特別なものはなに一つなかった。

ブラッドと美奈は、緊張状態を保ちながらも辺りを見回した。すると美奈があるものを発見した。

それは机の上に置かれていた紙だった。美奈はその紙を手に取り、書かれていることを見て、部屋の中を歩き回りながらさらに周囲をよく観察した。まるで何かを探しているかのような。机の下、電話機、電気類やらタンスの中まで……。そして美奈がある一点を見つけた後、ブラッドにアイコンタクトをしてその一点を指指した。

ブラッドはその場所へと行き、ポケットに忍ばせていたバタフライナイフを使って、そこをこじ開けた。そこは、コンセントの差込口だった。ブラッドはコンセントの差込口を無理やり開けると、中にあるものを取り出した。それは普通コンセントの差込口にはあつてはならないものだった。

ブラッドはそれを取り出すと、床へと放り投げ足でそれを潰して壊してしまった。

それを確認すると、美奈はブラッドに拓也達を連れてくるように指示を出した。ブラッドはその指示に従い、拓也達を部屋の中へと入れた。

「美奈さん？ どうしたの？」

拓也は不思議そうに美奈に聞いた。

美奈は、先ほどブラッドが踏み潰して壊した物を拾い上げ、拓也達に見せた。

「それは？」

拓也が聞いた。

「それは……、盗聴器か？」

答えを言ったのはレンだった。

「ご名答、盗聴器よ。レイラの家これが仕掛けられていた。恐らくまだほかにも盗聴器があるはずよ」

「それって……」

拓也は疑問符を浮かべている。

「レイラはなにかあって、もうすでにこの場所から逃げ出した後のようね。机にこんなものが置いてあったから」

それは、先ほど美奈が見つけた紙だった。美奈は紙の内容は言わずに、拓也達を部屋の外に出るように促すと、レイラの部屋から出て行った。

部屋から出た拓也達は階段を降り、再び車へと乗り込んだ。美奈は、運転席に着いているブラッドに指示を出している。ブラッドはそれを聞くと、静かに車を出した。

拓也達はブラッドの運転する黒のBMWに乗っている。前の座席には運転しているブラッドと助手席に乗っているデイビット。後ろの座席には真ん中に美奈が、両端に拓也とレンが乗っている。五人だと結構きつめだ。

ブラッドは車で高速へと入り、速度を上げ始めた。

「ねえ、美奈さん？ 一体なにを見つけたの？」

拓也の疑問を聞いた美奈はポケットから先ほど見つけた紙を取り出し、拓也に見せた。そこには『D - 1』と書かれていた。

「え？ どういう……」

「それは危険レベルを表しているの。デフコンみたいなものね」

「デフコン？」

拓也はまた聞きなれない単語に疑問を浮かべていた。美奈は拓也のほうを見て大きくため息をつくときくと軽く舌打ちをした。

「ほんとになにも知らないんだから。マジ馬鹿！ デフコンっていうのはディフェンスコンディションの略で1〜5までの状態があって、1が一番危険だということ。そのD - 1もそれと同じで一番危険な状態となつていというメッセーじよ。あたし達はレイラとあらかじめこういう状態になつた時の対処法を考えてあつたの。もし家をすぐにも出なければならぬほどの危険な状態になつた時は、

D - 1 地点に行くようにね」

その言葉に拓也はまた疑問符を浮かべた。

「D - 1 に行くように？」

「そうよ。D - 1 は危険レベルと共に場所を表しているの。だからいまあたし達はD - 1 に向かつてるってこと」

美奈は説明し終わると前を向いた。

「だが、美奈。それなら大丈夫なのか？ 尾行とか」

それをレンから聞いた美奈は今度はレンのほうを向いて答える。

「さあ、いまは尾行されているかも知れないけど、D - 1 まで尾行するのは不可能なはずよ」

「どういうことだ？」

レンは美奈に疑問符をぶつける。

「着くまでに分かるわよ」

そう言つと再び美奈は前を向いた。

「どう？ デイビット？」

助手席に座っているデイビットはノートパソコンを広げて、なにやら探し物をしているようだった。手には先ほどの盗聴器を持って

いた。

「いや、分からないな。ただこの盗聴器は市場で出回ったやつじゃないことは確かだ」

「そう」

美奈は残念そうな顔をしている。デイビットは盗聴器からなにか手がかりがないか調べていたのだ。そう盗聴器を仕掛けた人物を探すための手がかりを。

車は、しばらく行ったところで高速を降りた。

ずいぶん遠くまで来た様で、回りにはさきほどまであったビル郡はなくなり、民家がポツポツと立っている程度だった。さらに数時間走るとその民家もなくなり、広い荒野へとでた。そこには永遠に続くのではないかと思うほどに長い直線の道路があるだけで、車が走ると砂埃を上げているのが分かる。

ブラッドが運転するそのBMWは土煙を上げながらその荒野を駆け抜けていく。

s e a s o n 6 - 2 D - 1 (後書き)

読んでいただきありがとうございます。

Season 6 - 3 レイラ

「なるほど、尾行が不可能っていうのはこういうことか」

レンが周りの景色を見ながら言った。

そこは、ただの広い荒野が広がっていた。何キロ先までも見ることが出来る視界良好の状態は周りに誰もいないことを物語っている。尾行しようにもここまで見通しがよければ出来ない。

その広い荒野を黒いBMWが一台、かなりのスピードで走っている。

さらにしばらく走ると前方に、岩山のようなものが見えてきた。多少の森林もあり、砂漠で言うところのオアシスのようなものが姿を現した。どうやら車はあそこを目指しているようだ。つまりD-1という場所はある岩山の所ということになる。

車は、その場所へと行き着くと、停止した。

ここまでかなりの距離を走ってきたため、車から降りた拓也達は全身に酷い疲労感を感じた。五人もの人間が車の中に閉じ込められ長時間車に揺られてきたのだから当然と言えば当然なのだろうが。車というのは運転していなくても、乗っているだけで疲れるものだ。

「こつちだ」

デイビットが拓也達を呼び寄せた。デイビットが呼び寄せたその先には、一軒の白い家が建っていた。

「ここに、そのレイラって人がいるの？」

「ああ、そのはずだ」

拓也の質問に間髪いれずに答えたのはブラッドだった。

拓也達はブラッド達の後ろからついていきその家の前までやってきた。

だがそこまで来ると、ブラッドとデイビットは再び銃を取り出し、警戒を始めた。おそらく、ロサンゼルスでのことを経験として生かしたのだろう。美奈も今度は銃を構えている。そして、静かにインターホンを鳴らした。

すると、インターホンの音が家の中全体に響き渡る。当然外にいた美奈達の耳にもその音は響き渡った。

インターホンの音が消え、しばらくすると中から足音が聞こえてきた。

そして静かに、ドアノブが動く。それとほぼ同時にドア本体が外へと開き始める。

「あら、お持ちしましたよ」

出てきたのは、中年の女性だった。

「レイラ、よかった。無事だったのね」

どうやら、この女性がレイラという名前の女性らしい。レイラが無事なことを確認すると、美奈達はレイラへ連れられてレイラの家の中へと入って行く。そして、客室のような広いリビングに通されて、座るようにレイラに促された。そして、拓也達は椅子へと座った。ただ一人、デイビットだけは壁へともたれかかっているが。

レイラはキッチンから飲み物を持ってくると全員にそれを配った。配り終わると自らも後ろの景色がよく見える大きな窓ガラスの近くの椅子に座り、持ってきた飲み物を一口飲んで口を開いた。

「ようこそ、みなさん」

「レイラ、一体ロサンゼルスでなにがあったの？ D-1なんてただ事じゃないでしょ？」

美奈がレイラに心配そうに聞く。

「ええ、ちゃんと話すわ。でもその前に……」

そう言うと、レイラは拓也のほうを見た。拓也もレイラのほうを見ていたので目が合った。そしてレイラはそのまま拓也から目を離さず

「お久しぶりね。アダム」

レイラは、自らの口の端を上げ笑顔で拓也にそう言った。

Season 6 - 4 チルドレン

「久しぶり？」

レイラの予想もしない言葉に疑問を投げかけたのは拓也だった。初対面のレイラから出た言葉に拓也が戸惑うのも無理はない。

「ええ、アダムあなたと私は何度も会っているのよ。一番最後に会ったのはあなたが高校一年の時ね。覚えてない？ 誘拐されたときのことを」

拓也はその言葉にハツとして昔誘拐されたときのことを思い出していた。

「思い出したみたいね。ほんとあなたはそれ以前から何度も誘拐されているんだけど、記憶にあるのはその一回だけのはず。それは覚醒が近いからなんだけど」

「覚醒？」

拓也はレイラに質問をする。

「覚醒のことについては後々分かってくるわ。もうそれほど遠くないから。大事なのはあなたの認識力よ」

拓也はその言葉に疑問符を浮かべている。

「アダム、あなたを誘拐したのは異性人ではないわ」

「え!？」

その言葉に拓也だけでなく美奈も驚いているようだ。拓也はいままであの時誘拐したのは異性人だと思っていたのだから無理もない。

「彼らは”チルドレン”と呼ばれる生命体。この星、地球で生まれた”第三種”の知的生命体よ。作ったのは人間、愚かな人間の神の真似事により作り出されたの」

「チルドレン……」

「チルドレンはアメリカとロシアの共同研究機関がヒトゲノムを参考にして作り出したバイオ生命体なの。その目的は浮遊型飛行物体の飛行テスト用と生態の解析、戦争への投入などの軍事的。あな達がUFOと呼んでる飛行物体はどれも反重力原理を応用した物体なのよ。それは瞬間的に時速4000キロまで速度を上げることが出来るの。その時に人体にかかる重力は約40G。彼らはあの小さな身体に人間では耐える事の出来ないその圧倒的なスピードに耐えるだけの肉体を持っているのよ」

「……異性人じゃない？ この地球で生まれた生物……」

拓也は今までの認識と違う出来事に戸惑っていたが、なぜか不思議に納得していた。しかし美奈は、納得してないようだ。

「ちょっと待って、それじゃあレイラやたくんが誘拐されたのはアメリカやロシアが関わっているってこと？」

「いいえ、アメリカもロシアもアダムや私の誘拐に関しては関わっていないわ。まあ当然気が付いてはいるんだろうけど、何も妨害を

してこないのは妨害する必要がないのか、それとも……。とにかくアメリカやロシアは関係ない」

「でも、じゃあなんでたつくんの誘拐を？」

「彼らチルドレンは知能も感情も持つ生命体なの。人並みにね。当然反発意識は出てくるわ。つまり私達に接触して来ている彼らはチルドレンの中でもはみ出し者って言うことね」

「じゃあなんのために危険をおかしてまでそんなことを？」

それを聞いたのは拓也だった。

「それは、アダム……。あなたよ。アメリカもロシアもはみ出し組みも目的はアダム一人。彼らはあなたの中にある一つの力に注目しているの。それはアダムが生まれる遙か昔から受け継がれてきて、育まれてきた人類の”究極の進化”の形……」

「究極の進化……」

拓也は真っ直ぐレイラの目を見ながら話を聞いている。

「いったい彼らは俺にどうしろと？」

「いまは、何もしていいわ。でも時が来たらあなたは動かざるを得ない。覚悟しておいてね、アダムあなたは生まれた時から、いえ……生まれる前からこうなる運命だった。そしてあなたにそれを伝えるのが私の運命なの」

「え？」

「私や、ほかのUFO接触者、いわゆるコンタクティーは全てあなたに伝えるべきことがあるから存在しているの、だから私はアダムのことを知っていたし、ほかのコンタクティー達もアダムのことは知っているわ。でもそれが私が逃げなければならない理由の一つでもある」

その言葉に美奈はハツとした。そうロサンゼルスで会う予定だったレイラはこのD-1に避難している。ロサンゼルスでなにかあったのか、美奈はそれが気になっていた。

「ロサンゼルスでなにかあったの？」

美奈の質問にレイラは美奈のほうを向いた。

Season 6 - 5 襲撃

「危険を感じたの」

レイラの言葉にその場にいた全員が耳を傾ける。

「あなた達と会う約束をしていた前日電話が鳴ったわ。あなた達か
と思ってでてみたら無言電話ですぐに切れたの、その後部屋の外に
怪しい黒いバンが停まったの。私は直感的に危険を感じて、買い物
に行く振りをして部屋にメモを残して出て行ったの」

「なるほど、私達がレイラの家に行った時、盗聴器を発見したの。
それでなにか合ったのかと思ったんだけどそういうことだったのね」

話を静かに聴いていたレンが話に入ってきた。

「でもその黒いバンって何者なんだ。俺は日本にいるときから俺達
を監視していたのはFBIやCIAだと思っていたんだが、その話
を聞く限り違うみたいだな」

「私達NSAの人間でもないわよ。私はあなた達と直接接触するこ
とで監視するという方法をとったんだもの」

美奈が間髪いれずに答える。

「だとすると、なんかの秘密組織か？　なんかよくあるじゃねえか。
MIBとかフリーメンとか」

レンはレイラの顔を見た。

「いえ、分からないわ。でもチルドレン達以外のなにかが私達を監視していることは間違いないよね」

「静かに！」

その時、静かに話を聞いていたデイビットが口の前で人差し指を立てて突然言った。その言葉に全員が静まり返りデイビットを見た、そのため辺りには沈黙が走った。

しかし、よく聞くと微かに音が聞こえる。確かに全員の耳に聞こえてはいるのだが、音の正体が分からない。しかしそれは確実に大きくなっている。

「これは……！」

みんなと同じように聞いていたブラッドがその音の正体に気が付いたようだ。しかしそれと同時にほかのみんなもその音の正体に気が付いた。それは間違いなくヘリコプターのローターの回転音だった。

「伏せる……！」

ブラッドがその言葉を発すると同時に、レイラの背後にある大きな窓ガラスの後ろに黒いヘリコプターと思われる機体の上から砂煙りと共に姿を現した。もうその時にはヘリコプターのローターの回転音ははつきりと聞こえている。

そして拓也達がその機体の存在に気がついた瞬間、機体の両側に見えている機関銃が火を噴いた。毎分850発もの連射で吹き抜け

る弾はレイラの背後のガラスを簡単に突き破り、床を打ち抜きながら拓也達のほう目掛けて迫ってくる。拓也達は伏せながら避けて対応し、紙一重で奇跡的に第一撃目の攻撃を避けることが出来た。

「走れ！！」

その言葉を言ったのはデイビットだった。デイビットの言葉に釣られ全員がドア目掛けて走る。しかしそのすぐ後ろを第二撃目の攻撃となる機関銃の弾が迫ってくる。部屋は割れたガラスにボロボロになった床、穴を開けられ中から綿の出たソファーと散乱した机の破片や棚やコップやお皿の破片が飛び散り足の踏み場もないほどになっっていた。

間一髪で弾の追撃を逃れ、全員が外に出た瞬間ヘリコプターの機体についていたミサイルが発射された。それは後部から煙を吹きながら一直線に軌跡を描きながら割れた窓ガラスから部屋の中へと入った、その瞬間家は大爆発を起した。

家から出たばかりだった拓也達はその爆発の衝撃で家の破片と共に吹き飛ばされ、一緒に飛んできた家の破片の下敷きになった。

爆発により出来た天へと登る漆黒の煙の中、黒いヘリコプターはしばらくその場に空中で停止していたが、突然上昇し、向きを反転させ地平線の彼方へと飛び去っていった。

s e a s o n 6 - 5 襲撃（後書き）

読んで頂きありがとうございます。 s e a s o n 6 はこの話で終わります。次回は s e a s o n 7 です。

これからもよろしくお願いします。

Season 7 - 1 ブラックホーク

「美奈……どうだ？」

美奈の元へと駆け寄ってきたのは、レンだった。美奈のそばにはブラッドとデイビットがいる。レン達がいるのは病院の廊下だった。

あの時の襲撃で、全員が軽度の怪我を負った。レンは軽く頭を打っていたが、入院するほどではなく、とりあえずの処置としてガーゼを額につけている。

美奈は、腕を軽く切ったようだが、こちらも軽度の傷で、ブラッドもデイビットも同じく身体に軽度の傷を負っているがそれほどの傷ではない。

「まだ起きないわ」

襲撃で唯一、大怪我を負ったのは拓也だった。家の破片の下敷きになり、足を骨折し、腕も骨折していた。さらに頭を打ち意識不明の重症だった。さらに場所が場所だっただけに、無線で緊急用のヘリコプターを要請し、病院に着くまでに多少時間を費やしてしまった。

幸い意識は失っていたが呼吸はしていたので、なんとか助かったという状態で、現在は絶対安静で意識が戻るのを待っている状態となっている。

「それでレンあなたのほうはどうだったの？」

レンはその場を離れ、レイラと共に調べものをしていた。レイラはまだ引き続き調べているが、拓也が心配になってひとまずこつちに戻ってきたのだ。

「レイラがまだ向こうで調べているが、幾つか分かったことがある。俺達を襲ったヘリコプターのことだが、あれはU H - 6 0 ブラックホークと呼ばれるヘリコプターに非常に近いことがわかった」

「確かに似ているな」

そう言ったのは元海軍のパイロットで現在はF B Iのブラッドだった。

「ああ、だが似てはいるが違うもののような気がする。ブラックホークは強襲用のヘリではあるが、普通の戦闘ヘリのフォルムとは違う。それは輸送も用途として兼ねているからだ。だがあのヘリのフォルムは明らかに戦闘ヘリのフォルムだった。サイドについていた機関銃はM A G ……、毎分850発もの弾を発射できるものだ。これは弾から簡単に調べることが出来た。これもまたブラックホークに装備可能な武器とされている」

「それじゃあ、あの結局のとこあのヘリはなんなの？」

「分からない。ただもう一つ調べてるときに分かったことがあるんだが……」

「なんなの？」

美奈は疑問符を浮かべている。レンはその先を言わずにすこし黙ったままだ。しかし、意を決したように口を開いた。

「UFOだ」

美奈もその場にいたほかのものもその言葉に驚いた表情を浮かべている。

「調べているとわかったんだが、UFOは擬態できるらしい、ヘリコプターや飛行機や車にも……だが当然これは未確認、あくまで可能性としての話だがあのヘリはUFOが擬態したものだとも考えることも出来る」

「擬態か……」

その場にいた全員がその言葉に悩まされた。ほんとうに擬態できるのならば、上空を飛んでいるヘリコプターや飛行機、道路を走っている車でさえ警戒しなくてはなくなる。

「とにかく、今は未確認の情報に惑わされても仕方がない。いまはほかに出来ることをやるしかないだろう」

それを言ったのはデイビットだった。デイビットはそれを言うと、その場から離れるように歩き始めた。

「どっくの？」

「CIAだ。なにか手がかりとなる資料があるかもしれない」

その言葉にブラッドも思いついたようにデイビットの後に続いた。

「俺もFBIでなにかないか調べてくるよ！ X-FILEとか！」

そう言って笑いながらデイベットと共にエレベーターに乗って姿を消した。

「で……どうする？」

レンが美奈に聞く。

「どうするもなにも今はたっくんの意識が戻るまでこの場から離れることなんて出来ないわ。何者かが私達……いえ、アダムの命を狙って攻撃を仕掛けたことは間違いないしね」

「……だな」

そう言つとレンと美奈は拓也が寝ている病室へと入っていった。

s e a s o n 7 - 1 **ブラックホーク（後書き）**

読んでいただきありがとうございます。

今回からseason7です。よろしくお願いします。

Season 7 - 2 FBI

ブラッド・クルーは元海軍のパイロットで現在はFBIの捜査官として活躍している。しかし彼の経歴については、不明な部分も多く、FBIの中でも特別な存在として位置している。

海軍時代のデータもほぼ皆無で、ブラッド自身もそれを多くは語ろうとはしない。

「おーす！ トレバー！」

ブラッドはその性格で、FBIの中にもたくさんの顔なじみ、いわゆる友達がいた。誰にでも話しかけていき、陽気な彼はそれでいて結構な人気ものだ。恐らくFBIの中で最も友達の多い人物だろう。

「お！ レイマー、ちょうどよかった」

レイマーとは、FBI内でのブラッドの相棒で、FBIからの事件と一緒に捜査している女性だ。彼女は調査などの面で非常に優れた能力を発揮している。実績も上げている。

「レイマーに調べて欲しいことがあるんだけど……」

「調べもの？ あなた今確かUFO関係の事件に関わってるんじゃない？」

「ああ、そつだよ」

「つてことは、UFO関係？」

ブラッドはレイマーのその言葉に頷いた。レイマーはそのブラッドを見て、腰に片手を当て大きなため息をついた。

「あのねブラッド、UFOなんか存在しないのよ。飛行機や人工衛星の見間違いやプラズマ現象などの自然現象、幻覚などが引き起こす超現象に過ぎないわ。そんなものをいくら調査したところでなにも出てこないわよ」

「そんなことはないだろ？ 証拠のあるUFO事件もある」

ブラッドはレイマーの否定に肯定の意思を示した。

「証拠？ そんなのがあんなら見せてほしいわ」

「うっ……、今はもってないが……」

その言葉にレイマーは、再び大きなため息をついた。

「まあいいわ。暇だし、少しくらいなら手伝ってあげるわよ、それでなにが知りたいの？」

「ほんとかい？ ありがとうレイマー」

「おれなんていいから、なにを知りたいの？」

ブラッドはその言葉に少し考え込んでいた。一体なにを調べたらいいのか。最近起こった出来事が多すぎて分からなかった。ブラッドは少し考えた末、調べてもらうことを選んだようだ。

「そうだ、UFOの擬態について！」

「え？……、UFOの存在すら不確定なのにその擬態について？」

ブラッドは頷いた。

「分かるわけないでしょ？　んゝ、あ！　じゃあ、あれを調べる？
X - FILE」

「X - FILE……、ほんとに存在しているのか？」

「存在はしてるわよ。事件の資料をAゝZに分けてあるからね。ただドラマのようにはいかないけど……調べてみる価値はあるんじゃない？」

ブラッドは頷き、二人は資料室へと向かった。

Season 7 - 3 CIA

デイビット「ディートはCIAだ。彼がCIAに入ったのには銃の腕をアメリカ大統領に認められたからだ。彼は某大学に所属していて、その時から射撃をしていた。そして射撃の大会において優勝を多く重ね、国際大会でも優勝、実績世界一の銃の腕前を持つ男とされていた。そして偶然、それを知った大統領に気に入られたからだった。

CIAでの彼の役職は、情報局部署しかしこれは仮の役職で、本来の役職は諜報にある。国家レベルの情報の収集。いわゆるスパイである。

そんな彼が今回レイラの件に関わった経緯は、
” 証拠の隠滅”。

UFO事件に関する証拠の隠滅として、アブダクションについて調べていたのだ。そこでこれらの事件が実際に起こり、さらに国の圧力により証拠が消されていることを知り、国に秘密裏に拓也達と行動を共にしていた。

情報の収集のために、CIAに戻ったデイビットは、さっそく自分のデスクについて。表向きは情報を統括する部署にいるため、当然部屋も情報部の部屋だ。

デイビットは自分のパソコンを開き、厳重に閉められたパスワードを一つ一つ入力していった。

デイビットも、レンに負けずとなかなかのパソコン捌きだ。

デイベットが開いたのは、アブダクション事件に関する資料だった。初めて起こったアブダクション事件から最新のアブダクション事件まで全てのデータが収められている。仮にこの場面を見られたとしても、UFOによる誘拐事件など誰も信じるわけがなく、見ただけ見る事が出来る。

だが、これは真実の情報であり、真実を知るものだけが理解できる情報だった。もちろんこの情報はすべてアメリカ大統領も知っている。

それらの大量の事件のリストの中から、デイベットが開いたのは、拓也が誘拐された事件だった。

そこには誘拐された日や状況が細かく記されていた。デイベットはその情報を見ながらレイラの言葉を思い出していた。

レイラは、アメリカもロシアも拓也の誘拐には関わっていないといていたにも関わらずここに国のデータが存在している。そして、レンから聞いていた言葉も思い出していた。それはデイベットも知らなかったホワイトハウスの地下にあるという極秘の軍事基地である。そこにも拓也のアブダクションのデータがあるとレンは言っていた。

つまり、この事件はアメリカ大統領も知っているということ、しかし裏の仕事で証拠隠滅をしているデイベットはこの拓也の事件については何一つ聞かされていない。証拠の隠滅も頼まれていない。

UFO関係の事件のほとんどの証拠の隠滅に関わってきたデイベットにとってこれはあまり例のないことであり不思議なことだった。

データーとして残っているのにも関わらず、隠滅をしていないということは、する必要がないのかそれともほかの誰かが隠滅したのか……。

デイビットはその事件について、念入りにチェックしていた。

そして、デイビットはあることに気が付いた。

それは、拓也がチルドレンのはみ出し組みに誘拐されたというアブダクション事件、それを目撃したのは拓也だけではないと言うこと。あの時、一緒にいた部活の仲間全員がUFOを目撃しているのだ。そして、その場に残されたミステリーサークル。

なにかの手がかりになるかも知れないと直感したデイビットは、すぐに日本に向かう準備を始めた。

Season 7 - 4 病室

病室にいた美奈の携帯電話がなる。

「どうしたの？ デイビット」

『拓也はどうだ？』

「意識はまだ戻らないけど、安定しているし大丈夫よ」

『そうか、俺はこれから日本に行く』

「日本に？」

『ああ、拓也がアブダクションされた事件の現地調査と目撃したとされる部活仲間をあたってみる』

「そう、わかったわ。気をつけてね。ブラッドもFBIで手がかりを探してくれてるみたいだから」

デイビットは用件だけ言って電話を切った。

「なんて？」

聞いたのは拓也の寝ているベッドを挟んで向かいに座っているレオンだった。

「デイビットが日本に向かうそうよ。たっくんのアブダクション事件の目撃者をあたるらしいわ」

それを聞いたレンはため息をついた。

「まったく、みんながいろいろ調べてくれてんのに、当のアダムは意識不明状態、いったいいつになったら目が覚めるんだ？」

「仕方ないわよ。一番重傷だったんだし、それに逆に考えれば少し休むのにいいかも知れないしね」

「はあ、なんかやさしくなったな。美奈キャラ変わった？」

その言葉が言い終わると同時にベッドを挟んで向かいの席からパンチがレンの顔を捉えた。

「いや、やっぱ変わってねえ」

「ふざけたこと言っていないで、レイラでも見てきてよ。ここは私が見てるから」

その言葉に、レンは立ち上がり部屋を出て行った。

いま部屋には拓也と美奈の二人だけがいた。

「たつくん……」

美奈は拓也の顔を見て怪我をしている拓也の手を静かに握った。だがその行為にも拓也は目が覚めることなく眠っていた。美奈はしばらく手を握っていたが、手を離し突然立ち上がった。

「ちょっとトイレに行ってくるね」

美奈は部屋を出て行く。拓也は相変わらず何事もないように静かに眠っていた。

しばらくしてトイレから戻ってきた美奈が、部屋に入ってきた。

そこには、ベッドで寝ているはずの拓也の姿が忽然と消えていた。

Season 7 - 5 消失

「……たつくん？」

美奈がトイレに行っているわずか五分ほどの間にさっきまでそこで寝ていた拓也の姿はなくなっていた。美奈は周囲を見回したが荒らされた様子もなく、拓也に付けられていた点滴やその他の器具はそのまままるで拓也だけがその場から消えたようだった。

と後ろから話声が聞こえてきた。それはレンとレイラだった。

「レン！！」

美奈が病室から突然飛び出してきたので、レンとレイラは驚いてしまった。

「な、なんだよ？ どうしたんだ？」

「たつくんがいないの！」

その言葉にレンとレイラは驚いて、急いで病室を覗いた。そこには確かに拓也の姿はなく美奈にすぐ事情を聞いた。この場にいる全員が混乱している。僅か五分。意識不明だった人間が消えるには不自然なほど短い時間だった。

「まさか……アブダクションか？」

レンはレイラのほうを見ていった。

「分からない……、でもこんなことを出来るのは彼ら以外考えられない」

レンは頷き、美奈のほうを見た。

「美奈、これは恐らくアブダクションだ」

「ど……どうすればいいの？」

美奈はいつになく心配そうな表情をしている。レンはその美奈を見てすこし戸惑っているようだ。

その時、美奈の携帯が鳴った。美奈は拓也かと思い、すぐに携帯の画面を見た。しかしそれはブラッドからだった。美奈は少し複雑な気分で携帯にでた。

『美奈！ そこにみんないるか？』

「いえ、実は……」

美奈はブラッドに拓也がいなくなったことを話した。

『……、そうか。とりあえずそこにいるみんなでFBIに来てくれ。実は資料を探しているときにあるものを見つけたんだ』

「わかったわ」

美奈は携帯を切り、レンとレイナにブラッドからの電話の内容を説明した。レンとレイナは拓也のいた病室から離れていった。

美奈は一番最後まで病室を見ていた。

「……たっくん」

美奈はその一言を言い残し、病室を後にしてレン達の乗るエレベーターに向かった。

s e a s o n 7 - 5 消 失 (後 書 き)

読んでいただきありがとうございます。

s e a s o n 7 は 終 了 で す 。 次 回 か ら は s e a s o n 8 で す 。
よろしく願います

Season 8 - 1 レイマー

タクシーに乗り美奈達は数時間かけて、ワシントンまでやってきた。そしてFBIの本部までやってくると正面玄関にブラッドが手を振って立っていた。美奈達はタクシーを降り、ブラッドの元へと寄って行った。

「こつちだ！」

「そんな派手に手を振らなくてもわかるわ」

美奈はブラッドが手を振っていたことが気に入らなかったのだから冷たくあしらった。

「へえ〜ここがFBIか」

レンは物珍しそうにFBIの本部を見ている。

「なんだ。レン、FBIは初めてか？」

「ああ、ハッキングしたことはあるが来るのは初めてだ。外見は知らないのに中身だけ知ってるって変な気分だな」

その言葉にブラッドはなんとも言えない顔をしている。

「……、まあいいや。とりあえず来てくれ」

美奈とレンとレイラはブラッドに連れられてFBIの中へと入っていった。エレベーターに乗り、ある階でおりオフィスへと入って

いくと女性が出迎えた。

「あら、来たわね」

美奈達は驚いた顔をしている。

「ああ、紹介するよ。俺の相棒のレイマーだ。なかなか凄腕の捜査官なんだぜ」

ブラッドは自分のことのように自慢している。そんなブラッドを見てレイマーはクスリと笑い、美奈のほうを見た。

「なるほど、あなたが美奈ね。よろしく」

美奈はレイマーが言葉の後に軽く会釈をしたので合わせて会釈をした。

「それで、いったい何を見つけたんだ？」

レンが聞いた。

「ええ、あなた達のことはブラッドに聞いたわ。UFOに関して調べてるんでしょ？　そして、その核とも言える人物が突然消えたそうね。私もブラッドに言われてFBIの資料を漁っていたの」

「X-FILEってやつか？」

レンが間髪いれずに聞いた。レンのその言葉をうけレイマーは軽く笑いレンを見た。

「X-FILEなんて言うのはドラマの話よ。私が調べてのは公式の事件の資料だけ。その中で面白いものを見つけたのよ。まあ見てみてよ」

そう言うつと、レイマーは用意していたプロジェクターのスイッチを入れ、スライドを表示しはじめた。美奈達は用意されていた席に着く。

「これは？」

美奈が聞く。

「これは、1998年に起きた殺人事件の資料なの。聞いてね。1998年11月24日、農夫の男性が殺されたの。犯人は近所に住む同じく農夫の男性。動機は金銭的なトラブル」

「ごく普通の殺人事件じゃないか？」

「ええ、これ自体はどこにでも起きそうな殺人事件よ。だからこの資料も解決済み資料の中に会ったの。問題はその後よ。この事件があった場所はニューメキシコ州ロズウェル市の郊外の牧場なの。ここはあなた達なら知ってるわよね？」

「……おい、ロズウェルってあのUFOが墜落したっていう」

そう、そこは昔UFOが墜落したと言われる場所だった。

s e a s o n 8 - 1 レイマー（後書き）

読んでいただきありがとうございます。 s e a s o n 8 です。よろしくお願ひします

Season 8 - 2 金属片

スライドジョーには事件の資料が映し出されている。美奈達はそのを見ていた。

「ロズウェル、確かUFOが墜落して異性人の遺体が4体出たのよね」

「そうね。政府は認めてはいないけどね。それでこのロズウェルで起きた殺人事件。殺されたのはワット・マック・ブライゼル。彼は結婚もしていなくて死後残された遺品はチャリティーオークションに出品されているんだけど一つだけ出品されても捨てられてもいないものがあるの。それがこれ」

そう言うときレイマーはスライドを動かし、ある銀色の金属片のようなものを映し出した。

「これは？」

「わからないわ。資料によると謎の金属片で発見されたときは金属の鍵のかけられた箱に入っていたそうよ。紙のように軽くてなにをしても傷がつかないそうよ。一説には、墜落したUFOの破片の一部だとも言われているわ」

「墜落したUFOの？」

全員がその言葉に驚いた。UFOの破片、もしこれが本物ならUFOに関してなにかしら手がかりがあるかも知れない。

「それはいまだどこに？」

美奈がレイマーのほうを見て聞いた。レイマーはしばらく黙り込んでいたが口を開いて答えた。

「……、NASAよ」

レイマーの言葉に美奈もレンもレイラも驚いた。

「この破片は謎の物質とすることで科学的な調査が必要とされたの。それでFBIがNASAに調査を依頼したのよ。ただし、NASAから帰ってきた答えは『失くした』とだけ」

「失くした？」

「私もこれは不思議に思ったわ。調査を依頼したのに失くしたはな
いと思つて、恐らくNASAにしてみれば喉から手が出るほど欲しい物質だったんじゃないかしら。だから失くしたと偽つてこの金属片を手に入れた」

「美奈……、NASAに行かないか？」

美奈はレンが言つた言葉を聞いて驚いている。横にいたレイラも同じだ。

「なに言つてるの？ NASAに行つても金属片を見せてくれるわけ……」

「確かに、だけど……このままじゃ何も動けない。拓也は突然いなくなり、なんの手がかりもない。生きているのかも分からない

状態だ。拓也のことは心配だが、なにもせずにおいても結果は変わらない。行って駄目なら仕方がない。けど行ってみる価値はあるだろうか？」

美奈はしばらく考え込んでいた。拓也の突然の失踪。新たに出てきた手がかりの可能性。すべてを考慮してだした美奈の答えは、全員が心に決めていたことだった。

「うん、いこう！」

美奈の声にレンは立ち上がり、笑顔を見せる。レイラも美奈も立ち上がる。

「美奈」

声をかけたのは、ブラッドだった。

「俺は、このロズウェルに行く。なにかしら新たな手がかりがあるかも知れない。それに……」

「……分かったわ。気をつけてね。特にあなたは」

それを言い終わると美奈達は、FBIのビルから出て行った。

「ブラッド、私もいくわ」

「え？ でもレイマーはUFO信じてないだろ？」

「ええ、だからこそ行くのよ。そんなものは存在しないことを証明するためにね」

ブラッドは、無表情だったが途端に笑顔を見せ大声で笑った。

「分かった。じゃあ行こうか」

こうして、ブラッドたちもFBIを出た。

Season 8 - 3 車内

美奈達は、レンタカーを借りてNASAに向かっていた。運転しているのはレンだ。

「美奈、レイラちょっといいか？」

レンの言葉に二人はレンの方を見た。レンは運転しているので前を向いたままだが。

「もうこの際だからはっきり言う。俺はUFOも異性人も信じている。でもそれは拓也に出会ってから起きたことや軍事基地、国防総省、NASAなどにハッキングして得た情報があるからだ」

「どうしたの？ 何が言いたいなの？」

隣に乗っていた美奈がレンに聞く。

「だが、俺はいままで直接この目で異性人をみたことはない。UFOらしきものはハイジャックされた時に見たが……人の言う証言というのは正直、”証拠”とはならない。仮に俺が、ほかの人にUFOを見ましたなんて言っても誰も信じないだろう。ましてや、アメリカは日本とは社会情勢が違う。そんなことを言ったところで笑いにされたり偏見的な目で見られるだけだろう？ そうだろ？ レイナ……」

「そうね。だから私達アブダクティーも、それなりの覚悟で言っているのよ」

レイラは真剣な顔で答えた。しかしそこには少しの悲しみも混ざっているようだった。

「それだけの覚悟があっても、誰も信じてはくれない。それは、確たる”証拠”がないからだ。しかも必死に証拠を集めようとしても、政府の権力で消されてしまう。謎の監視や突然の襲撃、失踪。命を狙われているこの状況。

もうとても一般人レベルを超えている」

「レン……、それはもうこの件から降りたいと言っているの？」

「……」

美奈の問いかけにレンはなにも答えない。

「レン、確かにあなたの言うとおり政府はUFO関連の事件については証拠を消している。それはデイビットの話からも確実よ。デイビットは裏でそういう仕事をやっているようだから。でもね、レン。あなたと初めて出会った時、あなたが言ったことよ。”覚悟を決めるしかない。進むしかない”。さっきだってそう言っただけでNASSAに向かうことを決めたんでしょう？」

「……、分かっている。俺が言いたいのはそのうちのことじゃない。今世の中は真実と嘘とが織り交ざっている。もうそれはどれが真実でどれが嘘かなんか分からない。俺がハッキングした軍事基地のデータだって、極秘機密いわゆるトップシークレットだ。普通に考えて嘘の情報なわけがない。けど、奴らはもし万が一ハッキングされた時の対策も立てていた。それは偽のトップシークレット。パスワードを苦労して解いてたどり着いたのは偽の情報だった。よくあることだ。しかし俺達にはそれが真実か嘘かはわからない。ただ軍事

基地にあるパスワードのかけられている情報。それだけで本物だと思ってしまうんだ」

「つまり、このUFOの事件も嘘ってこと？」

美奈が聞く。

「そうじゃない。言っただろ俺はUFOも異性人の存在も信じている。ただ、真実か嘘か。それを見極めるためには自身の目で物事を見ないと駄目だと言うことだ。だから、今この場で整理しよう。いままで起きた出来事の嘘と真実。それを考えよう。NASAまでまだ時間がかかる。考える時間はあるだろ？　それが少しでもまとまれば状況が変わるかも知れない」

「いい考えだと思うわ」

後ろの座席にいたレイラが言った。美奈も頷く。

「じゃあ、一から整理しますか！」

全員が頷いた後、美奈の声が車全体に響いた。

「それじゃあ、まずは全ての始まり新井拓也ことたつくん、アダムのアブダクションからね」

仕切り始めたのは美奈だった。美奈はどうやらリーダーに向いているらしい。物事をまとめたり取り仕切ったりするのが比較的得意だからだ。あまり人の意見を聞かないところがたまに問題だが。

「たつくんは、高校生の頃にアブダクションされた。それがたつくんを動かしている原動力であり、私達が動いている原因でもあるんだけど、このことに関しては私よりもレイラのほうが詳しいわね」

「ええ、私はあの時彼らの飛行船に乗っていたから詳しいわ。正確にはアダムは過去に幾度となく誘拐されているの。でも彼らがその記憶を消していた。それは安全性を考えてのことなんだけど。アダムを誘拐していた理由は、彼の身体検査をするためよ。アダムとしての覚醒具合を見るためにね。そしてあの日私は彼らからコンタクトを受けた。内容は、”今日はアダムの覚醒の日だから一緒に来るといい”ということだった」

そのレイラの言葉に美奈が疑問を抱く。

「覚醒？ たつくんにも聞いたけど確かたつくんは覚醒していないって……」

「ええ、あの日はアダムが覚醒するはずだった日なのよ。けど、なぜかアダムは覚醒していなかった。だから彼らは誘拐の記憶を残すことで少しでも覚醒が起きるきっかけを作ろうとしたのよ」

「そして、それから数年……レイラによってアダムのことを知り、アダムと接触するために大学生としてサークルを作り新井拓也、アダムと接触した。そして次の日レンが現れた」

「ああ、俺は事前に軍事基地から拓也の情報を引き出していたからな。あの大学にいることは分かっていた。そしてお前達と接触するために月のDVDを手土産として置いて置いたんだ」

「月の？」

レイラが美奈のほうを見て聞いた。

「ええ、レンが軍事基地から盗み出した月面着陸の時の映像よ。一般に公開されている映像とはまるで違う映像が出てきたのよ。そしてそこには三人の宇宙飛行士と人によく似た謎の生物が映し出されていた」

「そう……。よく盗み出したわね。それは真実の情報だと思うわよ。そのDVDに映っている人によく似た謎の生物こそ異性人そのものなんだから。私やアダムに接触してきたチルドレンは彼らと人間の手によって作り出されたのよ。彼らは二重の策を用意している。本来のチルドレンの目的は軍事利用が主だけど。彼らチルドレンを異性人としたてさらにその異性人達の存在を否定することで、国レベルの軍事機密を守る糧としたのよ。そうすれば仮にUFOを見たなんて目撃情報があっても否定できる。嘘がばれてもチルドレン達を異性人だとしておけば本物の異性人達が地球で活動するのに不利にはならない」

「そこまで考えているのね。政府は……」

美奈が考え込むような顔つきで言った。

「でもレンがDVDを盗み出したように人が作ったものである以上必ず隙が出来る。そこを上手につくことが出来れば真実にたどり着くことは出来るはずよ」

美奈が頷く。

「それでその数カ月後、美奈が誘拐されたふりをしたんだよな。それでお前を救出するためにICBMの発射コードをハッキングしたりして大変だった。それでその後ロサンゼルスに向かうために飛行機に乗ったんだけどその飛行機はハイジャックされたりして、ありえなかったよ。しかも墜落するし。まあ、二体のUFOらしきものが飛んできて助かったんだけどな」

「その事件は新聞でもテレビでも見たわ。恐らくアダムが乗っていたからね。まだアダムには死んでもらっては困るから例え周りに目撃されてでも助ける必要があったんでしょ」

「俺が気になっていたのはそのことなんだ。レイラ、”アダム”は一体なんなんだ？ 見た目はどう見ても普通の人間にしか見えない。拓也は人間じゃないのか？ 覚醒ってなんなんだ？」

「そうね。そこから話す必要があるわよね。私もチルドレンから聞いたこと以外は知らないんだけど、私が知っているアダムについて話すわね」

レイラはそう言うと、一度深呼吸をし、静かに語り始めた。

Season 8 - 5 覚醒

「アダムという言葉は知ってるわよね？ 聖書に出てくる神が粘土より創ったとされる人の名前がアダム。つまり初の人類。彼らが拓也をアダムと呼んでいるのはそこから来ているの」

レンは運転しながら、レイラの話静静地に聴いている。

「アメリカも異性人も真の目的は、”究極の進化”。それにはアダムの遺伝子が欠かせないの。アダムは遙か昔、人間に植えられた”種”が長い人類の歴史の中で徐々に育っていき、今の拓也でまさに開花した。それは彼らの求める究極の進化の遺伝子の源になるモノだから彼らはアダムを必要としているのよ」

「拓也が、アダムが覚醒するとどうなるんだ？」

レンが運転をしながらレイラに聞いた。

「覚醒しても見た目はなんにも変わらないわ。覚醒とは、アダムの中での意識の変革のことよ。さっきも言ったようにアダムの中には遙か昔に植えつけられた種が蓄えてきた全人類の進化の歴史が刻み込まれているわ。つまり、人類が持つ全ての能力、考えなどの感情がすべて解放された状態になるの。宗教で言うところの”悟り”になるかしら？」

「悟り……か」

「それ故に、彼らのテレパシーも読み取ることができ、人類が不可能とされてきた超能力の使用も恐らく可能になるわ。それが覚醒。」

でもそれには彼の意思が大事な。まだ覚醒していないということ
はまだ意思が足りないのね。それはまだ真実を知らないからでしょ
うね。今の私達と同じ、何が真実で何が嘘か分からないのよ。だか
ら意識を改めることができない」

「レイラ、もしたつくくんが覚醒したら彼らはたつくくんを……」

「……連れ去るでしょうね。準備のために」

「じゃあ、もしかして拓也は覚醒したのか!？」

レンが声の音量をあげて興奮気味に聞いた。

「わからないわ。私が見ていた限りではそういう雰囲気はなかった
けど。でも拓也が彼らによってアブダクションされたとしたら……。
いえ、はみ出し組みだったらいいんだけど」

「どういうことだ？」

「私やアダムに接触してきたチルドレンははみ出し組み。もちろん
はみ出し組みじゃないアメリカやロシアに手を貸すチルドレンもい
るわ。本来はそれが正常なんだもの。そしてそのチルドレンもはみ
出し組も同じ能力を持つてる。僅かな時間に連れ去ることもできる
わ。もし、はみ出し組みではない政府側のチルドレンの仕業なら……

……」

「まさか拓也はもう？」

「……それはないわ。いったでしょ？ 彼らの目的は”究極の進化
”を手に入れることそのためにはアダムはかかせない。目的が達成

されるまで殺されることはないわ」

「究極の進化か。いつたい究極の進化ってなんなんだ？」

「ここからは私も知らない。ただ私の推測なんだけど、彼らの言う究極の進化が、長い歴史の中で人類が蓄えてきた知識や意識ならそれを拓也から取り出すことはたぶんできないと思うの。それが出来る方法があるとすれば……」

レンと美奈はレイラのその言葉に疑問符を浮かべる。

「あくまで私の考えなんだけど、それは”イブ”」

「イブって聖書にアダムと一緒に出てきた？」

「ええ、彼らからイブという言葉は聞いたことがないから、憶測にすぎないんだけど人類の全ての進化の歴史を持つアダムと異性人の全ての歴史を持つイブがいたとしたら、そしてアダムとイブの間に生まれる子がいるとすれば……それは人類と異性人の全ての歴史を持つ究極の進化をした子になるんじゃないかしら？」

「アダムとイブの間に生まれた……」

「もし私が名前をつけるとしたらその子はまさに”メシア”と呼ぶに相応しい存在なのかも知れないわ」

レンはレイラの言葉を聞きながらも出来る限り冷静に車を運転した。レイラの言葉に多少の動揺はしたが、それを悟られるわけにはいかなかった。彼らの後ろからつけてきている謎の車に気が付いていることを悟られないために。

season 8 - 5 覚醒（後書き）

season 8はこれにて終わりです。そしてこの時点でようやく前編が終わりました。次回からはいよいよ中編です。次回はseason 9です。よろしくお願いします。

Season 9 - 1 追跡

「メシアか……驚きだな。それが当たっていたらとんでもない考えだな。それじゃあもう一つ聞いていいか？」

「え？」

「いいか、絶対後ろを見るなよ？ 後ろから黒いBMがずっとついている。もしかしたら俺達をヘリで襲撃した奴らの仲間かも知れない。レイラ……俺達がアメリカにしろ、チルドレンにしろ、異性人にしる命を狙われる理由があるとすればなんだ？」

「……証拠の隠滅。知りすぎた私達を消せば秘密は守られるわ」

「……だな」

「どうするのレン？」

美奈がレンに心配そうに聞いてくる。

「このまま逃げるという手もありだが、この状況で俺達の後をついているということは俺達がNASAに向かっていることも知っているのかもしれない。ということはNASAに着くまでに勝負を仕掛けてくるかもしれないな。……こうなったらやるか」

「え？」

「逆に捕らえるんだよ。奴らを。そしてつけている理由を聞き出す」

「でも、それは危険だわ」

美奈はとても心配そうだ。

「確かに危険だが、このままだとどうせ殺されるんだ。一か八かやってみるしかないだろ？ もう少しでハイウェイに入る。そこで勝負だ。うまく警察でも現れれば奴らが逃げるのを防いでくれるかもしれないだろ？」

そう言つとレンは車のスピードを少し上げて右斜線に入った。

「……わかつたわ。レン。でもむちゃはしないでよ。私はまだ死にたくないんだから」

「俺だつて死にたくないさ。だからうまくやるよ。レイラもいいな？」

「……ええ、私も彼らの正体を知りたいしね」

レイラのその言葉の後、美奈がなにかに気が付いた素振りをした。

「あ、レン。ちょっと待つて。もし、もしもたつくんが覚醒したことで彼らが連れ去つたのなら、証拠隠滅じゃないかも……」

「え？ どういうことだ？」

レンは運転しながら美奈の言つた言葉に疑問を抱いた。

「最初から、全ては仕組まれたことだつたら？ 私達は最初から誰

かに見張られていた。その後、UFOのことを調べても、政府が隠してきた月のDVDを見ても、あたし達は消されなかった。いつでも殺すことは出来たはずなのに……殺さなかったのは、たつくんを覚醒させるため。そして覚醒してしまえば私達は用済み……」

「なるほど、確かに可能性で言えば、いや、むしろそっちのが理にかなってるな。……だとすれば、ブラッドやデイビットも危ないんじゃないか？」

「確かに、彼らの目的がアダムに関わった者を全て消すことだったら……」

そこまで言うと、美奈は携帯を使って、ブラッドとデイビットに連絡を取りはじめた。

season9-1 追跡(後書き)

いよいよ中編、season9です。よろしくお願いします

Season 9 - 2 ハイウェイ

彼らの本当の目的と思われることに気が付いた美奈達は、危険が迫っていることをブラッドとデイビットに知らせるために連絡していた。

『わかった。知らせてくれてありがとう！』

電話の向こうからはブラッドの元気な声が聞こえてくる。

『美奈達も気を付けるんだぞ。じゃあな』

そう言っただけでブラッドの電話は切れた。しかしデイビットのほうは電話が繋がらないようだ。もうすでになにか遭ったのかそう思うと美奈達は不安に駆られていた。

しかし、そう言っているうちにレンが運転する車は、ハイウェイへと入って行く。そしてその後ろからもやはりつけている車は後を着いてきた。

「デイビットには繋がらないのか……。仕方ないな」

レンが運転する車は、徐々にスピードを上げていく。とその時、後ろからつけていた車がかなりのスピードでレンの運転する車に迫る。どうやら向こうもこのハイウェイで勝負をつけるつもりらしい。そして、レンの運転する車の横にぴったりついた。車の窓には、ブラックフィルムが張られていて中の様子はまるで見えない。

美奈達がそれでも必死に見ようとしていると、突然車が車体ごと

寄せてきて、レンの車へとぶつかった。横からぶつけられたレンが運転する車はハンドルを取られ、車体は斜線を越えて一番右の壁側まで追いやられる。

「くそっ！ 奴ら本気だな」

「レン、大丈夫なの！？」

「さあな！ とにかくやるしかないさ！！」

そう言つとレンは、車のブレーキを踏み車体を一気に後ろに下げる。車はタイヤから地面との摩擦による煙と音を出しながら後ろへと下がる。すると、後ろにいた車へとぶつかった。

「ぐっ！」

後ろにいたのは大型のトレーラーだった。トレーラーはレンの車に後ろから体当たりしてくる。耐え切れないと判断したレンはアクセルを踏み、前へと車を走らせようとした。しかし、それはさつきまで後ろにいて横から当たってきた車によって阻まれた。そして後ろにはトレーラー、前には乗用車の挟み撃ちを喰らってしまった。

後ろからはトレーラーが押さえ込み、前からは乗用車が遮る。レンが運転する車は間に挟まれ、少しずつ潰されていく。

「くそ！」

レンはハンドルをきろうとするが、がっちり挟まっていてハンドルをきることも出来ないでいた。その間も車は亀裂音を立てて徐々に潰れていく。そして、ついにレイラの乗る後ろの席の右側の窓が

ラスが割れる。

「レンどうするの!？」

「美奈、レイラしっかりシートベルトしとけよ!！」

その瞬間、レンはバグにギアを入れ、アクセルを思いっきり踏む、車は後ろのトレーラーにピッタリくっついていて、車が後ろに行く運動とトレーラーの前に行く運動の反発でレンの運転する車は前に思いっきり弾かれる。その瞬間レンはローギアに入れ、アクセルを再び思いっきり踏む。後ろに少し下がったことで前に出来た隙間を利用して前の車に突っ込む。

トレーラーとの力の反発で得たその力は何倍にもなり前の車を弾き飛ばした。前の車はそのことにハンドルを取られ横の斜線に変更した。その一瞬の隙にレンは、ハイトップに入れアクセルを踏み一気に加速し挟み撃ちから抜け出す。タイヤはその反動で煙を出しながら唸る。

しかし弾かれた後ろにいる車も再び斜線に戻り、レンの車の後ろから加速して迫ってくる。レンはそれを狙っていたかのようにブレーキを踏む、急加速からの急ブレーキにより、その車の力は後ろに大きくかかっていた。突然の急ブレーキに対応しきれない後ろから猛スピードで追いかけていた車は、レンの車にぶつかりそのままさらに後ろにいたトレーラーへとぶつかった。そのままトレーラーについたまま前にいたレンの車へと再びぶつかり車は激しく押しつぶされる。

そして、車は爆発炎上した。レンの車は爆発の反動で前へと急加速した。さすがにハンドルを取られたがなんとか立て直す。トレー

ナーは、前に燃え盛る車を引つ付けたまま走っているのだが、しばらくすると炎が燃え移ったのか激しい爆発を起して、しばらく走った挙句、ゆっくりと止まった。

なんとか二体の車の追跡を振り切ったレンであったがレンの運転する車も相当のダメージを受けていた。車体はボコボコでエンジンにもダメージを受けているらしくうまくスピードがでない。周りはハイウェイで、高速で通過する車がたくさんいる。

「おい、怪我はないか？」

「なんとか……」

レンの問いに美奈もレイラも同じ返事をする。二人ともどうやら怪我はないようだ。

「無茶するわね、レン」

「仕方ないだろ？ あのままじゃやられてた」

「あれ？」

その時、横を通過していく車を見ていたレイラが不思議なことに気がついた。通過する車の台数が減ってきているのだ。だんだんその数は減っていく。この時間ではありえないことだ。遂に、車が通らなくなった。この広いハイウェイにはレンの運転する車だけが存在している。

「どういうことだ？」

レンが疑問符を浮かべる。なににもなくなったハイウェイはまるで

ゴーストタウンかと思わせるほどの静けさをかもし出していた。

その時、レン達のいる場所の後ろのほうから、音が聞こえてきた。どこかで聞いたような音だった。レンは窓から顔を出し後ろを確認する。音はだんだん近づいてくる。そして、その音の持ち主が遂に正体を表した。

それは、あの時レン達を襲撃した謎のブラックホークに似た黒いヘリだった。

「あ、あのヘリだ！」

その声に、美奈もレイラも後ろを確認する。その時すでにレンは前を向きアクセルを踏んでいた。

ヘリは、レン達の車を追い抜き前に出たところで向きなおした。そして、横についている機関銃を撃ってきた。地面を伝うように弾痕がレン達の車に迫る。ダメージを受けていてあまり動くことのできないレンの運転する車は、その弾をそのまま喰らってしまう。直撃という奴だ。レン達は車の中で伏せその間もアクセルを踏み続ける。なんとか運よくエンジンへの直撃だけは防いだレンの運転する車は、ヘリの真下をくぐりヘリより前に出る。

ヘリは、再び向き直しレンの車の後ろからまるでターゲットを狙う猛獣のように静かにその場で停止している。レンの運転する車は、その間も前に進んでいる。

ヘリは、狙いを決めたかのように突然、ヘリに装備されているミサイルを車目掛けて撃ち込んだ。ミサイルは軌跡を描きながら一直線に車へと飛んでいく。そして、それは車と完全に接触し、車ごと

吹き飛ばした。

大爆発を起こしたミサイルの衝撃で、車は回転しながら上空高く吹き飛ばされた。そして、回転したまま地面へとぶつかりそのまま転がって逆さまの状態で停止した。車はほとんど原型を留めていない。

へりは、息を潜めるように静かに停止している。すると、もう一度車目掛けてミサイルを撃ち込んできた。ミサイルは再び車へと当たり、車は吹き飛びながら炎上した。爆発位置一面は黒煙と炎が支配する。そこは、まるで地獄の入り口のような光景だった。きっとこの場に人間がいれば生きてはいられないだろう。ましてや、車の中にいれば。

へりは、今度はゆっくり上空へとあがっていく。すると突然へり本体がうねるようにフォルムが変形しだした。それはどんな形を変え、丸い球形の物体へと変化した。そしてそれは、眼にも映らぬほどの速さでさらに上空へと上がり、姿を消した。

そしてそこには、爆発炎上し黒い煙を上げて燃え盛る車だけが残されていた。

Season 9 - 4 始まりの場所

「遅かったか……、すでになにも残ってはいない」

デイビットは日本に来ていた。それは、拓也がアブダクションされた時の話を聞くためと、現場に残された証拠を発見するためだった。デイビットはCIAの仕事で異性人関係の事件の証拠隠滅に関わっていた。その分、証拠を隠滅するときのクセのようなものを知っていて、それでいて十分な知識を備えていたので自ら進んでこの事件のことを調べに来ていたのだ。

全てが始まったこの場所で。

あの事件から何年も経っていて、証拠はなにも残ってはいない。拓也と一緒にいた当時のUFO目撃のバスケのメンバーにも全員当たったが、たいした情報を得ることも出来ずにいた。残されていた唯一の証拠となるものと言えば、この場に残されたミステリーサークルの後に出来た異常なスピードで成長し、綺麗な緑の色を保っている草だけだ。しかし、これは放射能によるDNA配列の突然変異が原因だと言う事はデイビットには分かっていたので、結果証拠となるものはなにも残されてはいなかった。

しかし、その事が逆にデイビットに疑問を抱かせていた。ここでUFOが着陸し、大勢の人間に目撃されていることは紛れも無い事実であり、そして、そういう事件にも関わらず一切証拠を隠滅した気配がないこと、そして、自分はこの事件を自ら調べるまで知らなかったこと、にも関わらず政府の上層部はこの事件を知っていたこと。

デイビットは他の事件にはない、この特例とも言うべき事件にはなにかあると踏んでいたのだ。しかし、本当になにもないこの事件にデイビットは困り果てていた。

「一体どういうことだ？　こんな例は過去に一件も存在しない。なにかが変わろうとしているのか？　とにかくここにも仕方がない。日本に帰るか」

「おっと、そういうわけにはいかない」

突然デイビットの後ろで、声がした。デイビットはその声に驚き、後ろを向く。そこには白人の短髪の男がオートマチックの拳銃をデイビットに向けて立っていた。

「お前は？」

「これから死ぬお前には名乗る必要はない」

短髪の白人の男は、笑みを浮かべながらデイビットを見ている。相手が拳銃を向けているこの状況にデイビットは動けずにいた。

「俺を殺すために後をつけていたのか？」

「そうだ。アメリカからずっと。しばらく観察させてもらったよ、なにも出なくて残念だったな」

「お前の命運は、この事件に関わったこと時から決まっていた。お前はこの事件からは手を引くべきだった。お前の証拠を隠滅する腕は確かだから、まだ失うわけにはいかずこの事件とは関わらせずにいたのに、自ら関わってくるとは」

「どういつことだ？」

「お前はここで死ぬ。お前の仲間達も全員な。いまごろ他の奴らが
お前の仲間の抹殺しにいつてるはずだ」

そう言つと、白人の男はトリガーにかけている指をゆっくり引き、
銃口から弾が発射された。

引き金が引かれた拳銃から弾がまっすぐに飛び出す。デイビットは避ける間もなく、肩に弾を喰らいその場に倒れこむ。しかし、白人の男も同じく肩にダメージを受けていた。ただしかしすり傷だが。男は片手で肩を押さえた。

「一体これは？」

倒れこんだデイビットの手には硝煙を出す拳銃が握られていた。あの一瞬のうちに拳銃を抜き、撃っていたのだ。デイビットは、ゆっくりと立ち上がる。

「なるほど、さすが大統領も認めた世界一の銃の腕を持つ男だ」

デイビットの肩は赤く滲んでいる。

「しかし、その怪我を負った肩では狙いが定まるまい。次の一撃でお前は死ぬ」

デイビットは片手で肩を押さえながら、ゆっくり前へと歩む。銃を構えている男に向かってまっすぐ歩いていく。そして、相手の拳銃が自分の懷まで入ったところで止まる。デイビットの持つ拳銃は腰の位置にある。

「どっいつつもりだ？ わざわざ殺されやすくするためか？」

「いや、この位置なら怪我をしても絶対にはずさないだろ？」

「意味が分からんね。私の銃口はお前の胸に密着している。この状態で撃てば死ぬのはお前だ」

「やってみろ」

短髪の男は、笑みを浮かべると再び、引き金を引いた。

が、それはできなかった。引き金を引こうとしてもまったく動かないのだ。

「な、なんだ？ 銃が」

「よく、覚えとけ……」

そういいながら、デイビットはゆっくりと銃を上げる。そして、男の顔の前まで銃をあげ終わるとスライドを引き、引き金に指をかけた。

「銃を使う時は、まず安全装置を解除しなければならない」

その言葉とほぼ同時にデイビットは再び銃を下げ、白人の男の両足に一発ずつ弾を撃ち込んだ。弾を撃ち込まれた白人の男は、その場に叫びながら倒れる。

「な、馬鹿な。安全装置は解除していた。だから、一発はお前に撃ち込んだはずだ」

確かに白人の男はデイビットに弾を撃ち込み、デイビットは肩に傷を負っている。安全装置を解除していたからこそ弾を撃つことが出来たはずである。しかし、白人の男の持つ拳銃を今見ると確かに

安全装置は解除されていない。

「俺の力を甘く見すぎたな。一発目に俺が撃った弾はお前を狙ったんではない。俺は初めから、安全装置を狙っていた」

「馬鹿な？ 安全装置を狙っていたと？ そんなことできるはずが」

「だから、俺の力を甘く見すぎなんだよ。俺は安全装置をはずすために弾を撃ち込み、その弾はお前の銃の横についている安全装置をオンの状態からオフへと切り替えた。弾を安全装置に少し当てることによってな」

デイビットは安全装置を狙っていた。そのために白人の男の肩にかすり傷をつけることが出来たのだ。安全装置がかけられれば銃は無力となる。再び安全装置をはずさなければ。

だが、男はそれに気がつくことはなかった。それは、普通は出来ないことをデイビットがやってのけたからである。

「さあ、吐いてもらうぞ」

そう言つと、デイビットは倒れている男の頭に拳銃を突きつけた。

「お前はこの事件のことを知っている。そして、俺が証拠隠滅に関わっていたことも。お前はこの事件の……いや、この全てのUFO騒動の全てを知っているな？」

「……、ククク」

男は拳銃に頭を突きつけられている状況にも関わらず笑い出した。

「そんなに知りたければ教えてやろう。お前達のやっていることがこの星、地球を危機に直面させている行動だと言う事をな」

デイビットはその言葉に驚いている。そして、男は真実の言葉を話はじめた。

season9-5 安全装置（後書き）

読んでいただきありがとうございます。season9はこれにて終了です。次回からはいよいよseason10です。よろしくお願ひします。

Season 10 - 1 ロズウェル

「ここがロズウェル地区か、思っていたよりもなにもないところね」

ブラッドとレイマーはロズウェルまで来ていた。謎の金属片に関する手がかりと新たな情報を手に入れるためだ。そこは、人気もなにもない場所だった。その場所のほとんどは農夫の牧場で、誰も家を建てないからである。

しかし、その一角にあるハメートルもの高低差でえぐれた部分の先にある小高い丘の上には石碑と石で積まれた謎の物体がある。石碑にはこう記されている。

『2002年9月、Sci-Fiチャンネルとニューメキシコ大学の科学者と協同して同地域の調査を行った。ここには1947年、地球外のものと思われる物体が墜落したといわれている』

そう、この場所こそがかつてUFOが墜落したとされる場所である。UFOの歴史はまさにここから始まったと言っても過言ではない場所だった。

「来る途中通ったロズウェル市内はUFOグッズなんかもあったけど、墜落したとされるこの場所自体は石碑と石積み以外なにもないのね」

「そうだな」

「……？ どうしたの？ いつもの元気がないみたいだけど？」

「え？ いや、そんなことはないぜ！」

「まあ、いいけど。それで、どうするの？」

レイマーは辺りを見渡す。相変わらずなにもない。すると、荒野の地平線のほうから黒い一台のジープが向かってくる。レイマーはそれに気が付くとブラッドに知らせた。

「なんだあれは？」

ジープはブラッド達の近くまで接近してきている。しかしそのスピードを落とすことはない。それに気づいたブラッドが叫ぶ。

「避ける！！」

その声にレイマーは即座に反応し、二人は互いに別の方向へと飛びジープの追突を逃れた。しかし、ジープは再び反転する。するとジープの窓から腕が出てきた。その手には機関銃らしきものが握られている。ジープは移動しながら、手に持った機関銃を発砲してくる。突然の襲撃にブラッド達は驚いていたが、ジツとしていれば殺されると直感したのか、二人は懷から銃を取り出すと、機関銃の弾が当たらないようにジープの死角になるように移動し、レイマーが転がりながらジープのタイヤに弾を撃ち込んだ。

その衝撃でジープは停止した。それを見たブラッドが、銃を構えながらゆっくり近づく。

「車から降りろ！ 何者だ！？」

ブラッドの問いかけにも関わらずなんの反応もなく。沈黙だけが

流れた。

しばらくすると、ジープのドアが開き、中から人が出てくる。

中から出てきたのは軍事服を着て、手に機関銃を持っている黒人の男だった。

「何者だ!？」

ブラッドは黒人の男に銃を向けながら叫ぶ。

「……、もうお前達は用済みだ。内情を知っているお前達は死ぬしかない」

「用済み？ やはり、美奈の言っていたことは当たっていたか」

「ブラッド・クルー、元海軍のパイロットで第二次大戦にて活躍した」

「え？」

黒人の男の言ったその言葉にレイマーは驚いた。

「しかし、ある事件をきっかけに軍を辞めその後数十年は行方知らずだったが今度はFBIに姿を現した」

「ちょっと、待って？ どういうこと？ だってブラッドはまだ二十代でしょ？ 人を間違えてるんじゃない？」

「間違つてなんかないさ。レイマー。そして奴の言う事件こそ、

「このロズウェル事件なんだよ」

「え？」

レイマーは目を大きく見開き、なにを言っているのか分からない顔をしている。

「俺の全てはここから始まった。あの日、あの事件は俺の全てを変えたんだ」

そして、ブラッドはあの日の出来事を語りだした。

s e a s o n 1 0 - 1 ロズウェル（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

s e a s o n 1 0 が始まります。 s e a s o n 1 0 は四話だけです。
それではよろしく願います。

「こちら第二戦闘部隊少佐ブラッド・クルー、荷物の搬送完了しましたのでこれよりライトパーソン基地へと帰還します」

『了解した』

無線でやり取りするのは、ブラッドの乗る戦闘機だった。時は1947年、第二次世界大戦を終えたアメリカ軍ではあったが、小さな地域での戦闘は繰り返されていた。ブラッドは戦闘機にて、支援物資の搬送を終え、基地への帰還途中であった。

外の天候は晴れてはいたが、基地のあるロズウェル地方は大雨と聞いていたのでそれに備えるための準備をしていた。ブラッドの乗る戦闘機に続いてもう一機、戦闘機が後ろにいる。ブラッドと共に支援物資を運んだ仲間だった。

当時の戦闘機は、スピードを考慮したものが多くプロペラ機全盛の時代に比べてブラッド達の乗るヘルキャットは日本の零戦対抗機とされ、その機動力の高さが特に評価された。

ブラッド達の乗る戦闘機は順調に夜の星が綺麗な空を飛んでいく。しばらくすると前方に、雨雲のようなものと、稲妻の閃光のようなものが見える。間違いなく積乱雲が発達した雨雲だろう。どうやら大嵐らしい。ブラッドはもう一人の仲間に注意を促すために無線で連絡する。

しかし、なんの反応も返ってはこなかった。不思議に思ったブラッドは目で確認するために後ろを向く。後ろを向いた瞬間、ブラッ

ドは思わず、誤って降下してしまった。それに驚いたブラッドは再び体勢を立て直すと再び後ろを向く。そこには、ブラッドが体勢を崩してしまった原因であり、仲間の反応がない原因であるはずものがいた。

仲間のヘルキャットにピッタリと張り付くように飛ぶ一機の謎の物体。それは三角形に近い形をしており、その船体は銀色にコーティングされていた。その物体はプロペラも付いておらず、まったく音を立てることなく飛行しており、不思議なことにレーダーにすら映ってはいない。

ブラッドは敵の戦闘機だと思い、その機動力を駆使してその船体の後ろに回り込もうとした。そして、相手の位置を目で確認するために再びその謎の物体を見る。しかし、そこにいたはずの物体の姿はなかった。いや、今度はブラッドの船体の上空にピッタリと着いて飛行していたのだ。

ブラッドは再び、仲間に無線で連絡する。しかし、相変わらず反応はない。

その時謎の物体から、一瞬光のようなものが出た。それは、ブラッドにとって気のせいかもしれないと思うようなくらい一瞬の光だった。しかし、次に起きた出来事にブラッドはそれが気のせいではないことを知ることになる。

仲間の戦闘機が突然大爆発を起こしたのだ。

ブラッドは驚いた。突然の謎の物体からの攻撃。

「こちら第二戦闘部隊少佐ブラッド・クルー、現在謎の物体と接触。

仲間が攻撃を受け撃沈された。繰り返し替えず」

しかし、その無線にはなんの反応もない。

「くそ！ どうなってる？」

ブラッドは無線が通じないことに疑問を抱いていたが、それ以上に現在目の前にいる謎の物体の動きに気を配っていた。アメリカの戦闘機の最大の機動力を誇るとされるヘルキャット以上のいや、日本の零戦以上の機動力を持つ謎の物体との戦闘。ブラッドは内心怯えていた。

しかし、軍人である精神力でなんとか逃げ切るためにブラッドは最大出力でエンジンを回す。それに呼応して戦闘機はスピードを上げる。しかし、謎の物体はそれでも後を追ってくる。それは着かず離れずの絶妙の位置だった。その間もブラッドは何度も無線連絡を繰り返す。

ブラッドはあることに気が付いた。戦闘の基本。敵に後ろを取られるな。しかし、今は謎の物体にピッタリと後ろに着かっている。ブラッドはなすすべがないまままでいたが、それでも多少戦闘機の乗り方については自信があった。

ブラッドは、逃げ切ることとはできないと判断しある準備をする。そして、戦闘機を瞬間的に上昇させる。そのまま反り返るように反転する。本来ならばこれで敵の後ろを取ることが出来るが、この相手にそれは通用しなかった。

謎の物体はいつのまにか、またブラッドの戦闘機の背面にあたる部分にいる。しかし、ブラッドはこれを狙っていたのだ。敵が背面

にいるつまり、この状態で急激にスピードを落とせば、敵のすぐ後ろに出ることが出来る。ブラッドは、急激にスピードを落とした。そして、一瞬謎の物体の背後を取る。その瞬間、あまりに近いためにブラッドの乗るプロペラと謎の物体が接触した。プロペラは弾き飛ばせれ戦闘機はそのまま謎の物体と接触した。その反動で、謎の物体は船体に傷をつけ煙を上げながら降下していく。その先は嵐の雲だった。

ブラッドは、謎の物体が煙を上げながら雨雲の中に入っていくことを確認したが、ブラッドの戦闘機もプロペラという核を無くし、降下している。ブラッドは、こうなることを予想していたかのように座席の横にある緊急脱出ボタンを押す。ブラッドは座席ごと排出され、しばらくしてパラシュートを開いた。戦闘機はそのまま墜落していき、広い荒野の一角に墜落した。しかし、その遙か彼方で謎の物体も墜落したようだ。

ブラッドは空中で風に揺られながらそれを確認した。

「信じられない」

言ったのはレイマーだった。ブラッドが言った過去の真実。その真相に驚いていていた。

「信じられないのは分かる。でもそれが真実なんだ。あの日ここで墜落したUFOは俺との戦闘のちに墜落したUFOだったんだ。別に隠していたわけじゃないが、信じられない話だし、確信に触れるまで話したくなかった」

「でも、それでもおかしい。だってブラッドはどう見たって」

「それは、放射能による細胞の突然変異だ」

機関銃を持った黒人が言う。

「細胞の突然変異？」

「あの日のUFO接触でブラッド＝クルーは身体に大量の放射能を浴びた。そのため身体の細胞に急激な変化が置き、万能細胞という本来ならば生前にしか確認できない細胞が身体に溢れた。簡単に言えば、年齢による弱体化がなくなったということだ。本来ならば八十歳を超えるその身体は現在も当時のまま二十代の若さを保っている」

「そんなことが？」

レイマーはいまだに信じられないというような顔をしている。

「だが、そんなお前の命もここで終わりだ。ここで二人を始末することそれが俺の任務だ。死んでもらおう」

黒人の男はブラッドに機関銃を向ける。

その時、突然この場の雰囲気合わない携帯のコールが鳴り響いた。携帯の持ち主は軍服の黒人だった。黒人は機関銃を向けたまま電話に出る。

「なんだ？」

しばらく、沈黙が走る。なにやら重要な話をしているようだ。

「わかった」

そう言うとき黒人は電話を切り、ポケットにしまう。そして、機関銃を降ろした。

「命拾いしたな」

「どういうことだ？」

「俺達の仲間の一人が捕まった。真実を吐かされたらしい。一人でも真実を知っていまえば俺がお前達を殺す理由もなくなる。誰にも知られずに始末することが前提だったのだ」

「殺さなくてもいいってことか？」

「別に好きで殺しをしているわけじゃない。命令とあれば誰でも殺すがな」

「……真実ってなんなんだ？」

ブラッドは睨みを聞かせながら聞く。

「仲間にも教えてもらうんだな。ただこれだけは言うておく」

ブラッドとレイマーはその言葉に疑問符を浮かべる。

「お前達が知ったその真実は、我々が必死に隠し通してきたことだ。それを知るといことがどういことか考えるのだ。もし、全人類がこの事実を知ることになれば、この星、地球は終わりだ」

そう言うのと、黒人の男は向き直り地平線に向かって歩いていく。

すると、そこになにかあるような感覚がした。突然黒人の男の前の景色がうねりだした。そして、そこからは得体の知れない物体が姿を現した。

それは、少し宙に浮いている。バスほどの大きさで形は長方形のもの。全体が銀色にコーティングされ窓が均等に並んでいる。突然その物体は光を放ち始めた。その光は次第に強くなり、ブラッドとレイマーは目を開けていることが出来なくなった。

しばらくして、光が弱くなり再びブラッドが目を開けるとそこには、ジープも黒人も謎の物体も姿を消していた。

そして、辺りは再び元のなにもないただの牧場に戻った。

「なにか分かったの？」

「ああ、例のホワイトハウスの地下にある軍事基地のパソコンに入したんだ。なかなか手こずったがうまくいった。昔、拓也と一緒に核の発射コードを盗みだした時と同じ方法でな」

レンと美奈そしてレイラは、パソコンを見ていた。

彼らは生きていた。例のヘリとの戦闘の際、一瞬ではあったがヘリの真下に入り込むという死角を得たためその一瞬を利用して車外へと脱出していたのだ。後はヘリが去るまで息を潜め、気配を出来る限り殺していたのである。

その後、町に戻ったレン達はネットで軍事基地へのハッキングをしていた。もう危険は承知の上のため、バレることも厭わず大胆なハッキングをしていたのだ。

「それで、なにか分かったの？」

「全てさ、彼らがずっと隠してきた真実。その全てを見つけ出した」

「それが、本物の証拠はあるの？」

「ないな、だが情報ランクトリプルの国家最高機密のトップシークレットで、なおかつ普通なら進入不可能な場所にあるということ。もうこれは信用するしかない」

レンはパソコンの画面を見ながら話している。今まさにその情報をプリントアウトしている最中なのだ。

「それじゃあ見せてよ。私達が追い求めてきた全ての真実を」

美奈は、レンにせがむ。レンはプリントアウトした一枚を美奈に見せる。そこには英語でこと細かにあることの詳細が記されていた。美奈は渡された資料を見て、それを読んでいく。

美奈の持つ手は、だんだん震えてくる。その様子にレンは冷静に、レイラは不思議そうに見ている。

「ちよつと！？ なんなのコレ？ こんなのが真実だって言うの！？」

「ああ、それを隠すためただそれだけのために、いままで何十年もアメリカは事実を隠してきたんだ。それを一般人が知ること、はこの地球の破滅に直結するからな。もし俺がこの事実を知っている、アメリカの最高権力者だったら間違いなく隠すだろう」

「私も、隠すかもしれない。いえ、これは一般人が知ってもいいことじゃない。もし知れば世界中が大パニックになって、世界は終わる」

美奈はレイラにもその紙を渡す。レイラも同じく驚いている。

「でも、それならたつくんは……」

「ああ、拓也の役割は一つしかない。美奈、レイラ、俺達もアメリカに協力しないか？ 奴らが受け入れるかどうかは分からないが」

「寝返るってこと？」

「寝返るもなにも、元々真実を追い求めるものと隠すものの関係であっただけで決して敵ではない」

「……それなら、彼らは私達を受け入れたほうがいいかもね。真実を知っているんだから。近くに置いておいたほうが安心だわ」

レンは、プリントアウトした紙を手を持ちパソコンの電源を切った。そして立ち上がると覚悟を決めた顔で美奈とレイラの目を見た。美奈もレイラも頷く。

そして、レン達はホワイトハウスへと向かった。

s e a s o n 1 0 - 4 驚き（後書き）

読んでいただきありがとうございます。 s e a s o n 1 0 は4
で終わります。

そして、次回 s e a s o n 1 1 にて遂に真実が明らかになります。

よろしく願います。

season 11 - 1 真実1

そこには、一人の青年が寝ていた。彼が寝ている場所は彼にとって居心地のいい場所だった。そこは彼のために用意された場所であるからこそその場所にふさわしいとされた。

そして、青年は目覚める。

「ここは？」

青年はこの場所で目が覚めたのは初めてなのでこの場所がどこかは分からなかった。そして、辺りを見渡す。すると部屋の中央に一人の男が座っていた。

「おはよう、目覚めたかね。 アダム」

部屋で寝ていたのは拓也だった。

「あなたは？」

「私は、ネレセスⅡリシュエルト。影の最高権力者だよ」

「影の？」

「そう。現アメリカ大統領は政治の面での最高権力者だが。私は、彼も知らないこの世界の全てを知っている影の世界の大統領だよ。君に全てを話そう。 アダムよ」

「全て」

拓也は、その言葉に身を引き締める。

「初めてアメリカが裏で公式にUFOの存在を認めたのは1790年のことだ。まだアメリカがイギリスより独立してまもない時代の出来事で当時のことは資料でしか分からない。しかし1790年にUFOが目撃され、記録されていたことは間違いない。そして、1832年10月3日アメリカで公式に異性人の存在を認めることになる事件が起きた」

男は椅子に座ったままで拓也のほうを見て話している。

「それは？」

「それは、異性人からのコンタクトだ」

「え？」

「彼らはこと座の方角にある地球から89光年離れた、デルタ22という星から来たと言った。そこでアメリカは驚愕の真実を聞かされたのだ」

男の顔は、その言葉の後さらに真剣になった。

「彼らが始めて地球を発見したのはまだ地球を恐竜が支配している時だった。彼らは研究のため恐竜などの生体実験などを繰り返しこの星の生物のことを知っていた。そして、この地球の研究のため彼らの一部は自分達の星からある場所へと移住したのだ」

「ある場所？」

「それが、月だ。元々あった月を改造し彼らは自分達が住むのに最適な宇宙船を作り上げた。そして自分達の生活と地球の研究に日夜励んだ。そうしている間に、この地球には実に多くの異性人が訪れたらしい。そして現在に至るまでにこの星には52種類もの異性人が共存している」

「52種類！？ そんなに」

拓也は素直に驚いた。そんないままで考えたこともなかったことを突然言われたのだから仕方ないが。しかし、まだ拓也は半信半疑だった。

「実は君らは気が付かないだけで彼らは普通に人間の世界で生活している。52種類の異性人のうち48種類は地球人に非常に良く似ている。見た目で判別はよほど気を使い、彼らの身体的特徴を知っていなければ不可能だろう。現在地球の人口の15%は異性人達だ」

「全然知らなかった」

「しかし重要なのはそこではない。なぜ彼らが正体を現さないのか。その理由こそが重要なのだ」

その言葉に拓也は男の目を見る。男の目は、まるで悲しみを隠すようにその全てを受け入れたような目をしていた。

s e a s o n 1 1 - 1 真実1（後書き）

読んでいただきありがとうございます。 s e a s o n 1 1 は真実編です。今回の話はこのユニマネの核となる部分の一つです。それでは次回以降もよろしく願いします。

Season 11 - 2 真実2

彼ら、異性人が姿を隠す本当の理由、一体それはなんなのか拓也の興味はそこに集中していた。

「さきほども言ったようにこの地球には実に多くの異性人が訪れている。だが、その全てが友好的とは限らない。たった一種類だが、この地球の資源を食い尽くそうと動いているもの達がいる。彼らは他の星でも資源を食いつくし、そしてこの地球にたどり着いた。だが、当然ほとんどの異性人はそれを許さなかった。そして、対立したのだ」

「そんなことが……」

「困ったのは、その資源を食いつくそうとしている異性人は他の異性人よりもさらに進化したテクノロジーを所持しているのだ。つまり、むやみに太刀打ちできない。そこである作戦が考え出された」

「ある作戦？」

拓也の集中はさらに強くなった。

「それは アダムだ」

その言葉に拓也は驚きながらも耳をさらに集中させる。

「彼らはアダムに望みをかけ、遙か昔『種』を植えた。いつかアダムとして覚醒しこの地球を救える可能性を秘めた者として。それが君だ。 アダム」

「俺が、地球を救う？」

「だが、もう一つ問題が生じた。それは地球人だった。地球人の好奇心は果てしない。異性人がいることが知ればさらなら深追いをし、我々が隠し続けているもう一つの秘密もしられてしまう。それを知られることは、直接この星の破滅に繋がる。だから、我々は情報操作をしたのだ。この地球を守るために」

「情報操作……」

「それが、君達がグレイと呼んでいるチルドレン達だ。彼らチルドレンは我々アメリカが作り出した新生物だが、異性人の存在を隠すために彼らを異性人にしたたのだ。そうすることで二重の秘密になる。まずUFOの存在を否定する。しかし、それでもUFOを信じて追ってくるものも多い。ならば、偽者の異性人を本物と偽り、公開する。それで99%はまず満足する。そのために我々はいろいろな情報操作を繰り返し返してきた。UFOの本物の写真があるのなら、我々は偽者を作り、紛れ込ませる」

拓也は彼の言葉にしっかりと耳を傾けている。一期一句逃さないように。

「人間というのは実に信じやすい生物だな。本物の中に偽者を紛れ込ませ、偽者が偽者だとばれたとき、本物も偽者となる。木の葉を隠すのは森の中とはよく言ったものだ。真実を隠すのは我々ではない。UFOの存在を信じて追う者達だ。彼らがいて初めて成り立つ作戦だ。そして、それもある程度うまく行っている。しかしその間も彼らの侵略は続いている。そしてそれに対抗する手段としてアダムともう一つまったく別の最終手段である作戦を始動させた」

「ある作戦？」

「我々がずっと隠し続けてきたもの。そしてこの星を守るための、だが下手をうてばこの星を滅ぼす力を持った脅威の究極兵器。それが、水素爆弾だ」

その言葉に彼の顔はさらに引き締まる。拓也は疑問符を浮かべているもののさらに驚いた表情をしている。

水素爆弾。

それは核融合を利用した核爆弾の一種で一般的には水爆と呼ばれている。原子爆弾を雷管代わりに使用し、重水素などの核融合を誘発し膨大なエネルギーを放出する。その威力は広島形原子爆弾の数千倍と言われ、7つあれば地球を粉々に破壊できるとまで言われた人類が開発した最大威力の爆弾である。

しかし、そんな水素爆弾にも欠点がある。それは、その反応速度の遅さと、構造上威力を上げる為にはどうしても巨大なものになってしまうということ。そのため実用的ではなく現代では小型化に成功したウランやプルトニウムを利用して核融合する核兵器が基本である。

その水素爆弾ではあるが、過去に一度だけ地下や海中実験ではなく、実際に旧ソ連の爆撃機に搭載され投下されたことがある。――（実戦ではなく実験により）その爆弾は地上約4000Mで炸裂し爆発による衝撃波が地球を3周したと言われている。その時の水素爆弾の大きさは長さ8M、直径2M、重さ27トンにも及び火薬量は50メガトン。広島型原子爆弾の約3300倍にも相当する。――（1メガトンは1000キロトン、TNT爆弾100万トンにもなる。ちなみに広島に投下された原子爆弾は僅か15キロトンである。さらに50メガトンの威力は太陽の表面で起きる水素爆発一発分に相当する。つまり地球上で太陽の光源を発生させたのと同じ）

拓也は水素爆弾についての一通りの説明を受けた。拓也がそのすべてを理解できたわけではないが水素爆弾の恐ろしさは十分に理解した。

「そ、そんなものをどうするつもりなんだ？」

「……だが我々はさらに巨大な水素爆弾を製作した。水素爆弾は構造上どうしても莫大な時間と莫大な経費がかかる。だから数十年もかけて密かに作り続けてきたのだ。その爆弾の長さは約8000Mにもなり直径は約2000Mにも及び、その総重量は約27000トン、火薬量は約50000メガトン。広島型原爆の約330万倍の威力を持っている。コードネームは『イワン』。爆弾の王と呼ばれた水素爆弾とまったく同じ名前だ」

「うそだろ？ そんなの……。一体どこに？ いや、それ以前になんでそんな巨大なものを？」

拓也の表情はもはや驚きを超えて恐怖に近いものになっている。

「そこで役にたったのが異性人の持つテクノロジーだ。彼らの持つ半重力浮遊と不可視の技術を使い、爆弾自体を空中に浮遊させ、リーダーにも人の目にも映らぬようにした。爆弾の設置場所は、絶対に上空を犯すことにできない領空それは限られている。そして、その場所はエリア51に決定された。つまり現在エリア51の上空には地球を一撃で破壊するほどの威力を持つ爆弾が浮かんでいるということだ」

「そんな……」

「だから隠す必要があった。一歩間違えれば地球が消滅するそんな

巨大な爆弾を作っていることが国民にばれば大混乱が生じる、さらに他国への挑発の意となり三次世界大戦にも発展しかねん。それだけにこの計画には慎重に慎重を重ね行動してきた。そのため異性人の存在も隠してきたのだ。異性人の存在がばれば、人は彼らのテクノロジーに興味を持つ、そうなれば不可視の構造にも興味を持つ、そして人はすぐにその不可視を破る技術を開発する。そうなればこのイワンがばれるのも時間の問題だ」

「それが……真実」

「そうだ、異性人に対抗する最終手段それが我々が長年隠してきた真実だ」

「俺には、大きすぎて理解できない領域だ」

拓也は、理解に苦しむ顔をしているが、真剣な表情は崩さない。それは真実を聞いた拓也の心の現われなのだろうか。

「まだ、わからないことがある」

拓也はなにかを思い出したかのように言う。

「そんな巨大な爆弾を使うにしても地球では使わないだろ？ それにその異性人ってどんなやつなんだ？」

「それは、彼から説明してもらおう。入ってくれたまえ」

そう言つと、その部屋にあるたった一つのドアが静かに開いた。

ドアが静かに開くと長身の人物が入ってきた。そしてその横には小柄で肌の色は褐色に近いどうみても人間には見えない生物も一緒だった。

「お久しぶりです。 アダム」

長身の男が、入ってくるなり拓也のほうを見て笑いながらいった。拓也は小柄な生物のほうに気を取られていたが男の言葉に長身の男を見た。

「久しぶり？」

拓也はその言葉に記憶を探ったが出てこなかった。

「ええ、何度も過去にあってます。彼のことは覚えてますか？」

そう言うと、長身の男は小柄な生物を前に出した。その生物はどう見ても一般にグレイと呼ばれる生物である。

「もしかして、UFOの中で会った？」

拓也は自分で答えたその答えに自信はなかったがとりあえず答えた。

「ええ、正解です。でもあなたには問題を出さなくても分かっているはず。幼いときから何度も誘拐して脳の奥に潜在的な知識を盛り込んでありますから。それはよしとして覚えていないようなので

自己紹介しておきます。私の名前はリーブ。はくちよう座のほうにあるセマサレスという星より来ました。いわゆる異性人です」

「え？」

その自己紹介に拓也は驚いた。そうその男は自分で自分のことを異性人だと名乗ったのだ。どこからどうみても普通の人間にしか見えないが。

「見た目は地球の人間と同じですが、中の構造は違います。私達の星にはこの星にはない物質があつて、それを消化するための器官が備わっています」

拓也は声が出ずにただ口を開けて言葉にならない言葉を言っている。

「さて本題ですが、結論から言つて彼らは今はこの地球にはいません。今彼らは全員が火星にいます。火星が奴らの本拠地です。当然爆弾も地球では使いません。アダム、あなたには火星に行つて貰います」

「え？」

彼は、小さな生物の肩に手を乗せながら

「彼らチルドレンは、我々も協力して創つた生物ですが、それなりに知能も感情も備えている。だから彼らからはみ出し者が現れた。しかし、そんな彼らの目的もアダムの覚醒、結果としてプラスになると踏んで野放しにしておきました。そしてうまくいった。彼らの行動のおかげであなたは遂に『覚醒した』覚醒とは理解です。アダ

ムあなたはすべてを分かっている。あなたが火星でなにを成すべきか」

拓也はその言葉に口を閉じ、少し俯いた。

「……戦わなくちゃいけないのか？」

「……、それが運命さだめです」

拓也は完全に俯き、口を閉じた。

「つらい運命です。でもあなたはそのために生まれてきた。我々の目的は決して戦うことではない。でも彼らがいる限り我々の真の目的が達成されることはありません。アダム、我々はあなたに戦うということ以外に真なる目的を期待しています。本来はそれが人類に種を植えた目的であり、我々全宇宙の目的です」

そこでリープは一旦口を止めた。そして一息ついて口を開いた。

「アダム、あなたにはこの”宇宙の果て”を見ていただきたい。我々も知ることのないこの宇宙の果て、存在すらしないかも知れないでも可能性はある。そこに全ての答えはあると思います。我々が生まれてきたことの真の答え、そして、我々はどこへ向かうのか。進化の果てにあるものはなんなのか」

「答え……」

「全知全能　全てを知るあなただけが行くことを許される場所です。アダム、私達はあなたの味方です。一緒に戦いましょう。そして、この星を守るんです。そして、真の目的と一緒に達成しましょう」

う」

そう言つとリーブは手を差し出してきた。拓也はリーブの顔を見る。

「なぜ異性人達がこの地球に集まり、協力してこの地球を守ろうとするか分かりますか？ それは、この地球が美しいからです。”美しい”この感情は知能を持つ生物だけが持つ特別な感情です。なぜ我々は美しいと感じるのか。それは守るためです。さあアダム」

拓也はしばらくリーブの顔を見ていたが、突然立ち上がりリーブの手を握って握手した。

「……やるよ。守つてやる。この地球も宇宙も」

リーブはにつこり笑みを浮かべ拓也を見る。

「アダム、それではもう少しここで待っていてください。数日かかるとは思いますが今あなたの仲間が全員ここに向かっています」

その言葉に拓也は目を見開く。

「美奈さん達が！？ 無事なのか？」

「ええ、無事です。ここはホワイトハウスの地下にある軍事基地の一室なのです。だからみなさんホワイトハウスに向かっています」

拓也はその言葉を聞いて、肩を撫で下ろしベッドに倒れた。

season 11 - 5 真実5

拓也のいる部屋のドアが、静かに開いた。

ドアの向こうには、美奈、レン、ブラッド、デビット、レイラがいた。

「拓也！！ 無事だったのか？」

「レン！ よかった無事だったんだね」

「ああ、いろいろあったがなんとか無事だ。拓也も元気そうだったよ」

みんなが拓也のほうを笑顔で見ている。拓也もそれに答え笑顔で見ている。みんながこれだけ心配してくれていたこととみんなが無事だったことに自然に笑顔がこぼれる。その中で一人うつむいている人が。

「美奈さん？」

その言葉が聞こえたのか聴こえていないのか、美奈はうつむいたまま静かである。

「美奈さん、泣いてるの？」

その言葉が聞こえたのか聴こえていないのか、美奈のパンチが拓也の頬に飛んだ。

その勢いで、拓也は自分が寝ていたベッドまで吹き飛んだ。周りのみんなはその行動に驚いたが、殴られた本人の拓也とレンはなぜか笑顔でいる。

「やっぱり、いつもの美奈さんだ。ずっと心配してたんだ。元気そうでよかった」

「……それは、こっちのセリフよ。馬鹿」

「感動の再会の時だが、いいかね？」

それを言ったのは最高権力者のネレセスだった。その言葉に全員が振り向く。

「あんたが、全ての責任者か？」

レンがネレセスに質問する。その言葉にネレセスは軽く笑い

「そうだ」

と答えた。その瞬間レンがゆっくりネレセスに近づく。ネレセスの前まで来るとその瞬間レンの拳がネレセスの頬を捕らえた。ネレセスは殴られた衝撃で床へと倒れる。ネレセスは床に這いつくばったままレンの顔を見る。レンの顔は怒りに満ちていた。

「今度、仲間の命を狙うような真似をしてみろ！ 絶対許さないからな！！」

レンは拳を胸の高さまであげて、ネレセスを睨みつけて言った。ネレセスは、その言葉にも再び笑みを見せ、ゆっくり立ち上がった。

「君達には悪いと思ってはいるよ。だが、真実を知った君達なら私の行動の意味が分かるはずだ。それに一つ勘違いをしている。確かに私も君達を殺す命令を出しはしたが、あのへりだけは私達ではない」

「なに？」

「あのへりこそ、この地球を侵略するのが目的の異性人”レプタリアン”達のUFOだ。彼らのUFOは他の異性人達のより、遥かに技術が高く、偽装変形が出来る。君らの命もへりの姿に化け狙ったのだろう。そして、ここからが本題だ。……ここから先は、アダム以外は踏み入ることは遠慮していただきたい」

「え？」

その言葉にその場にいた拓也も含めた全員が驚いた。

「アダム以外は、これより先に踏み入ることは遠慮していただきたい」

その言葉に拓也だけでなく、その場にいた全員が驚き、疑問を投げかけている。

「アダムにはこれから火星に行くための訓練をしてもらう。訓練後我々の用意した宇宙船で、まず月へといってもらい、そこから火星へと行って貰う。月には異性人達がいるし、火星も危険な異性人がある。ただの人間にはあまりにも危険すぎる。悪いが君達と一緒に連れて行くことは出来ない」

ネレセスの言葉にその場にいた全員が静まり返る。ネレセスの言っていることも理解できるからなおさらだ。しかし、それでもやはり納得のいかないものがある。

「危険は承知だ。いままでも散々危険な目にはあつてきた。いまさらこの件から引く気もないし、俺は拓也と一緒に宇宙へ行かせてもらっ」

「私も……、絶対に行く」

それを言ったのはレンと美奈だった。その言葉を聞いた拓也がネレセスに言う。

「ネレセスさん、悪いけど最低でも美奈さんとレンは連れて行きたい。俺はいままで自分ひとりだとなにも出来なかった。もちろん他

のみんなのおかげもあるけど、この二人がいたからこそここまでこれたんだ。この二人がいけないなら俺もいけない」

その言葉にネレセスは意外そうな顔を見せた。

「アダム、分かっているのか？ 遊びじゃないんだ。命の危険があるところに一般人を連れてはいけない。今彼らが真実を知っているだけでも問題なのだ。下手を討てば死ぬかもしれないんだ」

「……分かってるよ。でも、俺の目的はこの地球を守ることだろ？ そばにいる大切な人も守れないように地球なんていう大きなものは守れない」

その言葉にネレセスの表情は、少し変化した。そして、美奈やレンの顔を見た。

「お前達二人は本当に覚悟があるのだな？ 命の保障はできはしないぞ」

「ああ」

レンは真剣な表情を崩さずに答えた。

「訓練は厳しい、ついて来れるか？」

「ええ、なにがなんでもやり遂げてみせるわ」

美奈も真剣な表情を崩さず、ネレセスの目を見て答えた。

「……、いいだろう。だが、訓練中に少しでも連れて行くことが不

可能だと感じれば即お前達は降ろす」

その言葉に美奈とレンは静かに頷く。それを確認するとネレセスは拓也の肩に手を置き言う。

「いい仲間を持ったな。アダム、君達が生きて帰れることを心から願っているよ。約束しよう、帰ってきたら盛大に祝おう」

その言葉に拓也は、笑顔で頷いた。

Season 11 - 6 真実6（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

真実編はこれにて終了です。しかしこれはあくまで前半部分の真実であり、後半またあらたな謎が出てきます。

どんな謎がでてくるかはこれからのお楽しみです。そしていよいよ次話から新展開です。どうぞこれからもよろしく願います

そこは白い建物が建つ庭の一角。

そこにはベンチが一つあり、その横には緑の葉をたくさんつけた樹が一本その雄大さをかもし出して立っている。

そして、そのベンチには一人の青年が腰を降ろし、遠く遙かに見える海の色を反映した澄み切った青い空を見つめていた。

しかし、青年の目に映っていた空は、激しい衝撃と共に次の瞬間には芝生が覆い茂る地面を捉えていた。

「やつほお！ たつくん、なにたそがれてんの！？」

先ほどまでベンチに座り空を眺めていて、今は地に這いつくばっている青年は拓也だった。そして、地に這いつくばる原因を作ったのは美奈だった。

「み、美奈さん！？」

拓也は手を頭にやりながら美奈のほうを見た。

「一人でなにやってんの？」

「……別になにもやってないよ。ただ、今までのことを思い出してただけさ」

その言葉に美奈は疑問符を浮かべた。

拓也は、地面から腰を上げ、再びベンチに座った。美奈もそれを見て無言でベンチに座る。

「今まで、俺はたくさんの人に助けられてきたなあと思って。美奈さんやレン、ブラッドやデビットにレイラ。みんながいたからここまで来れた。とても俺一人じゃここまででは来れなかった」

「……当たり前じゃない。一人でなんでも出来る人間なんていないわ」

「レンはなんでもできそうだけど？」

「レンにだって出来ないことはあるわ。例えばレンは、泳げないみたいよ」

「え？マジっすか？」

「小さい頃からずっと引きこもってパソコンばっかやってたから泳いだことがないそうよ。まあ、あいつの場合は自信家だから絶対そんなこと言わないと思うけど。私の情報網をなめてもらっちゃ困るわ」

「そっか、そういえば美奈さんはNSAだったね、確か。あれを知った時はマジで驚いたよ。まあただの学生じゃないとは思ってたけど。なんか俺の周りはずい人ばっかだ」

「たっくんは馬鹿だからなんか勘違いしてるみたいだけど、私達もたっくんにいる助けられてきたんだよ。たっくんがいなかったらここまで来れなかったのは私達も同じ。たっくんのおかげで真実

を知ること出来たしね」

「真実か。俺達が追い求めてきた真実は全部分かったんだよね。異性人の謎も、UFOのことも隠してきた秘密も」

「……やっぱりたつくんは馬鹿丸出しね。まだ全部の真実は分かってないわ」

その言葉に拓也は美奈のほうを見た。

「最初に見たDVDを思い出して。あのDVDでアームストロング船長達が異性人に渡していた謎のモノ。まだあれがなんだったのか分からないわ」

「そういえば、確かになにか渡していた」

「実はたつくんが誘拐された後に、レイラが言っていたことがあるの。アダムとイヴについてそしてその子供メシア」

「メシア？」

「キリスト教では救世主の意味を指すのよ。これはレイラの推測にすぎないし、私達が聞いた真実とは少し違うんだけど異性人の真の目的は究極の進化じゃないかって。人間のアダムと異性人のイヴの間に生まれし究極の生命体メシア。それこそが全知全能完全な細胞を持つ究極生命体、究極の進化を遂げた生命体」

「なんか、ゲームの話みたいだね」

「まあ、いずれにしろたつくんと一緒に宇宙に行けば分かることよ。」

だからたつくん頼りにしてるんだからしっかりしてよね」

美奈は拓也の顔を見て言う。以前の拓也ならこういうことを言われれば照れ隠しをしたりしただろう。しかし、今の拓也に迷いや動揺という言葉はあまりに不向きだった。

「うん、まかせて！」

美奈はその言葉に少しだけ微笑む。

「あ、そういえば美奈さんはどうしてNSAに入ったの？ 前から疑問に思ってたんだけど」

美奈は微笑んでいた顔を引き締めると拓也に言う。

「そっか、まだ話してなかったわね。ちょうどいい機会だから話してあげよっか」

拓也も美奈の真剣な表情に顔を引き締める。

「私は、孤児だったの……」

そして美奈は静かに過去を話しはじめた。

s e a s o n 1 2 - 1 拓也と美奈（後書き）

読んでいただきありがとうございます。いよいよs e a s o n 1 2 開始です。今回は美奈とレンに焦点を当てた話になります。ではどうぞよろしくおねがいします

「物心がついたところには私の両親は死んでたの。だから私は両親の記憶はない。あるのは両親の顔写真だけ。つまり私は生まれたときから孤児みたいなものよ。そんな私を育ててくれたのが元NSAの長官だった」

美奈の顔は少し悲しげな表情を見せた。拓也は美奈さんもこんな顔をするんだと思っただろう。

「彼は私にいろいろ教えてくれたわ。この世界の政治のことや宗教のこと、いろんな国の言葉まで。今で言う英才教育ってやつね。彼は元々私をNSAにするつもりだったみたいなの。いろんな勉強はすごく厳しかったし大変だったけど彼はとてもやさしくて暖かい人だった。でも、あの夜全てが変わった」

「え？」

拓也は美奈のその言葉に思わず疑問符を言葉にした。

「私が見たのは、彼の死んだ姿だった。眉間から撃ったであろう弾が反対側の頭から出ていた。彼の手には銃が握られていて警察は自殺だと判断した」

「自殺……」

「でも、私は自殺だなんて信じられない。確かに長官という仕事は大変だけど彼は自殺なんてするような人じゃなかった。だから私は自分でいままで彼に教えられていた知識で彼の死の原因を調べ始め

たの」

「……ちょっと、待って美奈さんがそのNSAの長官の死の原因を調べようとしてるのは分かったけど、なんでいきなりNSAの長官に育てられてるの？」

「普通その手の疑問って話始めた頃にするものじゃないの？ 馬鹿もここまでくると表彰ものね」

「ごめんなさい」

拓也は美奈のけなしに謝るしかなかった。

「私の両親は、父親はアメリカの研究者、母親は日本人でNSAの人間だったのよ。つまり私の国籍はアメリカ合衆国。それで長官とも知り合いだったみたいなの。長官は独身できっと両親の良き親友だったのかも知れないわ」

「え？ じゃあ美奈さんはハーフ？」

「だからそう言ってるじゃない。馬鹿。話を戻すわよ。とにかく育ての親である長官の死の原因を調べてるうちにあることが分かったの」

「あること？」

拓也はつばを飲み込んだ。

「それが、長官がある資料を持っていたこと。その資料に書かれていたこと。それが『プリンズ・レポート』という名前がつけられた

国家最高機密のレポートだったの。その内容は異性人の存在と彼らのテクノロジーの核が書かれたものだったらしいの」

「それって」

「今にして思えば長官はそれを手にしたことで政府の人間に殺されたのかも知れないわね。証拠なんてないけど。まあそんなこんなで私は異性人の存在を調べ、レイラと知り合いレイラからアダムのことを聞き、たつくと出会った」

「そっか。美奈さんもいろいろあったんだね」

拓也は美奈のこの性格も美奈の辛い自分の過去に打ち勝つために出来たもののような気がしてきていた。

「美奈さん……あまり無理はしないでね。美奈さん一人頑張らなくても俺達仲間がいるんだから」

拓也はこれでもかって言うほどの笑顔で美奈に言ってみせた。

「たつくん……」

美奈も少し微笑む。

「喉が渴いた。なんかスポーツ飲料買ってきて」

拓也の笑顔は消えた。拓也は最初会った頃にも同じようなことがあった気がしていた。拓也はベンチから立ち上がり飲み物を買いいこうとした。

「待つて！」

美奈の呼びかけに拓也は振り返る。

「もちろんおごりね」

「……はい」

拓也は思った。美奈さんはなにも変わらないと。でもそれは間違
いなく拓也にとって安心感を与える美奈の行動だった。それと思っ
た拓也は美奈に分からないように静かに微笑んだ。

Season 12 - 3 ファイナ

そこはその場所で空に一番近い場所。

下を見ると、大きな樹とベンチが見える。そこは、白い建物の屋上。

コンクリートで敷き詰められた屋上で、片手に持ったネックレスを空に掲げて空を眺めている男が一人。

「やっと、ここまで来たよ、ファイナ。だからもう安心して寝ても大丈夫だよ」

レンと呼ばれているその男は、少しだけ微笑み空にその想いを巡らせていた。

〈10年前〉

「ファイナー！」

「あ、お兄ちゃん！」

そこには、病院のベッドで寝るファイナという名前の女の子の姿があった。

ファイナはレンの実の妹。生まれたときから病弱で人生の大半を病院のベッドの上で過ごした。レンは子供ながらにファイナのこと

が心配で仕事で病院に来れない両親の代わりにほとんど毎日病院に来ていた。それこそ学校が終わったらすぐにだ。友達とも誰とも遊ぶことがなく、一直線にフィアナの元へ。

「ごめんねお兄ちゃん」

「ん？」

レンは椅子に座りながらフィアナの話に耳を傾ける。

「あたしの身体が弱いばかりに毎日病院通いで、友達ともあそ……」

そこまでフィアナが言うと、レンはフィアナの唇にソツと手を置きそれ以上喋らせないようにした。

「それは言わない約束だろ？」

レンはニツコリ笑って手を元の位置に戻した。フィアナは申し訳なさそうな笑顔で頷く。

「そうだ。今日はフィアナにプレゼントを持ってきたんだ。少しでもフィアナが病院にいる時に寂しくないように」

そう言ってレンはカバンの中からノートパソコンを取り出した。

「ノートパソコン？」

フィアナは不思議そうにレンの顔を見た。

レンはノートパソコンを開き、起動させた。しばらくしてデスク

トップの画面になると画面の端からマスコットキャラのようなプニッとしたクマが二足歩行で歩いてきた。そして画面の中心まで来るとふきだしと共に”フィアナちゃんこんにちわ”の文字。

「わぁー！　かわいい！　どうしたのこれ？　お兄ちゃんが作ったの？」

「ああ、これで少しは寂しさが紛れるだろ？　さ、名前をつけてあげよう」

レンはフィアナにデスクトップで動くクマの操作方法や楽しみ方などを教えた。

それからというもの、レンが病室に来ると必ずそのクマのマスコットキャラと遊んでいるフィアナの姿があった。レンはその姿を見てフィアナが少しずつ元気になっているように感じていた。

ある日レンがいつものように病室に来るとフィアナはパソコンを閉じなにやらニッコリ笑っていた。

「お兄ちゃん、今日は誕生日でしょ？　ハイ！　あたしからのプレゼント！」

手にはクマの形を象ったネックレスが握られていた。どこからどうみても手作りのネックレス。クマの形はなんだか不恰好だし、正直言って市販のソレと比べてもまるで駄目駄目な出来。でもレンにしてみれば市販のどんな高級なネックレスよりもどんな質の良いネックレスよりもそれが一番、一生大事にしたい宝物にしか見えなかった。

だが、しかし現実残酷だった。

レンが知らせを受け駆けつけたときには、フィアナの顔には白い布が被せられ二度と見せてはくれない笑顔を残し一人静かに眠っていた。

レンは悲しく泣き崩れた。たった一人で。

そこには、両親の姿はなく時間が止まったフィアナの変わりにレンだけが暗い空間でただひっそりと時を刻んでいた。

season12 - 4 レンの想い

「おい、ちよつと君！」

警備員の制止を振り切って少年は施設の内部へと入っていく。彼は以前この施設にきたことがあるのでどこにいけば目的の人物に会えるのかが分かっていた。少年は、目の前にあるドアを開け中へ入っていく。そこには数人の大人と奥のパソコンの前に座る男性が一人いた。男性は少年の姿を確認すると椅子から立ち上がり、

「ホープ？ どうしたんだ？ ここは仕事場だぞ」

「父さん……フィアナは死んだよ」

レンは息を切らしながら父親の顔を睨みつけた。

「知っている。病院から連絡を受けた」

「だったらなんで病院にいかない！？ フィアナは一人で寂しく死んでいったんだぞ！！ あんたフィアナの父親だろう！！」

レンの父親は、ゆっくりとレンに近づきレンの肩に両手を置いた。

「ホープ、ここは仕事場だ。帰りなさい。まだ小さいお前に言っても分からないだろうが父さんは国の存亡に関わる重要な仕事をしている。フィアナのことは残念だが今は仕事の手が離せない。一段落ついたらすぐにフィアナの元へ……」

「ふざけんな！！」

レンは肩にある父親の手を振り払い、大声で叫び父親をその目でしっかりと睨みつける。

「仕事がそんなに大事なのかよ！ 自分の子供の命より国の命のほうが大事なのかよ！」

「ホープ、なんとも言うがいい。だが、国があつて初めて人は生きることが出来る。未来のために今が一番重要な時なんだ」

「分からないよ……分かるわけねえだろ！！」

レンは大声で叫びながらその部屋を走って出た。まるで父親から逃げるように。

レンはそのまま家に帰った。家にはフィアナにあげたノートパソコンが一つ置かれてあつた。レンは静かにそのノートパソコンを開け起動する。起動するとデスクトップにクマのマスコットが現れる。

クマのマスコットは中央まで来ると、いつものようにふき出しを出す。レンはそこに表示されている文章を見て涙が溢れてきた。どうしようもないくらいに大粒の涙が。

そこには”お兄ちゃん、ありがとう”の文字。

それはフィアナがレンに込めた最後の想い。レンは涙を拭きある決意をする。そしてレンはパソコンのデスクトップからネットに繋ぐ、レンはそこから父親の働いている施設のサイトへとアクセスし

た。

そのサイトは国防総省の公式サイトだった。レンはそこから自作のプログラミングを介して国防総省のデータをハッキングした。これがレンが行ったはじめてのハッキングだった。

レンは以前からハッキングの知識だけであつたのだがハッキングする理由も興味もなかったのでそれを行うことはなかった。しかし今は理由があつた。それは父親の仕事を知ること。

幼いレンが考えたのはフィアナの死を生かすこと。これ以上他の人がフィアナのように悲しく寂しい死を迎えないように、父親がしている仕事の内容を知り、レンが裏から仕事を解決して父親の仕事を減らしていこうと。まだ大人の事情を知らない子供ながらの真剣な答えだった。

だが、そこでレンが知つたのはおおよその予想を遥かに裏切る内容だった。そこには”異性人””UFO””宇宙”などのキーワードが蔓延していた。その内容に驚きはしたもののレンの目的は変わらなかった。フィアナのためにもこれらの謎を解明することを強く強く己の心の奥底に刻みレンの探求の人生は幕を開けた。

「おい、レンー！」

レンのいる屋上に拓也の声が木霊する。レンは屋上から下を覗くそこには拓也と美奈の姿。

「ネレセスさんが集まってくれて」

レンは承諾したと言わんばかりに手を上げる。

「どうしたのネレセスさん？」

拓也達はネレセスの呼びかけに一つの扉の前に集まっていた。その扉はまるで何重もの鉄が重なっているような頑丈な雰囲気をも出し出していた。

「君達にまだ見せていなかったのを思い出してね。訓練も順調に進んでるようだし、宇宙へと行く日も近い」

そう言うとなレセスは扉の横にある機械にカードを通し数字を打ち込みパスワードを解除する。すると扉は煙を吐きながらゆっくりと開き始めた。扉はやはり頑丈なようだ物々しい音と共に扉が開いていく。

扉が開き、部屋の中が見えてきた。拓也達はそこにある物体を見るなり驚きの表情を浮かべた。

そこにあるのは、一般的にUFOと呼ばれる物体だった。

黒い逆三角形のフォルム。機体の表面は謎の金属で固められたように鮮やかに光沢を放っていた。そしてそれはまるで重力に逆らうように空中に浮いていた。

「これは、我々が開発した半重力航行機。簡単に言えば地球型のUFOだ。だが原理は異性人達のUFOと同じ半重力推進力とメタルチタン動力を使用している。機体のフォルムは特殊で空気抵抗を限りなく零にすることに成功している。これにより機体内に乗っている状態で光スプードを出してもあまり影響を受けない。……これから君達が乗る機体だ」

「俺達が……」

「これからの訓練でこいつを自在に乗りこなしてもらう。とは言ってもこいつでは宇宙まで飛び立つことは出来ない。君達是我々のシヤトルで月まで送ることになるだろう。この機体は別ルートで月へと送る」

拓也は驚きの表情を浮かべていたがしばらくして落ち着いた表情へと戻った。

「いよいよ宇宙へ行くんだね」

拓也の言葉に、レン達は耳を傾ける。ネレセスはあえて質問を試みる。

「臆したか？」

「……大丈夫だよ。もう覚悟は出来てる。行くよ、残りの訓練もし
っかり終えて彼らの待つ宇宙へ。そして全ての謎を解き明かす」

その答えにネレセスを初めレン達も笑顔で拓也を見る。

そして数ヶ月に及ぶ訓練を終え拓也達はいよいよ宇宙へと行く準備に取り掛かる。

s e a s o n 1 2 - 5 地球型（後書き）

読んでいただきありがとうございます。 s e a s o n 1 2 はこれにてお終いです。次回いよいよ舞台は宇宙へ。

それでは次回からもまたよろしくおねがい致します。

Season 13 - 1 シャトルへ

静かに吹く風。

そこから見える小高い丘。その先にあるのは海。

その遙か前方に見えるのは、空をも突き刺すように天にまっすぐ伸びた人類の最高技術の粋を結集した漆黒の宇宙へと飛び立つスペースシャトルや補助ロケット達。

彼らは、静かにその時が来るのを待っていた。

「説明は以上だ……。何か質問はあるか？」

拓也達はNASAにあるミューティングルームでネレセスにより宇宙へ飛び立つ際の説明などを受けていた。

ネレセスの説明によると、拓也達を乗せたスペースシャトルは発射後、月へと向かって真っ直ぐ飛んでいく。その後、月の周回軌道に乗り月の裏側へと降り立つ。そこでは彼らが待っているので詳しい事情はそこで説明されるという。月での用事が終われば拓也達は彼らの技術により火星へと飛び立つことになる。そこでなにが待っているかはまだネレセスにも分からないようだ。

拓也達は説明が終わるとシャトルの待つ広場へと向かい始めた。

今回の計画のために名づけられたプロジェクト名は”ノア計画”。スペースシャトルに乗り込む人員は六名。

拓也、美奈、レン、そこにシャトルの操縦士二人と技術部のエンジニアが一名。彼らも当然、異性人の存在なども知っていて尚且つ訓練も受けた精鋭中の精鋭である。

拓也達は、宇宙服に身を包みシャトルへの一步を踏み出す。目の前にはシャトルへと乗り込むためのエレベーターがあつた。拓也は静かにそのボタンを押す。

扉は拓也の気持ちを表すように静かに開き拓也達を招き入れる。

拓也達はこれから乗り込むシャトルの横をエレベーターで上がっていく。このシャトルを見てるとどこまでも高い位置まで上がっていけそうな気がする。拓也はそんなことを考えながら白い表面をなぞる様に見ていた。

シャトルの名前は新開拓、最先端の結集などの意味で”フロンティア”と名づけられた。

エレベーターは、遂に目的の位置までたどり着き、拓也達を降ろす。そこは金網越しに創られた鉄製の足場で下を見ると地面までがかなり遠くその高さが身に染みて分かる。でも拓也はそんなことで怯えることはなかった。

拓也は目の前にある扉しか見えていない。扉の前にはNASAの職員が手を後ろで組み立っている。

拓也はその職員の横を通る時に職員と目が合った。職員は無表情だったが目が合った瞬間笑顔で返してきた。拓也はなんとなくそれだけで緊張の糸が少し軽くなったような気がした。

しっかりと訓練は積んだ。だが、シャトルで実際に宇宙へと飛び立つのは初めてなので、その自身とは裏腹に不安も抱えていた。拓也だけではない、美奈もレンも他のクルー達もみな不安や緊張を抱えている。

拓也は扉の手前で停止した。ここから一步踏み出せばシャトルの中へ足を踏み入れることになる。

拓也の肩に手が乗る。

「いっつ」

それはレンの手だった。拓也は美奈とレンの顔を見る。

「ああ、いっつ。これが俺達の第一歩だ」

拓也は静かにしかしっかりとした足取りで、シャトルの中へと足を踏み入れた。この一步は拓也達にとって最も大きな一步になる。

s e a s o n 1 3 - 1 シャトルへ（後書き）

少し間が開いてしまいました。 すいません。

今回より舞台は宇宙へと行きます。 それでは s e a s o n 1 3 よろしくお願ひします

Season 13 - 2 打ち上げ

ここはNASAの管制塔。

いつもの職員は全員休暇。今いるのは軍の上層部やアダムの件を知っているもの達。すなわち世界の裏を知るものたち。いつもの職員達や報道陣には極秘の実験のための打ち上げとなっておりシャトル打ち上げ日以外の情報は一切公開されていない。もちろんシャトルに乗り込んでいる拓也達のことも今現在管制塔にいる人達以外は知ることはない。

全員が自分の役割を果たすために席についていろいろな情報が表示されているパソコンに向かっていた。管制塔の中は異常なまでのざわめきと騒々しさで溢れかえっていた。

メインとなる中央の画面にはシャトルの全景が映し出されていた。

『アダム達全員はメットを装着してくれ』

シャトル内にネレセスの声が響き渡る。拓也達は言われた通りメットを装着して準備に取り掛かる。係りの人が拓也達を椅子へと座らせベルトで席に固定する。がっちり固められた拓也達は身動きが出来ない状態へとなった。ここから拓也達が出来ることはない。ただ無事に飛び立てることを祈る以外はないのだ。

管制塔は相変わらずざわめきが収まらない。これから宇宙へと飛び立つシャトルの最終点検がまもなく終わろうとしている。管制塔内では様々な点呼確認の声が聞こえる。

「メインシステムOK」

「補助動力システムOK」

「通信システムOK」

全ての点呼確認が終わり、いよいよシャトルが飛び立てる段階へとなった。

「アダム……君達に栄光あれ。……カウントダウン開始！」

「打ち上げ開始31秒前、オービターカウント30……29……」

担当の職員が順次カウントダウンしていく。ネレセスの言葉と共にシステムなどが起動し、メインエンジンと左右に取り付けられた補助エンジンの二つがうねりをあげ始める。シャトルは多少の振動と共に揺れ始める。

「……20……19……」

カウントが少しずつ減るに従いシャトルの機械の起動が多くなる。遂に補助エンジンとブースターが起動し、激しい轟音と共に、火を噴き始める。

「10……9……」

打ち上げ十秒前、メインエンジンが起動しシャトル本体のブースターが点火をし始める。

シャトル内はその轟音によりほとんどの音が遮られていた。さら

に激しい振動が拓也達を襲っていた。訓練とは違うこの緊張感とは他と比べ物にはならない。僅か数分後には宇宙へと飛び立っているのだ。

ブースターの点火が激しくなり始める。

「…2…1…スペースシャトル”フロンティア”打ち上げ開始！」

カウントが零になると同時に噴射はピークとなり激しい煙と共にシャトルが補助ロケットの力を借りてゆっくりと上昇し始める。しかしすぐにスピードを上げてどんどん上昇していく。激しい轟音と大量の煙を噴き上げてシャトルは加速しさらに上昇していく。

「やったぞ！ 打ち上げ成功だ！」

管制塔内では、歓声が飛び交っている。その一方気が抜けないと意気込む者達もいる。

「フロンティア異常なし……以前異常なし……」

フロンティアは特別に問題もなく徐々に上昇していく。僅か数十秒で成層圏まで達し宇宙とされる領域まで僅かとなっていた。

機内にいる拓也達にはとんでもない重力がかかっている。訓練をしているとはいえ、それはとてつもない恐怖を生み出しているはずだが、それ以上に苦しいためそんなことも考えてはいられない。

「補助ロケット、離脱」

その声と共にボタンが押され遠隔操作で補助ロケットが切り離さ

れる。補助ロケットは地球の重力に引き寄せられ地上へと向かって落ちていく。やがて大気圏へと突入すると空気との摩擦で激しい炎と光を放ち始めた。

一方シャトルは成層圏を抜け、地球の重力磁場をも抜け宇宙へと飛び出した。

Season 13 - 3 宇宙

ここは無限ではないかと思うほどの広大な闇の世界。そこから見えるのは青い星”地球”。

かつて宇宙飛行士が残した有名な言葉”地球は青かった”。まさにこの言葉が適切だと分かる光景。それを拓也達は見ていた。

「見てよ。美奈さん、レン。地球だ。もうあんな遠くに」

その声に美奈とレンは窓から外を覗く。そこには青く輝く地球という名の星が見えていた。

拓也達を乗せたスペースシャトルは成層圏を抜け宇宙へと出た。そしてまっすぐ月へと向かっている。この後、月の降り立つ位置に着くまで月までまっすぐ飛びその後第一の難関である周回軌道へと乗る。

スペースシャトル内は既に重力圏を抜けているので無重力状態となっている。拓也達も始めての無重力空間に多少落ち着きがない。ブルでの無重力の訓練とは違う。正真正銘、本物の無重力空間なのだ。

水を撒けば球体になるし、宙回転も簡単に出来る。しかも物を投げるとなにかにぶつかるまでずっと飛び続けるのだ。身体も軽く重さを感じない。とてつもない浮遊感。空を飛ぶというのは初めて経験した拓也達だった。

いつも空を見上げると圏内を抜けた先にある広い宇宙。地上から

見つめるしか出来なかった。まさか自分がこの宇宙に飛び出すことになるなんて夢にも思わなかった、拓也はそういう風に思っていた。

「感動するのも分かるが、これからが特に大変だぞ」

このフロンティアの操縦士でありリーダーであるベルリクトだった。

彼は、NASAの人間ではない。ネレセスの下で働く裏の世界の人間だ。今回のこのノア計画のリーダーに任命され、これから拓也達と行動を共にする人間だ。

「ベルさんは宇宙に来たことはあるの？」

「ああ、何度かあるさ。ただし、今回のようにスペースシャトルではないが」

その言葉にレンが割り込んできた。

「その事で疑問があるんだけど、なんでスペースシャトルで宇宙に来る必要があるんだ？ 異性人の技術ならシャトルでなくとも宇宙までも月までも行けるだろ？」

「ああ、それには少し事情があつてな。詳しくは月へついてから説明するよ。まあ言うなれば条件が揃ってないからさ」

「条件？」

「それより、後数時間で月へ着く前の最大の難関である周回軌道へと乗るから訓練の成果を見せてくれよ」

ベルリクトの言う月の周回軌道。

拓也達の目的地は月の裏側にある一点。そこにたどり着くために月の重力圏から超高速で周回軌道に乗ってそこまで行く必要がある。しかしその時のスピードは時速三万キロにも達し、相当な重力が身体にかかる。自分の体重の約10倍の重さが身体にかかるわけだから、しっかりと鍛えていないとその重さに耐えることができずに死んでしまうことになる。そのため地球で行われた訓練は重力に耐える訓練に重点を置いていた。

もちろん訓練では全員が基準をクリアしている。だが訓練と実践では大きく差が出る。しかしそれが逆に訓練の成果の見せ場でもあるのだ。

スペースシャトルは順調に航行し、遂に月の重力圏内に入る。

Season 13 - 4 周回軌道

「全員席へ着いてメットを装着、そして各自ベルトで座席に固定してくれ」

ベルリクトの指示で拓也達は全員自分の身体を座席へと固定する。

「いよいよか」

ベルリクトともう一人の操縦士はシャトル前面のスイッチなどをついやる弄っている。今回の作戦は特殊な形態を取っている。それは地球との交信の遮断。とはいっても生体データなどは特殊な暗号に変換して送信はしているが、音声による通信は一切ない。

というのもこの作戦自体が極秘で盗聴のおそれがあるためで、通信が出来ない状態となっているのだ。そのため現場では地上からの指示なしで動く必要がある。そのためベルリクトの責任による部分が異常なほどに大きい、ベルリクト自身もこのような事態は初めてだった。いくらNASAや軍隊で培った技術や精神力があれどもこれほど重い任務はない。

つまりベルリクト自身も多少の不安を持っていた。それでもそんな不安を拓也達に見せないようにがんばっていた。

シャトルの窓からはすでに月が映っている。シャトルは月の重力圏に入り、最初の難関に乗りかかった。

「全員準備はいいか？」

ベルリクトの言葉に全員が返事をする。

「それでは今より、超高速飛行に入る。3、2、1……」

カウントダウンが終わると共にベルリクトは自分の席の前にあるスイッチを押した。

その瞬間、シャトルの後部にある噴出口から打ち上げの時よりも大量の熱源とエネルギーが噴出され、シャトルは一気に加速した。シャトルは徐々にスピードを上げて月の周回軌道へと乗る。月よりも離れず着かずで月の周りを回り目的地である月の裏側に到着するためだ。

シャトル内の拓也達はその脅威的なスピードにより押しつぶされそうになっていた。訓練と実践での違いに驚きを感じながら必死に耐えていた。予想以上の重力と揺れも重なっている。

「な、なんて早さだ！」

それは拓也の声だった。

「がんばれ！ もう少し耐えるんだ」

レンの声も機内に聞こえる。

現在のスピードは時速28000キロ。もの凄いスピードで月の周りを回っていく。もうすでに地球ですら遥か遠く、地球の姿もほとんど見えない状態となっていた。つまりもう月の裏側へと到達しかけているということだ。

シャトルの後部の噴出口の勢いも徐々に衰えてきた。機体の揺れも少しずつ収まってきて安定してきた。

スピードも通常時に戻ってきて、拓也達も落ち着きを取り戻してきた。

「ふうー、美奈さん、レン大丈夫？」

「当たり前じゃない。たっくんよりも耐えられる自信はあったわ」

「俺も……」

拓也は二人の姿を確認した。全員がこの驚異的なスピードに耐え切り難関を乗り越えたのだ。

そして拓也は窓の外を見る。そこには月の裏側が映し出されていた。

もう地球の姿は見えない。見えるのはこれから降り立つ月の裏側だけだった。

Season 13 - 5 月へ

月。

地球の衛星で半径1738km、質量は地球の81分の1。

地球からはその裏側を見ることはほとんどできない。それは地球に対する公転周期と自転周期がほぼ等しいためであるが、厳密には完全に同じではなく月の公転周期には少しズレがあり、6.29度上東西に振れる。また月の赤道面と白道面（地球から見る月の公転軌道面）も黄道面（太陽に対する地球の公転軌道面）に対してそれぞれ傾いているので、月は南北方向にも6.68度の振幅で振れて見える。さらに、月は地球に近い天体なので、月を地平線上で見るときと、天頂付近で見るときとは東西方向の見え方に特に違いがでることになる。

そのため完全に一定ではないため地球からは月の全体の59%が見えることになる。

月にはさまざまな謎がある。

まず、アポロ12号が行った月の内部構造を知るための人工月震実験。月では地震は起きないために、人工的に地震を起こす必要があったのだが、この実験で月での振動が一時間以上も続いたのだ。これを不思議に思ったNASAは続く13号と14号でも人工月震実験を行った。するとまたしても月の振動は最低3時間続いたのだ。

本来、振動と言うのは吸収されなくなるものである。つまり地球で地震が起きてもあまり長く振動がないのは地中の岩盤やマントル

などがその衝撃を吸収しているからである。月で振動が続くということは吸収するための物質が少ないということを示している。つまり内部が空洞であるという可能性。

次に月にある海の謎である。月には海と呼ばれる黒っぽい部分がある。主にレアメタルと呼ばれる金属物質で覆われているのだがこのレアメタルは非常に重く硬い金属で本来ならば月の形成時に核付近まで沈んでいるはずなのだが、なぜかこのレアメタルは表面に多く分布している。また海の付近は重力異常が起きている。

さらにこの海であるが、月の表側の30%は海で形成されているが、なぜか裏側にはたった2%しか存在せず月の裏側は実に白い。

次に、地球からも見ることのできるクレーターの謎である。クレーターとは宇宙より降り注いだ隕石などの衝突によって出来る大きな穴のことである。もちろん地球にもクレーターは存在する。しかし月のクレーターは謎だらけである。本来隕石の衝突によりクレーターが出来るということは深さとその大きさは比例しているのが普通である。しかし月のクレーターはその大きさの割には非常に浅いや、すべてのクレーターがほぼ同じ深さなのだ。その深さは6キロである。直径200キロほどのクレーターの深さは6キロである。しかし直径1300キロもの巨大なクレーターの深さも6キロなのである。本来このようなことはありえない。

ましてや内部が空洞である可能性のある月では絶対にありえない。

さらにクレーターも表側は異様に多いのにも関わらず、裏側はそれほど多くクレーターは存在しない。

さらに月の裏側というのは、表面に比べ9キロも出っ張っている。

まだたくさんの謎が月にはあるのだが、これらの謎から考えられすべての辻褄が合う答えは一つしかない。それは月の誕生の謎はともかく、現在は月は異性人により改造された人工的な宇宙船であることは否めない。

地球の人間に分からないように表面だけを向けさせ、自然に見えるようにクレーターや海を用意する。それだけで実際に月まで来なければ月が人工的な物だと分かるはずがない。月まで来て初めて分かる。

それは月は人間を観察するための人工的な物質であるということ。

拓也達が窓から白っぽい月の裏側の表面を見てみると、地表から白い物体が二機飛んできた。

「あ、あれは!？」

「見覚えがあるだろ？ あれは、君達が飛行機の墜落事件の時に遭遇したソレと同じだよ」

二機の白い物体はシャトルの周りを縦横無尽に飛び回る。するとシャトルは白い光と金属音に包まれ拓也達は視界を奪われた。

次に拓也達が気が付いた時、シャトルは月の表面に着陸していた。

s e a s o n 1 3 - 5 月へ(後書き)

読んで頂きありがとうございます。season13はこれにて終わりです。次回season14もよろしくお願いします

窓から見えるのは地球の地表とは遥かにかけ離れた白い地表だった。拓也達は窓からその景色を見ていた。

「無事にたどり着いたな」

ベルリクトのその言葉に拓也達も無事に月へとたどり着いたことを実感した。

美奈はひたすら窓から外を眺めている。

「美奈さん、どうしたの？」

「うん、前にわたし達が見たDVDの光景とそっくりだなんて思ってた」

美奈は昔見たレンが極秘の軍事施設から盗みだしたアポロの真実の映像が映っているDVDのことを思いだしていた。今思えばそれが全ての始まりだった。そのDVDをきっかけにレンと出会い、謎を追い求めるきっかけになったのだ。

「DVDって言えば、あの時アームストロング船長とかは確かメックもつけずに外へ出てたよね。それって空気があるってことかな？」

拓也の疑問に美奈もレンもハツとした。その疑問にすかさずベルリクトは答える。

「その通りだ。月には空気がある。いや、正確には大気があると言

ったほうがいいかな」

「大気が？」

「そう。月全体を覆う地球と同じくらいの分厚い大気があるのさ。だが月に大気があることは極秘事項だ。だれにも知られるわけにはいかなかった」

「それじゃあ、あのDVDに映っていたのは？」

「もちろん真実だ。実際に自分のその眼で見て身体で感じるがいいさ。月は生物の住める星だということをね」

そう言うときベルリクトはドアの横にあるボタンを押した。ベルリクトはもちろん拓也達もメットはつけていない。

ボタンに反応して扉が上にゆっくりとせりあがっていく。ドアの隙間からは月の地表が見え地平線の彼方には黒い宇宙が見えてくる。ドアが完全に上がりきって月の姿が遂に完全に見えた。

その瞬間宇宙船の内部に暖かい風と酸素の匂いが流れ込んできた。地球の環境にそっくりだと拓也は感じた。ここは月だと認識がなければ地球とまちがってもおかしくはない。それが宇宙に浮かぶ地球の衛星、月。

「さあ、アダム。その足で一步を踏み出すがいい。今君達がいるのは地球外の星なのだ」

ベルリクトのその言葉に拓也は美奈とレンの顔を一瞬見て再び外を見る。拓也の心臓は激しい鼓動を脈打っていた。そして拓也は足

を上げシャトルの外へと足を踏み出す。拓也の足は月の地表へと着地した。

それに続き美奈やレンもシャトルを降りて月の地表へと足を降ろす。

「なんか感動だね」

拓也の言葉に美奈とレンはうなづく。

「あれ？」

美奈が突如なにかに気がついた。

「気がついたかね？ ここの重力の違いに」

「やっぱりそうなの？」

「月の重力は地球の6分の1だが、海の部分は重力が地球の1・25倍なのだ。そして総合重力は地球とほぼ同じなんだ」

ベルリクトが月の重力について説明を始めた時、地平線の彼方から光が発せられた。拓也達はその光に驚き一斉に見る。そこには光に照らされ数人の生物が立っていた。

s e a s o n 1 4 - 1 大気（後書き）

大変遅くなりました。いよいよユニマネも s e a s o n 1 7 にて終了となります。どうか最後まで応援のほどよろしくお願いします

Season 14 - 2 レト

そこには三人の人型の生物が立っていた。光に照らされているために逆光で見えにくいが確かに人の形をしている。やがて光が少し薄れその生物の全容が見えてきた。立っているのはあのDVDで見た人間に極めて似ている指が6本ある生物だった。

「ようこそ。アダムお待ちしておりました」

三人の中心に立っている生物が言葉を発した。拓也達が驚きに目を見開かせていると突如彼らの後ろに地面からせり上がって扉が現れた。

「お話は中でいたしましょう。さあどうぞ」

三人の生物の手招きとベルリクトの押しにより拓也達は、その生物に続いて扉より中へと入っていく。中は金属物質で出来たものと一目で分かるくらい輝いていた。ただそれがなにで出来ているのか拓也には判別不可能だった。

「ご紹介が遅れました。私の名前はレト。我々はデューダという星より参りました。現在この月には23種類の異性人が移住しています。彼らの紹介はまた後ほどいたします」

レトと名乗った生物は歩きながら拓也達と話始めた。しかしよく見ると彼らは歩いていない。空中に浮いているわけでもないのだが足を動かさずに移動している。

そうこうしているうちに拓也達は一つの部屋へとたどり着いた。

そこには一つの白い机といくつかの白い椅子が用意されていた。

「さあ、お掛けください」

拓也達は彼らに言われるがままに椅子に腰かけた。

「いろいろとお聞きになりたいこともあるかと思います。ですがまずは我々のお話をお聞きください」

そついいながらレトと名乗った生物も椅子へと座った。

「まずは我々の目的についてです。もう何度も耳にしていることと思われませんがレプタリアンを倒すことが我々の目的です。そのために何百年もの時を使い準備を整えて来ました。彼らは我々の文明レベルの一步上を行っているために簡単には手がだせない。そこで我々はアダムあなたを使うことにしました」

レトは壁に手をかざす。すると壁がスクリーンのようになりそこに映像が映し出された。

「使うという言い回しは大変失礼だと思いますがこれしか表現できないので、スクリーンをご覧ください。今説明しましょう。あなた達人類の起源とアダム、そしてこの宇宙について」

レトの説明は実に分かりやすいものだった。映像とレトの言葉で構成されたその内容は拓也達にとって非常に重要なものだった。

この宇宙が誕生して長い月日が流れた。この宇宙は何度も破壊と復活を繰り返してきた。まさに歴史は繰り返す。長い歴史の中で必ず、対峙するべき敵が現れる。どちらが正しいのかそんなことは分

からない。しかし状況を見て自分のいる位置が正しいと判断して行動するしか方法はない。

season 14 - 3 始まりの刻

拓也達はレトより様々な説明を受けていた。そして説明が終わりレトが話を終えようとしたとき、美奈がレトに質問をした。

「レト、ちょっと聞きたいんだけど。あなたの説明で大体のことは分かったけど、ネレセスさんの話にもあなた達の話にも一度も出てこなかったものがあるわね。あの時、アームストロング船長があなた達に渡した物。あれは一体なに？」

「……、あれはあなた達には関係ありません。以上で説明は終わります」

その言葉に美奈は立ち上がり静止しようとした。だがレトは立ち上がると扉から出て行こうとした。美奈は待つように促したがレトは聞く耳持たず部屋を出て行った。

部屋には、拓也と美奈とレンが残された。

「やっぱり、変よ。あの時渡していた物がなんなのか知る必要があるんじゃないかしら？」

「確かに、あの態度はおかしいよな？」

美奈とレンの言葉に拓也はまったく反応しない。

「どうした？ 拓也？」

「……、いやなんでもない」

拓也は少し悲しそうな目をした。美奈とレンは疑問符を抱いたがそれ以上拓也に聞くことなくその場を後にした。

ここは、どうやら月の内部とのこと。やはり月は異性人により改造された超大型の宇宙船だったのだ。ずっと昔から人類を監視してきた。レトの話の中にこういうのがあった。

異性人達は遥か昔から人間の歴史と深い関わりを持って生きてきた。時には天使となり舞い降りたり、神として舞い降りることもあり、人間の間で起きた紛争に手を貸したり、人類を選別して預言者や救世主を選んだり。

そして、それらは全てアダム一人のため。アダムに正しい知識を与え、間違った道に進まぬように。

その後拓也達は異性人達の紹介を受けた。そこには様々なタイプの異性人がいた。

主に人型がほとんどで、その姿は地球人そのものために区別がつかなかった。

異性人の紹介を受けている時、拓也は思った。

この宇宙も様々な進化を遂げてきた。喜びも悲しみもたくさんたくさん背負ってここまで来たのだと。ここにいる異性人達は一つの目的を持って団結して動いている。そして今大きな【戦争】を起こそうとしている。でもそれは仕方がないことなのかも知れない。歴史は繰り返す。生命がある限りそれは終わらない。

レトの指差した方向を向くとそこには地球で見た地球型UFOが存在していた。これほど大きな物をどうやって運んだのだろうか？拓也達は疑問も抱いた。しかし拓也達は質問をしなかったためレトはそんな説明はせずに話を進めていった。

「この航空機は我々の大型宇宙船に積んで火星の上空でこれに乗り換え火星へと乗り込む。火星へと乗り込んだら奴らに見つからないようにクレパスの間を通り、火星での我々の本拠地へと向かう。」

説明を終えるとレトは拓也達は大型の宇宙船へと乗り込むように促した。見ると地球型UFOも大型の宇宙船へと搬送されている。宇宙船内部に入った拓也達は不思議な光景に目を奪われた。そこは白い空間だった。とても広い。果てなんてないかのような奇妙な広さを持つその宇宙船に拓也達は圧倒された。

レトはその広い空間に置いてある操作盤の操作をしている。

「おい、椅子に座ったりしないでいいのか？」

レンは危険ではないかと心配になり疑問をぶつけた。

「大丈夫です。心配ありません。まもなく発射しますよ」

そう言うとレトはボタンを押した。すると宇宙船の前の扉が開き宇宙が見えた。宇宙船はまるでその宇宙へと吸い寄せられるように一気に加速し、月から出て宇宙へと飛び出した。そして水平飛行へと切り替わると更なるスピードで火星のほうへと飛んでいった。

宇宙船の内部では外の景色が見える。もの凄いスピードで飛んでいるのは分かるが内部はなんの重力も圧力も感じない。

「凄い、これだけスピードが出ているのになんの影響もないや」

「この宇宙船の内部はいわゆる真空間のようなものです。空気が抵抗することなく進むので圧力がまったくかからないのです」

レトは拓也の言葉にすぐに返事をした。

「どれくらいで火星に着くんだ？」

「数時間後です。ですから今から準備を始めていかなければなりません。いよいよ戦いの時です。アダム……。あなたは分かっていますよね？」

そういわれると拓也はレトのほうを見て言った。

「ああ、分かってる。大丈夫だ」

その言葉に美奈とレンは疑問を抱いた。

船内には、いくつか窓がある。レトの話だと地球で言うマジックミラーのようなもので、外からは船内は見えないが中からは外が見える仕組みらしい。拓也がその窓から外を見ていると赤い星が目に入ってきた。

それは、宇宙空間に浮かぶ一個の惑星、火星。

「火星だ！」

拓也の声に美奈とレンは反応して外を見る。

美奈もレンも始めてみる火星に感動にも似た感情を抱いていた。実際には写真で見るとよりも赤さは感じられないが赤い星だということも頷けるその表層の色は感動を与えるには十分だった。

「感動するのいいが、これからが大変ですよ。まず、奴らに見つからないように火星にある私達のアジトまで行かなければならない」

レトの言葉に拓也達の顔は引き締まる。

「一応、彼らの観察データを分析して、ちょうど死角となる時間帯に火星に突入できるはずですが、奴らの観察パターンはすぐに変わるのであまりあてにはなりません。もし変わっていたのなら奴らに見つかることになる」

「ちょっと待てよ。それってかなり無謀な賭けなんじゃないか？」

「もともと私達は無謀な戦いをしています。奴らのほうが科学力は上ですから。ここではつきり言っておきます。私の目的はアダムあなたをアジトへと連れて行きそこで待機しているはずであるイヴにあつてもらいます」

イヴ……その言葉に美奈が反応した。

「ちょっと、待って。イヴって。じゃあ、やっぱり……」

その時、船内に警報装置が鳴り響く。

「なんだ？」

『敵船探知！ 敵船探知！』

船内に警報装置による音声 that 鳴り響く。

「敵船？ まさか！？」

レトがなにやら船内の装置をいろいろ触っている。すると目の前のモニターにレーダーのようなものが映し出された。そこには中央にある点とそのすぐ後ろにも点が映し出されていた。

「しまった！ つけられていた！」

拓也はすぐに船体の後ろに回り船内の窓から外を見た。そこには黒く宇宙空間に溶け込むようにして一定の距離を保っている巨大な宇宙船があつた。

「アダム！　いますぐ航空機に乗り込んでください。奴らはもう攻撃体勢を整えています」

その声に拓也達はレトや美奈やレンと共に航空機へと急いで乗り込んだ。

「くそっ！　まさかつけられてたなんて」

黒い宇宙船の先端になにか光のようなものが収束していく。それを中にいた拓也達は察知していた。それは耳にキーンと響くような怪音を上げていたからだ。

「なんだ？　この音は？　耳に」

「奴らの主砲です。すぐに脱出しないとこの船はまもなく破壊される」

一点に収束された光はそれこそまさに光速のスピードで拓也達がいる大型宇宙船目掛けて飛んできた。そして拓也達のいた宇宙船は粉々に破壊された。

season 14 - 5 火星へ（後書き）

season 14 はこれにて終了です。もう少しで終わりです。次回もよろしくおねがいします。 次

宇宙空間で激しい爆発が起こる。宇宙空間は真空のため船内の空気を吸い込みつくした炎は一瞬にして消え去る。その隙間から一機の小型の航空機が飛び出した。拓也たちの乗っている航空機だ。ものの凄いスピードで回転しながら火星目掛けて飛んでいく。

一方巨大で真つ黒な宇宙船からも二機の小型の航空機が拓也たちの乗っている航空機の後を追うように飛び出てきた。拓也たちの航空機はそのままの不安定のバランスのまま火星の大気圏に突入する。

「おい！ この体勢はやばくないか！？」

中にいる拓也達はその航空機の原理から抵抗を受けていないため平気ではあるが、航空機自体は飛んでいるというよりも落ちていくという表現のほうがはるかに近い。しかも後ろには二機の敵の航空機が追って来ている。今のままの体勢では大気の熱にやられて航空機は燃え尽きてしまう。

「いま体勢を整えます」

拓也達の航空機は大気との摩擦により煙を上げ始めた。その後ろの航空機もその煙の間を抜けて拓也達に接近する。激しい摩擦音が唸っている。

レトは必死に体勢を整えようとしているがなかなかうまくいかない。爆発の衝撃でバランスを大幅に崩してしまったようだ。航空機は煙をあげてはいるもののなんとか大気圏を抜けた。しかしあまり

のスピードとバランスを保てないため今のままでは地面に激突してしまう。

「くそ、あがれー！」

レトは操縦桿を必死にひっばっている。しかし航空機はバランスを崩したままものすごいスピードで地面目掛けて飛んでいる。その時操縦桿をレンが握った。レトとレンは二人で操縦桿を引っ張る。地面はもう真近。

「あがれー！」

二人で持つ操縦桿が引っ張られ航空機は地面ぎりぎり、水平飛行の体勢になった。地面すれすれを飛んでいる航空機の後を敵の航空機が追っている。

「やった。なんとか体勢を整えたぞ」

「でも、まだ後ろから二機の航空機が追ってきてるよ」

「体勢さえ整えばなんとか逃げ切ってみせますよ」

そう言つとレトはそのままのもの凄いスピードのまま火星の大地の間にある谷へと航空機を移動させる。

それは火星の巨大なクレパスで大地が裂けているように深い谷だった。レトはその間に航空機をすべりこませた。そこはかなりのテクニクがないと壁に激突してしまうような入り組んだ谷で、レトの作戦はその地形を利用して二機の航空機をまく作戦のようだ。

レトは航空機をうまく操り、クレパスの間を上手に抜けていく。とんでもないスピードにも関わらず谷にぶつかることもなく。しかし、後ろからついてきている二機もまた、谷の間をうまくすり抜け徐々にその差をつめようとしていた。

しかも、突然、緑色のレーザーのようなものを複数打ち込んできた。二機は互いに入り乱れながらもうまくぶつからないように操縦し、なおかつレーザーで拓也達の乗る航空機めがけて攻撃を仕掛けてきたのだ。

「奴ら、攻撃までしてきやがった。やばくないか？」

レンの心配は的中していた。ただ逃げるだけのこの状況下で二対一。しかもスピードは向こうのほうが上。谷を避けながら敵の攻撃も避けなければならない。

「くそ、このままじゃ」

「レト、私に作戦があるわ」

それまでただ状況を観察していた美奈がレトに提案した。そしてレトたちにその作戦を話した。

「ちょっと待ってください。それは危険すぎます。私はなんとかしてもアダムをイヴのもとへ送り届けねばならない」

「でも、このままじゃいずれやられるわよ。私達が助かる道はこの方法しかないのよ」

レトは少し沈黙し、考えている。その間にも敵は攻撃の手を休め

ない。

「……わかりました。やってみます」

レトは決意をした。敵の二機から逃げ切るために拓也をイヴという者のところへ連れて行くために。

s e a s o n 1 5 - 1 火星での攻防1（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

今回よりseason15が始まります。どうぞよろしく。

レトの操縦する航空機は谷の間をすり抜け、敵の攻撃をかわしながら飛行している。後ろには二機の航空機が緑色のレーザーを打ち込んでいる。この状況下を打破するために美奈はレトに作戦を提案した。

レトは航空機を谷の底に向けて移動し始めた。谷の底ぎりぎりに到達したらそのまま飛行を続ける。敵の二機も同じく谷の底まで降りてくる。そして敵の攻撃はひたすら続く。

するとレトは突然航空機を上昇させはじめた。急上昇にも近いその上昇ぶりに敵の航空機は攻撃する手を休め上昇にのみ集中する。そして、谷を抜けて再び地上へと出た。その上まださらに上昇する。やがて目の前に雲が見え始めてきた。レトはそのまま雲の中に突入する。後ろの二機もその後を追ってくる。

二機は雲の中を上昇していく。その時、レトは敵に急接近するほどの近さを通り下降していた。それに驚いた敵の航空機は急にブレーキをし、再びレトの操縦する航空機を追うために向きをかえた。その時、下からもう一機の航空機がもの凄いスピードで迫ってきていた。

二機の航空機は激突し、互いに爆発した。破片が空高く舞い、重力に引かれて地上に落ちていく。

「やった！ 作戦通り！」

拓也達は船内で作戦の成功を喜んだ。

レトは再び航空機を谷へと戻し、その間を抜けながら飛行していく。

「やったね。美奈さん。ナイス作戦」

「まあね。敵のぎりぎりを通らなくてはいけなかったから危険ではあったけど、レトの操縦テクニックを信じてよかったわ」

「ありがとうございます」

レトは少し嬉しそうに返事をした。

「それにしてもなんでまた、谷の間を通ってるの？」

「この先の谷にイヴがいるからですよ。それに谷の間を通ったほうが敵に見つかりにくい」

この先にいるというイヴとは一体何者なのか。彼らの本当の目的は一体なんなのか。様々な疑問を抱きながら拓也達は谷の間を飛行していた。

しばらくいくと、小さな穴があった。レトはその穴の中に航空機を滑り込ませ、だんだんと奥に入っていく。さらに奥へと進むと、岩に囲まれた洞窟のような開けた空間が姿を現した。その一番下には扉があり、扉の前には二人の人物が立っていた。

航空機は、その前に降り立ち停止した。

「さあ、着きました。外に出ても大丈夫ですよ。酸素もありますか

ら」

そういうとレトは扉を開くためのボタンを押した。徐々に扉が開き外が見えてくる。拓也達はレトに続き後を着いてくる。

「やあ、おつかれ。イヴは？」

「お疲れ様です。レト様。イヴ様はこの先にいます。あなた達の帰りを待っていました」

そう答えた者もどうみても普通の人間にしか見えない。ただ間違はなく異性人なのだろう。

レトは中に入ると真っ直ぐにある場所へと向かった。しばらくいくと広間に出た。そこには大きな机といくつもの椅子が用意されており、机の上には食事が置いてあった。そして、その一番奥には、まるで天使のような金色の髪に身を染めた顔立ちのとても綺麗な女性がそこに座っていた。

season15 - 3 イヴ

「今、帰ったよ。イヴ」

レトがそう言うのと奥にいた女性が立ち上がり拓也のほうを見て言った。

「お待ちしてりました。アダム。私がイヴです。どうぞ、お座りください。食事を用意してありますのでどうぞお食べください」

拓也達はそれぞれ近くの椅子に座った。

イヴはまるで天使のように綺麗な女性だった。笑顔がとても麗しい。拓也は無意識にその笑顔に捉われていた。

「イヴさん、さっそくだけど質問してもいいかしら？」

美奈がイヴのほうを見て言った。

「ふふ、質問などしなくてもあなた達の求めている答えは用意してあります。結論からいいましょう。美奈さんが考えているようなことはありません」

その言葉に美奈は正直に驚いた。美奈の考えていること。それは、アダムとイヴの間に生まれしものメシアのこと。

「私達の最終目標は究極の進化です。それを達成するためにはレプタリアンを倒さなければなりません。しかしレプタリアンを倒すのは今のためではないです。未来に繋げるためです。レプタリアンを

倒さなければ私達に未来はない。私達が真に求める究極の進化は今はまだ達成できません。これから遙か未来、私達はたくさんの歴史と進化を歩んでいきます。そこにはきつと悲しみも、辛さも、楽しさも全てがあるでしょう。それらをこれから育まれる命に託すのです。永久に願いましょう。未来の繁栄を」

それを静かに聴いていた拓也がイヴに質問する。

「俺は覚醒して、全部が分かった。あなたの言っていることもよく分かる。でも一つだけ分からないことがある。あなた達の求める究極の進化とは一体なんなんだ？」

「……究極の進化。それは、今はわかりません。もしかしたら私達は今もうすでに究極の進化を達成しているのかもしれませんが。でも私は思うのです。究極の進化は自然と共存することだと。私達はその知能で様々な進化を遂げていました。とてつもない科学の発展は私達に文明を与え、生活を与え、命を育む糧として共存してきたのだと思います。そして人類は生まれ育った星をも旅立ち、この広大な宇宙へと進出した。しかしあまりに発展しすぎた科学力は時に自然を破壊する。私達もあなた達も科学ではなく自然に生まれた生物だというのに。そして、その典型がレプタリアンです。究極なまでに発展した科学力を使い、次から次から星の命を吸って生きている。そして彼らの次の目的は地球です。私達は他の星が歩んだ恐ろしい事態を再び起こさぬようにずっと昔から準備をしてきました。その作戦の一環がアダムあなたなのです。もし万が一人類が彼らによって全滅したとき、種の保存をはかるため、種を持つアダムを保護する必要があった。私も保存される者なの。しかし、私もアダムも逆に言えばレプタリアンを倒すための究極の武器になる。そして私達は戦うことを選んだ。種の保存をはかるよりも未来に繋ぐための戦いを」

イヴがそれを語っている時、ずっと悲しそうな顔をしていた。本当は戦いたくなんかないのだろう。出来れば戦わずに済むのであればそれが一番いいに決まっている。それでも戦うしか方法がない。イヴは最も辛い選択を選んだのだろう。全ては未来へと繋げるためここで全てを終わらせないために、今の戦いはここで終わらせなければならぬ。

「ところでなんでイヴはここにいるんだ？　ここは敵の本拠地だろ？」

レンはイヴに疑問をぶつけた。

「簡単なことです。あなた達の星の言葉で言えば灯台下暗しというやつです。敵もまさか自分達が探している者が自分達に最も近い場所にいるとは思わないはずですから。その証拠に地球までわざわざアダムを抹殺に行ってます。彼らにしてみれば、私かアダム。どちらか一方が消えればいいのです」

「なるほど。それで俺達が狙われたわけか」

「あなた達には本当に申し訳ないと思っています。でもおかげで我々も戦闘の準備が整いました。必要な情報は全面的にレトに聞いてください。彼は熟知しているので。これから、レトについて行って武器などの説明を受けてください」

そう言われた拓也達はレトの後をついていき、さらに奥の部屋へと入っていった。そして部屋にはイヴ一人が残った。

「彼がアダム。やっと会えた。これで私達は未来へと希望を繋げることが出来る」

イヴは独り言をつぶやくと椅子へと座った。

『お疲れだな。イヴよ』

その声に驚いたイヴは椅子から立ち上がり、声の主を確かめようと辺りを見渡す。しかしそこにはなんの姿もない。イヴが、呼吸を整えようと一息ついたその刹那、イヴの上から黒い網のようなものが振ってきた。それは粘液のようなものでイヴの身体から自由を奪った。

『もがけばもがくほどそれはお前に絡まるぞ。イヴよ』

するとイヴの背後から声が聴こえた。イヴは、後ろを振り返る。そこには、黒をベースとした人間よりも爬虫類に近い形をした生物が立っていた。

「レ、レプタリアン……！ なぜここが」

『後をつけてきたただけさ。あの二機はおとりだったのだ。お前達の居場所を探るためのな。まさか本当に火星にいたとは驚きだがな。とにかくこれでお前は捕らえた。一緒に来てもらおうぞ』

そう言つと、イヴの身体に絡まっている粘液のようなものを引っ張りイヴごと連れて行こうとした。

「イヴ……、レトが呼んできてくれって」

そこにイヴを呼びにきた拓也が現れた。拓也はその状況を見て驚く。

「な！ なんだおまえは！？」

『アダムか。これはいい。お前も一緒に連れて行ってやろう』

「アダム！ 逃げなさい！ あなたの、地球人の肉体ではこいつらには勝てません。私なら大丈夫。今は逃げることを考えるのです」

「で、でも……」

拓也はイヴの言葉を聞いて戸惑っていた。目の前にいるのは見たこともない得体の知れない生物。足もすくむし、なにがおきているのか理解にも苦しむ。

「アダム、あなたまで失ってしまつては我々がレプタリアンに勝つ全ての手段が失われてしまう。悔しいのは分かります。でもここは逃げてください。未来に希望を繋げるために」

「俺達に勝つ？ それこそ無駄な話だ。面倒だ。今ここで殺してやるよ」

「アダム！」

イヴの声に拓也は少し後ろに足を引いた。そして、足元にあるスリッパを足で踏んで押した。その瞬間轟音と共に拓也の前に銀色の分厚い壁が競りあがってきた。

「むっ！ なんだ？」

「これは鉄壁の防御。これであなたは今アダムに手を出すことはできない。さあ連れて行くのなら私だけ連れて行きなさい」

「ふん、まあいいさ。お前がいれば十分だ」

そう言つと、レプタリアンはイヴを担ぎ上げ、人間離れた跳躍力で自身が用意していた。航空機へと乗り込んだ。そして、その航空機で他の航空機と一緒に遙か遠くへと飛び去っていった。

「拓也、なんだ今の音は？」

レンが轟音を聞いて駆けつけてきた。そこには銀色の壁があり、その前には拓也が腰が抜けたように座り込んでいた。

「なんだ？ 一体なにがあったんだ？ 拓也、イヴは？」

拓也はレンの存在に気がつく、ゆつくりと立ち上がり、レンのほうに振り向いた。そして、みんなを集め、今あったことを話し始めた。

「アダム！ なんてことを！」

レトが拓也に責め立てる。

「やめろ！ 拓也が悪いわけじゃない。仕方がない状況だったんだ」

「たつくん……」

拓也は俯きながら、一言も言葉を発せようとはしない。相当の後悔の念に押されているようだ。無理もない。どうしようもない出来事。無力な自分。そして、敵から逃げ、イヴを渡してしまった後悔。

「アダム、あなたの力を信じてここへ連れてきたのに。これでは意味がない。結果としてあなたは最も大事なものを失ったのです」

ずっと、俯き沈黙していた拓也が顔を上げた。

「イヴを助け出す。あの時、確かに俺はなにも出来なかった。でも、このままじゃ駄目に決まってる」

「助け出すってまさか……」

拓也は静かに頷く。

「敵の本拠地。敵の母船へと侵入する。そしてイヴを必ず助け出す」

その言葉に全員が驚きの表情を浮かべた。

「アダム。先ほどはつい感情的になってしまいました。ですが、それではイヴの意志はどうなります？ イヴのことだから彼女があなたに逃げるようにいったのではないですか？ あなたが敵の本拠地に乗り込めば、イヴがあなたを逃がした意味が」

「どのみち、一人の人間を救えないようじゃこの宇宙を守るなんてできやしないさ。俺はイヴを助け出す。そしてレプタリアンの抗争をも終える」

「抗争を？ それは戦いを放棄するということですか？」

「違う。和解するんだ。とてつもない科学力を持っているんだろ？ それだけの知識があるのならきちんと話をすれば分かってもらえるはずだ」

その言葉にレトは顔を曇らせた。

「ですが、それでは！」

「レト、俺達の目的はなんだ？ レプタリアンを絶滅に追い込むことか？ それとも宇宙を守ることか？」

「それは……」

レトは拓也の質問に答えることが出来ずにいた。

「俺達の目的はレプタリアンの絶滅じゃない。この広大な宇宙を守る事だろ？ 目的を見失うな。宇宙を守るのに犠牲は必要ない」

拓也の決意にレトは口を開くことなく、静かに聴いている。

「アダム。あなたの考えは我々からすれば甘すぎる。でも……、だからこそ、イヴはあなたに全てを託したのかも。わかりました。ついていきます。あなたに。イヴを助け出しましょう」

その言葉にレンや美奈も頷いた。

s e a s o n 1 5 - 5 決意（後書き）

これにてseason15は終わりです。物語はいよいよ最終佳境へ！次回もよろしく願いします。

レプタリアンによってイヴを連れ去られた拓也達は、イヴを助けるために宇宙空間に滞在するレプタリアンの母船へと進入を決意した。そのために、レトは出来うる限りの装備を航空機に積んだ。そしてレトの手には、謎のスイッチが握られていた。

「アダム、これを」

そう言い、レトはそのスイッチを拓也に手渡した。

「これは？」

「これは、空間転送機の端末です。スイッチを押すだけで簡単にセツトされていた物質がその場に出現します」

「空間転送機？」

「これが、あなたを飛行機の墜落から守り、そして月へと着陸させたモノの正体です。そして、この端末にセツトされている物質こそ、現在も地球で浮かんでいる【巨大水素爆弾イワン】です」

レトの言葉に拓也は驚いた。このスイッチを押すだけであの巨大な水素爆弾がこの場に現れるなんて。

「レト、俺達の目的はレプタリアンの殲滅じゃないっていったらど？」

「分かっています。だけど、もし万が一それが必要となった時はそ

れを押してください」

レトの真剣な眼に押され、拓也は仕方なくそのスイッチを持っておくことにした。

準備を終えた拓也達は、再び宇宙へと飛び立つために航空機へと乗り込んだ。航空機はエンジン音を上げて、一気に加速し、宇宙空間を目指して飛び上がった。そして、あっという間に宇宙へと飛び出した。

「アダム、なにか作戦はあるのですか？」

「……、ないさ。正面から突っ込む」

「それは、無茶ですよ」

「もう、小細工は必要ない。レト、お前と美奈さん、レンはこの航空機に残っていてくれ。俺が一人で行く」

「そんなの駄目よ。私も一緒にいくわ」

「気持ちは嬉しいんだけど、今回ばかりは駄目だ。美奈さん、レン。イヴが連れ去られたのは俺の責任だ。俺にやらせてくれ」

拓也は美奈たちの心配をよそに己で全てのことに決着をつけるつもりでいる。

「分かったわ。私達はこの船に残って、この船を守る。けどたっくん、もし帰ってこなかったらその時は私があなたを殺すからね」

「わかった。約束するよ。殺されたくないからね」

拓也は一瞬ニツコリ笑ったが、すぐに真剣な表情に戻った。

「では、アダム、この小型の航空機を使ってください。たいした機能はないですが、瞬間的なスピードではこの船よりも勝ります。敵の攻撃を避けるのにも役に立つかと」

「ああ、ありがとう」

こうして、拓也は小型の航空機に乗り込み単独宇宙へと飛び出した。

「ふう」

一人になると拓也はため息をついた。

「うまいこと巻いたと思ってるのか？」

その声に拓也は驚いた。後ろを見ると、船に残っているはずのレンが立っていたのだ。

「レン？ なんでここに」

「お前を死なせないためさ。お前、自爆するつもりだっただろう」

その言葉に拓也は驚いた。

「レプタリアンを殲滅させるのが目的じゃない。それは分かっているけど、それ以外の方法はない。だから自分の命も共に消して宇宙を守ろうとしたんだろう。付き合いが長いし、共に死線をくぐってきたから、お前の考えそうなことは分かるさ」

「レンには全てお見通しか。その通りさ」

「だけど、俺は意地でもお前を死なせはしないぞ。みんなで一緒に地球に帰るんだろ？」

気がつくとも目の前には巨大な宇宙船が見えてきていた。レプタリ

アンの母船だ。レプタリアンたちも拓也達の存在に気がつき、船を攻撃してきた。レーザー光線のようなものを何本も放ってきたのだ。だが、拓也達ののる航空機はかなりのスピードを持っていたため、それをことごとくかわし、母船へと近づいていった。

「見る！ あそこが入り口だ」

レンが指差す先には敵の母船から出てくる無数の敵の航空機。そして、その場所こそが内部へと侵入できる唯一の場所。拓也は操縦桿を握り、入り口へと船を進めた。敵の攻撃は一向に止むことはない。

だが、覚悟を決めた拓也の腕は拓也が持つ操縦技術を高め、見事に敵の母船の内部への進入に成功した。

だが、内部に入ってから敵の航空機は拓也達の船目掛けて攻撃を仕掛けてくる。拓也達は入り組んだ敵の船の内部を航行しながら、攻撃をかわし、さらに内部へと迫っていった。

「あ、あれは何だ？」

拓也がある物体に気がついた。

それは、母船の中にあり、とても巨大でまるで心臓のような感じで鼓動を持っていた。誰が見てもあきらか、それはこの船の中枢であり、すべての情報が詰まったメインコンピューター。レプタリアン達の科学の結晶である。

「拓也、あれを破壊するぞ。俺に作戦がある。お前は、イヴを探し出せ」

そう言つと、レンは近くの場所に降ろすように拓也に指示をした。

「レン、気をつけて、必ず迎えにくるから……」

「ああ、イヴのことは頼んだぞ」

そういつと、拓也は再び飛び、イヴを探しに行った。

レンの手には、拓也が預かっていたはずの移送装置が握られていた。

再び飛び上がった拓也。そして、心臓の後ろに回る。そこにはまるで大聖堂のような広場が広がっていた。そして、その中央にはイヴとたくさんのレプタリアン達がいた。イヴは中央で縛られている。これから処刑をしようとしていたようだが、幸いまだ生きている。

拓也は、広場からよく見えるところに現れてしまったため、すぐにレプタリアン達に見つかった。そして、地上から後ろから迫る航空機からと攻撃を受ける。さすがの拓也もそれを避けきけることは出来ず、墜落させられてしまった。

なんとか軽傷で済んだものの、引きずり出される拓也。

「アダム！」

「アダム、そうか。お前が人間の種だな。ふん、まさか自分から来てくれるとは、こちらから探す手間が省けた。お前も一緒に処刑してやる」

拓也はレプタリアンに捕まり、一緒に縛られた。

「ククク、これで、邪魔者はいなくなる。これで、地球を含め、全宇宙は我々のものだ」

レプタリアンの一人が言う。

「勘違いしないでよ」

イヴがそのレプタリアンに言う。

「あなたが私達を処刑しても、この宇宙はあなた達のものにはならない。必ず、あなた達と戦うものが現れるわ。私達がそうしたように。あなた達はいずれ滅びる」

「ふん、そんな状況でよくそれだけのことが言えたものだ。状況を良く見る。お前達が我々に勝てる最後の望みそのものがここで囚われているのだぞ！」

「状況を良く見るのはあんた達のほうだよ」

拓也が話に割って入る。

「用意は出来た？ レン？」

「ああ、バッチリさ」

その声に気がつき、レプタリアンは遙か後ろを見る。そこには、レンが手に移送装置を持って立っていた。

「さよならだ。レプタリアン」

レンはそのスイッチを押した。その瞬間、その広場にぎりぎり収まるくらいの巨大な水素爆弾が姿を現した。

レプタリアン達は驚いている。その隙に、レンは二人を助け出し、用意していたレプタリアン達の航空機に向かった。

レンの用意した航空機に走る拓也達。その瞬間後ろから銃声が聞こえた。だが、それは、拓也が受けたものではなかった。それはレンの胸を突き抜けていった。そしてレンはその場に倒れこむ。

「レン!!」

「ぐ……、拓也、止まるな。行け!」

しかし、さらにレンの身体を突き抜けるものがあつた。後ろを見ると一体のレプタリアンが銃を持って撃つてきている。最後の死の間際の冷静さをうしなつたレプタリアンである。

「置いていけるわけないだろ!!」

「どのみち、俺はここで死ぬつもりだったのさ。レプタリアン達の航空機は元々二人乗りだ。この三人の中で生きるべきものは、俺みたいな小汚いハッカーなんかじゃない。アダムとイヴ。二人の種を持つものだ。もうすぐ、爆弾が爆発する。その前に早くいけ! 俺の努力を無駄にしないでくれ!」

「でも、あなたが死んでしまつては意味がない」

イヴは食い下がる。

「レン、俺はお前のことを絶対忘れない。必ずこの宇宙を平和にしてみせる」

「ああ、約束だぜ」

レンと拓也はお互いの拳を合わせた。すると、レンは立ち上がり、レプタリアンのほうを見る。拓也はイヴを無理やりひっぱり走っていく。

「待てよ、レプタリアン。最後の悪あがきつてのも立派だね。どれだけ科学力が発展しても所詮中身は獣か。お前達も俺達人間と同じだよ。お前達がしてきたことは罪だ。それは裁かれる。そして、それは今だ」

「黙れ！ お前達のおかげで全てが無駄になった。我々はお前達とは違い高度な生物なのだ。生き残るのは本来我々であり、お前達ではない。必ずそれが分かるときがくる。いずれな。そして、第二のレプタリアンとなるのだ」

「それは、間違っていないかもな。今のままでは俺達は、お前らとなんら変わらない。ただそれを行っているのが宇宙か地球かの違いだけ。いずれ科学が発展し、お前らのように自由に宇宙にできることが出来れば、俺達は第二のレプタリアンとなる。だが、俺達には拓也が、アダムがいる。あいつなら、きっと人類を正しい方向へと導いてくれる」

「そんなのは戯言だ。現に我々を滅ぼすしか道がなかったではないか」

「今は、まだ。それしか出来ないんだよ。俺達はまだまだ心の成長が足りないんだ。お前らもそれは同じだろ？」

「お前らと一緒にするなあ！！」

レプタリアンはレンに襲い掛かっていった。しかし、その瞬間船内は閃光に包まれた。

「イヴ早く、こっちだ!」

「でもアダム、あなたの仲間が、犠牲になろうとしている。これは我々が望むことはありません!」

拓也はイヴの腕を掴み、必死に走っているが、イヴは相変わらず食い下がる。

「俺も、レンを犠牲にするつもりなんかないさ。レンなら必ず助かる。俺はそう信じている」

「でも、この状況で彼が助かる道なんか……」

「俺達が信じることを止めたら、それこそレンの想いは無駄になっちまう。俺達はレンを信じて一刻も早くこの場から離れるしかないんだ」

拓也は、レンが用意していたレプタリアンの航空機を見つけた。そして、その航空機に急いで乗り込む。

「信じる……。それが、あなたの見出した道ですか?」

「こんな時に、まだいつてんのか? そうだよ。人を信じる事が出来なくなったらお終いだろ?」

イヴは少し沈黙する。

「分かりました。それが、あなたの見出した道なら私達はそれに従いましょう。彼は生きて生還することを信じて、この母船から爆弾が爆発する前に脱出しましょう」

拓也はイヴを見ながら笑う。

そして拓也は、船を起動させ、それを操縦して、母船からの脱出を試みる。複雑な迷路のような通路を通り、来た道を引き返す。すると後ろから敵の攻撃が再び拓也たちを襲う。

「ちつ。しつこいんだよ。いつまでも……。俺達は生き残る。邪魔をするなあ！」

その時一瞬、時がとまった。激しい閃光と共に、衝撃が空気を伝う。

爆弾の爆発の衝撃が拓也達に襲い掛かる。まだ出口までには多少距離がある。後ろの敵は衝撃に飲み込まれ、すでに消滅している。

「うおおあああお！」

拓也が必死に叫びながら、航空機を出口へと向かわせる。

しかし、無情にもその圧倒的な衝撃は拓也達の船をも飲み込み、そして、遂にレプタリアンの母船そのものを完全に破壊した。その衝撃はまるで星が一つ消滅するほどのものだった。

そして、そこには何もなくなり、宇宙空間だけが広がっていた。

一方、こちらは美奈たちのいる船。

「レーダーから、機影が消えました。生体反応もありません」

「ちょっと、どういうこと？ 生体反応がないって」

美奈がレトに掴みかかる。

「恐らく、イヴやアダムは……」

「そんな、嘘よ。たっくん、レン、イヴ」

美奈は心配そうに、窓から外を眺める。

Season 16 - 5 別れ（後書き）

大変遅くなり申し訳ありません。かなり急ぎで作ったものです。時間がある時少しずつ訂正していきます。次回で最終章です。出来る限り早く仕上げUPします。

読んでくださってる方本当にありがとうございます。

そこは、白い空間。

なにもなく、静寂でなにも感じることは出来ない。言葉も気持ちも全てが無。

それなのに全てが、見透かされているような、そんな透き通った感覚だけが宿っている。まるで宇宙の一部となったかのような。

そんな空間で拓也は目覚めた。

「ここは……」

目覚めた拓也は辺りを見回す。そこはなにもない白い空間。周りには誰もいない。ただ一人の人間だけが存在する。

「おれは、死んだのか？」

そう思うのも無理はない。なにもなく、感覚も乏しい。全てが透明な場所にいるのだから。だが、拓也はそれと同時に自分に息づく鼓動も感じていた。それは確かに生きている感覚。

『あなたは死んだわけではありません』

どこからともなく、『声』が聴こえてくる。それは直接頭に、心に、気持ちに聴こえてくる不思議な声。拓也はその声の主を探した。

『探しても私を見つけることはできません。私は実態のない意識体

なのですから』

「意識体？　ここは、どこなんですか？」

『……果て。あなた方が宇宙の果てと呼ぶところです』

「宇宙の……果て。なんで、そんなところに」

『私にもわかりません。いままで何百億年と生きてきてこの場所に
来たのはあなたがはじめてですから』

「何百億年？　それって……」

『そう、あなた方の宇宙が生まれるずっと昔。その遙か以前から、
私はここでこうして、あなた方の宇宙を見してきました。御覧なさい』

意識体はそう言うのと、拓也の目の前にいくつもの黒く丸い物体を
表示させた。拓也はその黒い物体を見る。

「これは……宇宙？」

『そうです。それら一つ一つは、一個の宇宙なのです。最初は、も
っと多くの宇宙があった。今は、当時の数の半分以下まで減ってい
ます』

「それはどういう？」

『滅んでいるのです。今もホラ……』

そう言うと拓也の前にあった一つの宇宙が突然ゆっくりと静かに

消えた。

「そんな……。それじゃあ今の二倍以上あった宇宙全てが滅んだというんですか？」

『そうです。そして、あなた方が住まう宇宙も今のままではいずれ滅びるときがきます』

拓也はその言葉に驚きの表情を浮かべた。

「滅ぶ……」

『私は、ここに生まれ意識が出来た時点からこの多くの宇宙を見守ってきました。私はあなた方のいう神なのかも知れないし、私を創ったほかの誰かがいるのかも知れない。ただ最初からここにいたのかもしれない。それは私にも決して分かりません。ただ私は確かにここに存在し、そして、これらの宇宙を見守るという確かな存在理由がある』

拓也は意識体の言葉を静かに聞いている。

『けど、宇宙の数は減るばかり、元々そういうもののなか。それとも他の力が働きそうなるのかはわかりません。そして、全ての宇宙が消滅したとき、私はどうなるのかも……』

「どうすれば、滅ぶのを防ぐことが出来るのですか？」

『それは、私にもわかりません。ただ、滅んだ宇宙には共通点があります』

「共通点？」

『それは、争いです』

その言葉に拓也はハツとした。

『どの宇宙でも必ず争いが起きています。宇宙で生まれる生物は元

々がそういう創りなのか、どうかは分かりません。ただ争いは細胞同士の争いから、生物同士の争いへと発展し、村での争いに発展し、国での争いに発展し、やがては宇宙全体での争いにまで発展します。そうして規模が大きくなった争いの結末は必ず……滅びです』

「……争い」

『争いが宇宙の滅びと直接関係しているかどうかは分かりません。ただ、争いの遅い宇宙の全てが、いまだに消滅せず残っていることを考えれば、争いのある宇宙の結末は滅び。あなた方の宇宙でも、それは同じです』

拓也はその言葉にいままでのことを思い出していた。確かに、拓也の住む地球ではいままで多くの争いが繰り広げられてきた。そして、それは宇宙でも同じだった。そして、それを解決するためにはまた争うしかなかった。

「どうすれば、争わずに済むのかな？」

『それは、分かりません。ただ、私は思うのです。誰しもが悲しみを背負って生きていく世界よりも、誰しもが笑ってくらせる世界のほうが楽しいと。ここから見えるのは滅びだけではありません。いろいろな生物がいろいろな感情を持って、いろいろな生活をしている様子が見えます。笑い、泣き、怒り、悲しむ。そして、人が人のやさしさに触れるとき、どんな生物も一番幸せな笑顔を見せてくれます。私は、その笑顔をみるのがとても大好きです』

「それが、俺達の存在する理由」

『そう。滅ぶための存在ではなく、未来へ心を繋げるための存在』

イヴも同じことを言っていた。未来へ繋ぐ。

『あなたが、ここに来たのにも必ず何かしら意味があるはずです。誰も知りえることの出来ない。宇宙の現状を知った。あなたが、帰還してからなすべきことはありますか？』

「あります」

『よかった。あなた方の宇宙が滅びの道へ進まないことを願っています。さあ、もう帰りなさい。あなたの仲間があなたの帰りを待っていますよ』

「仲間……」

意識体がそう言うと、拓也の遙か頭上が綺麗な青色の光を発している。それは生命の青。海の、空の。全ての命の源。拓也はまるでその空間に吸い込まれていくかのように空中に浮遊した。

『さよなら、アダム。話が出来て楽しかったです』

次に拓也が目覚めたのは航空機の中だった。横にはイヴが眠っていた。

「……夢？」

拓也は自分でその感覚を確かめた。

「いや、あれは夢なんかじゃない。俺は確かに行ったんだ。宇宙の果てに」

拓也の疑問は確信に変わった。

一方、こちら美奈の乗る宇宙船。

「え？ レーダーに、一機船が現れました。そんな今までの場所にはなにもなかったのに。生体反応も二つ。これは……」

「たつくんよ！ たつくとイヴだわ！ 通信繋いで」

レトは美奈に言われた通りに船に通信を繋ぐ。

「ちょっとたつくん！ 返事して！ たつくんなんですよ？」

『…………』

雑音が少し混ざっているが、スピーカーの向こうからは確かに人の息づかいが聴こえてくる。

『…………美奈さん？ 俺、拓也だ。イヴもいる。俺達助かったんだ』

その瞬間、船に乗っている全員から歓声がこだました。

『美奈さん。レンは？』

その言葉に、美奈の声は停まった。

「レンは……」

『レンは、大丈夫でしょ？ 分かるんだレンは生きてる。そうでしょう？』

「なんでもお見通しのようね。そうよ。いまさっきレンから通信があったわ。レンは例の空間移転装置を使って、今地球にいるわ。まあ、元々爆弾があったのがエリア51の中だからレンもそこにいるみたいけど」

『そっか、良かった。レンを信じて。さあ美奈さん。俺達も帰ろう。地球へ』

「うん」

レトは笑顔で拓也達の航空機のほうへと向かった。

レトは無事に拓也とイヴを回収し、一つの船で地球へと向かって
いた。イヴとレトは途中の月で降りるようだが。

「イヴはまだ眠ったままなのか」

「ええ、相当疲れてたんでしょうね」

拓也は船の食堂でコーヒーを飲みながら美奈と話をしている。

「ねえたつくん。あの時、いつたいなにがあったの？ あなた達の
船はリーダーに映ってなかったのに突然現れたのよ。なにがどうな
ってるのやら」

「……宇宙の果てに行ってたんだ」

「え？」

拓也は美奈に宇宙の果てであつた出来事を全て話した。そして、
これからなすべき事も。

「そう、そんなことが。……争いか」

「俺達が今回レプタリアンにとつた行動も、それとまったく同じだ。
正直いって俺達がやったことは間違っていた」

「そうね。確かに間違っていたのかも知れない。でも、いつでも正
しいことが出来るとは限らないのよ。だからこそ人は苦悩して、悩

み、本当に正しい出来事を見つけていく。私達はまだまだ未熟」

「うん。俺達にはまだまだ出来ることがたくさんあるんだ。それはどんな小さなことでも確実に。それはやがて世界を変えるようなことになる」

「私達で変えていきましょう。だって、私達には、こんなにたくさんの仲間がいるじゃない」

美奈と拓也は見渡す。そこには、地球から通信してきた多くの仲間達の姿が映し出されている。

いままで多くの人と関わってきた。いろんな人の助けと協力があった。

戦いもあった。

悲しみもあった。

嘘もあった。

真実もあった。

笑いもあった。

そして、そこには確かに命があった。

これらのことは永遠に記憶に刻まれ、永遠の想いへと繋がるそれ

はやがて未来へと繋がり、そして、全てが変わるときがやってくる。
争いのない真の姿へと。

Season 17 - 5 地球

あの後、拓也達は地球に帰還した。レンも無事に戻ってきた。

そして、それから数ヶ月後、拓也達は、みんなで海に遊びに来ていた。

「うおー！ あちー！」

それを言ったのは拓也だった。今日の天気は晴れ、とても夏らしく浜辺の砂が熱を持っている。

「早く、海に入ろうぜレン！」

レンは拓也と海へと向かう。

「まったく、いつまでもガキなんだから」

「けど、そんな彼らといるのが楽しいんだろ？」

美奈といるのは黒人のブラッドだった。

「うん、まあね」

「デイビットはまだ、買出しに行ってるの？」

「ああ、あいつのことだから、日本の文化とか見つけてぶらぶらしてるんじゃないか？」

「相変わらずね。相変わらずって言えば、彼らもそう。あれだけ、たくさんの戦いをして、死にかけて、それでもなおかつ笑顔でいることが出来るなんて、相変わらず馬鹿よね。たっくんもレンも。あれ？ 確か、レンって泳げなかったはずじゃ……」

「レン早くきてよ。なにやってんの？」

レンはなかなか、海に入ろうとしない。

「……おれ、実は泳げないんだよ」

「え！？ マジで？ 美奈さんのいつてることホントだったんだ」

拓也はレンの後ろに周る。そして、レンを押す。

「わわっ！ やめろよ！ おぼれるじゃねえか！ だいたい、人間が水の上に浮かぶなんて物理の法則に反してるんだよ！」

「そんなことないって！ ホラ、俺が泳ぎ方教えてるからさ！ 美奈さん！ 美奈さんも、ブラッドも泳がないの？ 冷たくて気持ちいいよー！」

拓也は笑顔で美奈のほうを見て手を振る。それに答えて美奈もブラッドも拓也達のほうへと向かう。

この宇宙が誕生して約130億年もの月日が流れた。

地球が誕生したのは約46億年前。

そして人類の誕生はわずか、400万年前。

この宇宙が誕生してから莫大な時間が経っているのに、この星に住む生命は、自分達の宇宙のことをなにも知らな過ぎるのではないだろうか。この宇宙に我々地球の生物以外に生命は存在するのか、存在するならどんな生物なのだろうか。我々はどこからやってきて、いかにして生まれ、そしてどこへいくのか。

果たしてこの広大な宇宙の支配者とは誰なのか……。

宇宙の壮大な謎が解き明かされるときはくるのだろうか……。

すべての謎が明かされたときその先に待つものは……。

きっと、誰もが笑顔で住むことが出来る平和な世界。

我々が生まれた海のように綺麗で澄んだ……心地よい世界。

了

season 17 - 5 地球（後書き）

この作品を最後まで読んでくださり本当にありがとうございました。長い話だったので、途中何度も更新が止まってしまい一年以上の連載となつてしまい、みなさまにはいろいろと迷惑をおかけしましたが、ようやく完結することが出来ました。これも、応援してくださった方がたのおかげです。文章的にまだまだ至らない部分があるので、時間がある時に少しずつ修正していきますが、ストーリー的にはほぼ自分の望むように出来たので満足しています。ほんとうにほんとうに長い間ありがとうございました。また次回作でよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6345a/>

UNIVERSAL MANAGER

2010年10月9日06時22分発行